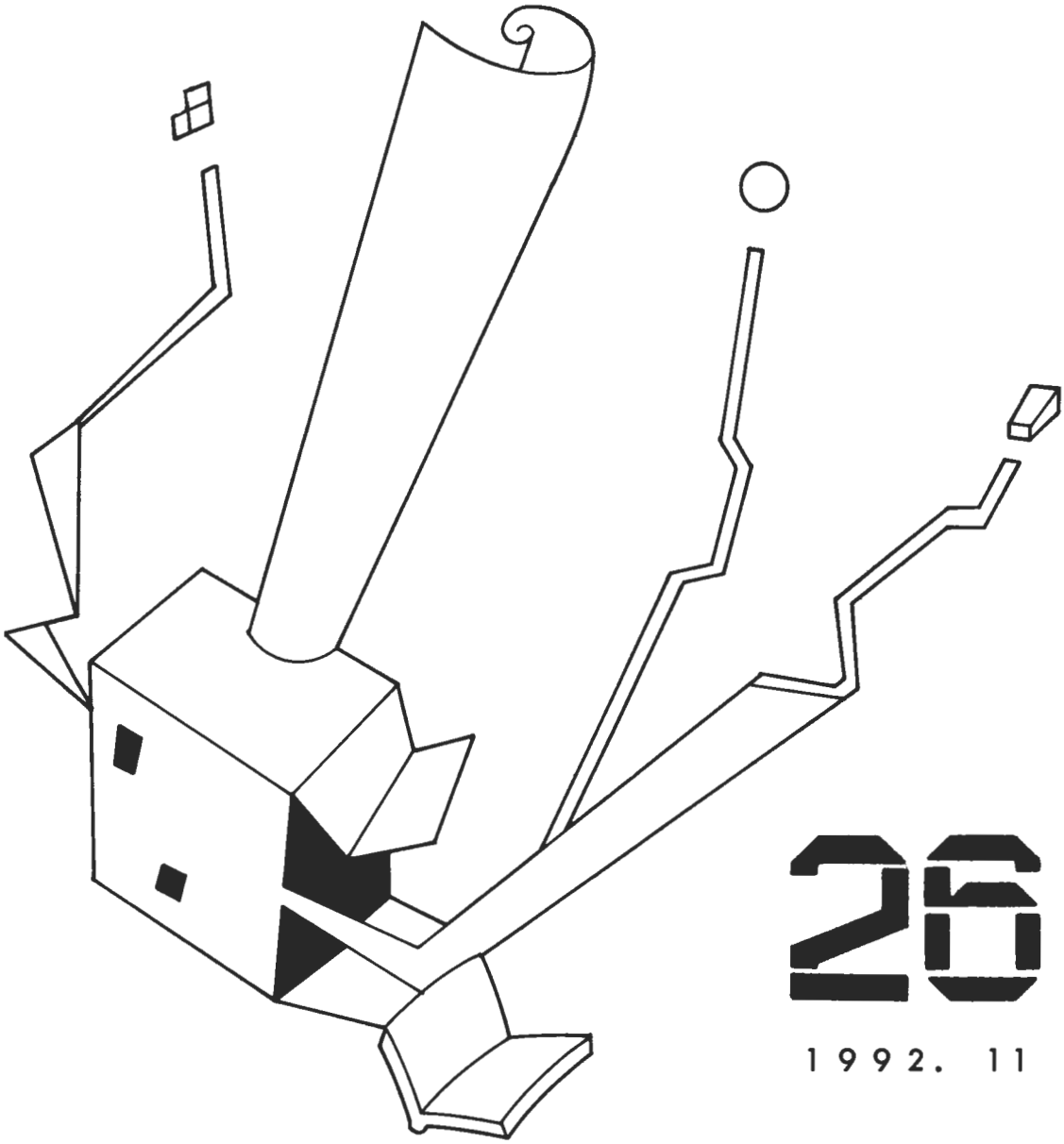
ISSN 0913-0705

KUIC

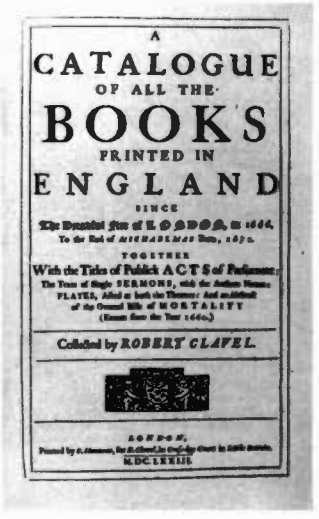


26

1992. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

クラヴェルの『英国出版四季報』
――書物の存在は目録によって知らされる――


A
CATALOGUE
OF ALL THE
BOOKS
PRINTED IN
ENGLAND
SINCE
TOGETHER
With the Titles of Publick ACTS of Parliament;
PLAYES,
of MORTALITY
Collected by ROBERT CLAVEL.
LONDON,
M.DC.LXXIII.

Clavel, Robert. Term catalogue: A catalogue of all the books printed in Er.gland since the dreadful fire of London, in 1666. Printed by S. Simmons and others for R. Clavel at London, 1673-1680.

書物が商品として流通しはじめた頃は，商人がいろいろな商品とともに，印刷したての書物見本や広告ちらしを手にヨーロッパ各地を廻り，販売していた。16世紀半ばに，フランクフルト・ブックフェアが開催されるようになると，バッセやドラウドなどによって刊行された書籍販売目録（義塾図書館架蔵）が，書物の流通に欠かせないものとなる。

かくして，書物の存在は，古来より，書誌や蔵書目録とともに，出版・販売資料情報媒体によって，その時代その時代の世界の広がりの中で，人々に知らされる。また，それと同時にそれらは，それぞれが発生した時代とその時代の世界を越え，後の世の人々に，かつての人々の知的生産の跡をたどる手がかりを与えてくれる。

ここにとりあげたクラヴェルの『英国出版四季報』は，17世紀後半の40年間に英国で出された出版・販売目録である。この種のものが英国ではじめて出されたのは，書籍商マウンセルによる『英国出版物総目録』（1595年）である。それ以後この事業は，ジャッガード，ロンドンを経て，クラヴェルに引き継がれ，彼は，本書を1668年から40年続けた。出版・販売目録は，それ以降もさらに数々の出版関係者によって，いろいろな標題，いろいろな形態で刊行され，さらに18世紀から19世紀にかけて，『ロンドン書籍総目録』や『英国書籍総目録』（いずれも一部架蔵）に引き継がれ，そしていま，ウィタカーの CD-ROM 版『ブックバンク』につながっている。

（渋川　雅俊）

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 26

目　次

1……情報化と沈丁花　倉沢康一郎
2……新情報化時代への適応　加藤隆一

＜特集＞　新しい研究・教育支援システム

3……KOSMOS 計画とその概要　落合啓一
10……キャンパスネットワークとその利用　大賀裕
14……書物も情報も，そして情報処理も
—メディアネットとメディアセンター計画の背景と経過—　渋川雅俊

19……図書館の思い出 ＜ティールーム＞　井上輝夫
20……医学情報センター所蔵の古医書　窪田よし
23……三田情報センター所蔵の古医書　山下光雄
28……総合資料室にて ＜スタッフルーム＞　上原順子
29……三田の図書館とドイツの図書館
—私の海外研究生活の経験から—　加藤久雄
32……雑誌の乱れと書架スペース ＜スタッフルーム＞　樋口三恵子

KULIC のノウハウ

33……KOSMOS の運用とサービス　医学情報センター
37……サインシステムその後 —利用案内検討会調査結果—　広田とし子
41……図書館（旧館）の環境整備に向けて
—旧館書庫の温・湿度調査—　風間茂彦

43……湘南藤沢中等部・高等部図書室　原田悟
45……ニューヨーク学院図書室の整備と今後　南野典子
48……「世界之寶」「萬民寶」＜ティールーム＞　関場武
49……三田における資料展示の流れ　小沢恒二
53……走れ，医学図書館員＜スタッフルーム＞　西出真紀子

＜資　料＞

54……情報センターの刊行物
62……研究・教育情報センターに関する書誌
63……スタッフによる論文発表・研究発表
65……年次統計要覧 ＜平成３年度＞
表紙裏…クラヴェルの『英国出版四季報』　渋川雅俊
—書物の存在は目録によって知らされる

70……編集後記　＜表紙＞ 石井真由美　＜カット＞ 柴田由紀子・大橋史子

KULIC 第26号＊1992年11月１日発行＊編集人 渋川雅俊＊発行人 倉沢康一郎
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都港区
三田 2—15—45＊電話 03（3453）4511（内線 2501）＊印刷所　㈲梅沢印刷所

情報化と沈丁花

倉沢 康一郎
（三田情報センター所長
法学部教授）

三田の新図書館6階にある情報センター所長室の窓は，塾監局前の大公孫樹をはさんで赤煉瓦の旧図書館に対い合っている。この配置は，直接的には設計者の美意識を表わしているわけであるが，所長に着任したての私にとっては，大学図書館の歴史的なパースペクティブを具象化しているもののように感じられて，まことに印象深い。

旧図書館の脇には，「図書館の前に沈丁咲く頃は恋も試験も苦しかりにき」と刻まれた吉野秀雄の歌碑が立っており，折しもその沈丁の花の散り終わらんとしているのが，目をこらせば所長室の窓から見ることができる。私にとって「恋も試験も苦し」かった三田の学生時代（昭和30年代初頭）は，図書館は千古の知識を奥に秘めた「狭き門」をもつ厳然たる城であった。図書館にいつかは入って行きたいという好奇心と願望は常に抱いていたけれども，恋も試験も苦しいなどという無頼の生活を送っている間は，とうていその資格がないもののように思えたのである。

かつて，知識―今様のコトバでいえば「情報」―はひと握りのエリートのものであり，多くの人々にとっては憧れか怖れの対象でしかなかった。だからこそその知識をえる機会を与えられたごく限られた者は，精進潔斎してそれを活用すべき義務を負ったわけである。しかし今は，知識がそのような「狭き門」の奥に蔵されているべき時代ではない。それは大学が大衆化され，志と努力さえあれば誰に対しても開かれているということの他に，現代的情報の特質が，それ自体が空間を超えて飛び廻る性質をもっているということにもよる。

今でもなお，旧図書館の入口を入ると，2階の旧閲覧室に向かう柱廊や階段は暗く，つきあたりのステンドグラスは美しいが，しかしあくまでも荘厳である。何がしか進んで行くのをためらわせる雰囲気がある。実はこれが，万巻の転籍を蔵する大学図書館の，かつてのありようなのである。

これに対して，新図書館は全く違った顔をしている。その入口は開放的に明るく，中庭の大公孫樹の葉陰の若々しいキャンパスライフが，そのまま延長している。そしてこれこそが，現代における情報のあり方に対応するものであるといえよう。そこにはもはや「恋も試験も苦しかりにき」という青春の憂愁は存在しえないようにさえ見える。

新しいものには，その新しさを生みだす歴史的な必然性があり，したがって，現代的意義があるはずである。われわれは，いたずらに旧いものにノスタルジックに執着して，時代の動きを見のがすということがあってはならない。殊に，大学が大学たりえたのはいつの時代にもそれが情報発信基地の機能を担いえたことによるという点を考えれば，慶應義塾がその輝やかしい伝統を生かすためにこそ，研究・教育の中核である図書館は不断に新しい時代に対応して行かなければならないものといえるわけである。

しかし，それと同時にいくら時代が動き状況が変わっても，人間性が続く限り変わらないものもあり，研究・教育の場としての大学はそれもまた見失うことはできないものである。それは学問の研究・教育というものが最も人間的な営為であるということによるものであって，決して「温故知新」などという知識獲得の方法論の問題ではない。

今，明るく開かれている新図書館で語り合う学生もまた，恋も試験も苦しい青春のただ中にいるはずであり，情報の嵐の中でなお，恋も試験も失ってしまった絶望の彼方に自我を形成しつつある若者の一人である。確かに，自我形成のために千古の知識にアクセスする方法は変わる。しかし，それは精進潔斎のスタイルが変わるにすぎないともいえる。その意味で旧図書館と新図書館とはつながっており，旧図書館の前にあえかな沈丁の花が咲く頃には，新図書館の閲覧室に，ふと憂い顔の若き私自身を見る思いがするのである。

新情報化時代への適応

加藤隆一
（医学情報センター所長
医学部教授）

各分野における最近の学問の発達は極めて著しく，発表される文献数はうなぎ昇りに増加している。また，学問の分化・総合化に伴い，思いがけない雑誌に関連文献が発表されたりし，従来の個人レベルの文献情報探索方法では対応できなくなってきている。コンピュータの発達により文献情報探索が専門化・中央化してきており，各研究者は自分の研究室に居ながら最近の文献情報の入手が可能となりつつある。これらの結果，研究者は自分で図書館に行き，そこで文献を直接読むという割合が減少しつつあり，それに伴い図書館の機能も次第に変化する必要があろう。

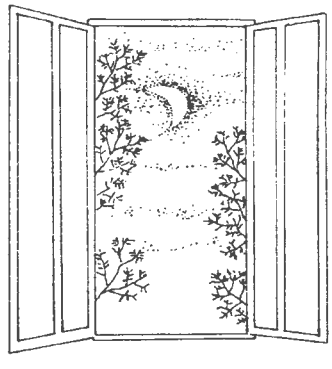
研究者としては情報の中に埋もれてはいけないが，文献情報を見逃して研究のストラテジーを誤り，貴重な研究時間と研究費を浪費してはならない。それゆえ，貴重な文献情報を如何に短時間に，低コストで入手するかが大切である。

新しい情報センターの役割はこれら研究者の要望に如何にうまく対応して行くかであり，そのためには情報センターの職員の知識・技術レベルの向上が不可欠である。

研究者の要望に応じ，適切な情報を常時流していけるシステムを如何に作るか，個々の問題に対応して研究者と話し合い，適切な情報を如何に速く提供できるかのためには，それらの分野に対するある程度の知識が必要とされよう。それゆえ，情報センターの職員はその仕事の分担に応じて，今後とも一層の専門知識・技能の研修が必要とされよう。一方，情報センターの機能の高度化のために，ハードおよびソフトの面で必要な設備投資・近代化資金が必要であり，大学当局のこの点への充分な配慮が望まれる。

しかし，研究者自身の中にも，その年齢を問わず，若いヒトの間にもかなり保守的なヒトもおり，新しい情報システムも取り入れようとしないことがしばしば見られる。これらの者に対する新しい情報システムの有用性と今後おこる必要性をよく理解させるために積極的な啓蒙（講習会などを含めた）が必要とされよう。

一方，最近各方面において大学における教員の能力・業績の評価の必要性が重要視されているが，評価が下手な日本人のために評価方法を如何に客観化するかが大きな課題になりつつある。評価方法の客観化のためには適切な情報は何かということが第一の問題である。ヒトによっては発表論文に impact factor を掛けて総計することがよいとか，発表論文に citation 総数を掛けて総計する方がよいとの意見を主張している。今後これらの客観的な情報を上手に点数化していくことが必要であり，これらの評価システム方法を教員組織と協力して作り上げていくことが，本塾における研究・教育情報センターの重要な課題となろう。さらにこの問題に対する各学部でのきめの細かい対応も必要とされよう。



特集　新しい研究・教育支援システム

KOSMOS 計画とその概要

落合啓一（おちあいけいいち）

（情報センター本部事務室係主任）

KOSMOS は慶應義塾大学の新図書館システム（Keio university System of Multimedia On-line Services）の略称で，富士通が新たに開発した図書館統合システム ILIS/X70（Integrsted Library and Information System/Model 70）をベースとしている。本稿では，この新図書館システムについて，その計画段階から現在までの進展と，機能概要について簡単に述べていく。

新図書館システム計画

平成２年度の湘南藤沢キャンパス（以下ＳＦＣと略す）開設予定を機に，全塾的な研究・教育支援の将来の基盤準備のためのコンピュータ資源を基盤とした情報資源，組織，施設・設備，装置などを統合した「総合情報センター構想（現メディアネット計画，以下この呼称を用いる）」が策定された。この中で，図書館機能は，学術情報の収集・組織・保管・提供という重要な役割を担うと同時に，研究・教育支援のための学術情報基地としての機能を果たすことを求められている。そこでその実現手段の１つとして，全塾の５つの情報センター／メディアセンターの図書館機能を統合する新図書館システムの開発が採り上げられることとなった。

従来からも情報センターではコンピュータを利用した様々なシステム化への取り組みを行ってきており，その成果は三田・日吉・理工学の３センターの閲覧システムである CIRSYS や，支払管理システムである BICC，医学情報センターの受入管理システム MELIC 等のシステムに結実し，一応の成功を収め現在に至っている。しかしながら，これらのシステムは部署や館を越えることができない単体システムであり，全塾の図書館機能を統合することによって，学術情報基地化するという拡張性は残念ながら持っていなかった。これは計算機資源の不足もあったが，慶應の５つの図書館は，それぞれのキャンパスの研究・教育の特徴を反映して，資源の構成，利用の方法，サービス体制なとに多様性があり，１つの大学の５つの図書館というよりも，５つの大学の５つの図書館であるかのような面もあり，これらを１つの共通のシステムで統合するというような大規模なシステムを開発することは，図書館の自己開発能力の限界を越えたものであった。また既存のパッケージシステムの導入も検討されたが，前述のような慶應の状況に十分には対応できないと考えられており，新システムの登場が待たれていた。

一方，前述の「メディアネット計画」遂行上における機能および技術面での支援を依頼している富士通では従来の図書館システムである ILIS に替わる新システム（ILIS/X70）を構想中であったことから，今回のメディアネット計画への一環として，新図書館システム開発に協力を得られることとなり，その開発計画が軌道に乗ることになった。

開発の過程

図書館トータルネットワークシステムの開発計画が現実のものとなり，その実施に向けて情報センターでは平成元年12月にトータルネットワークシステム計画案を作成した。そこでは，新システム計画に当たり，その基本方針を，

1）図書館サービスの多様化に対応できるものとする。
2）図書館業務の効率化とそれに伴う再編成を可能にするものとする。
3）各地区個別の図書館システムではなく，全体で1つの図書館システムとして機能し得るものとする。

4） 21世紀の図書館システムの基盤となり得るものとする。

に置くこととした。

次にこの基本方針に沿って，実際に構築すべきシステムの内容，現行業務の流れ，および新システムへの移行作業手順等を詳細に検討するための作業委員会（後にワーキンググループと改称）を設けた。ワーキンググループは，目録，受入，雑誌，閲覧，レファレンス，会計手続きの各サブシステムごとに設置され，これは各支部センターの業務担当者と本部事務室機械化計画担当とで当たることとなった。また，各サブシステム間の整合性を保持し，統合化を実現するためにトータルシステム作業委員会を設けた。

各ワーキンググループによるシステム開発活動は，平成２年の２月より順次開始され，同年末までに多いグループでは十数回にも及ぶ慎重な検討が行われ，この間に富士通側との連絡調整にも相当な時間が費やされた。

ＳＦＣの開設と共に本部事務室機械化計画担当は，ホストマシンが設置される予定のＳＦＣメディアセンターに移り開発作業を続行したが，平成３年４月にＳＦＣのメディアセンター棟（μ館）が竣工し，ホストマシンが設置され，先行していた雑誌サブシステムの原型が完成し，システムテストが開始された。他のサブシステムも同年夏頃には一応揃い，トータルシステムとしてのテストもようやく開始できる状況に至った。各支部センターの業務担当者の協力を得ながらテストを進めていった結果，同年12月には全地区に先立って，医学情報センターでの実験稼働を開始した。同センターが稼働を開始できたのは，比較的規模が小さい専門図書館であり，利用者が比較的均質（医学関係者のみ）であるためと思われる。また，閲覧システムを持っていなかったことから移行準備が他センターよりも比較的やり易かったこともあるが，IAIMS（Integrated Academic Information Management System）の構築を目指す同センターの熱心な協力があったればこそであった。しかしながら，出来上がったばかりのシステムであったため，初期トラブル等が頻発し，同センターにかなりの混乱を与えてしまったことは残念なことであった。現在他センターおよびメディアセンターでは，現行システムから KOSMOS への移行準備と作業を鋭意進めている状況であり，一部では既に稼働している。

KOSMOS の環境と機能概要

KOSMOS はＳＦＣ のメディアセンターに設置されている FACOM M770/10 をホストとする集中型のオンラインシステムである。図１にこのホストシステムの構成を示す。

このホストから全塾に展開されているキャンパスネットワークを介して，各地区情報センターを結んでいるが，その概要と構成は図２の通りである。各地区情報センターに設置されている端末数は，十数台〜六十数台のホスト用端末（ＦＭＲ系パソコン）と数台の UNIX ワークステーション（S4/LC）である。

KOSMOS は富士通の汎用ＯＳである OS Ⅳ/MSP のオンライン管理システムである AIM（Advanced Information Manager）上で動作するリレーショナルデータベース（ＲＤＢⅡ）＋応用プログラム群および FAIRS 検索システムで構成されており，その概要を図３に示す。

設計の初期段階では，分散型システムも考えられたが，結局のところ信頼性の問題等からこれらの形に落ち着いた。従って，最近の処理技術を導入した部分はなく，これまでに確立した技術の集大成を図ったものであると言え，昨今のダウンサイジングの潮流とは縁遠い戦艦大和のようなシステムになってしまったのは否めないところである。

KOSMOS のデータベース

KOSMOS のデータベースは ＲＤＢⅡ 上のメタデータベースの配下にある8つのスキーマ（書誌，所蔵，受入，予算，閲覧，典拠，運用管理，トランザクション）の下の表形式（テーブル）で格納されている。テーブルの数は80以上にものぼ

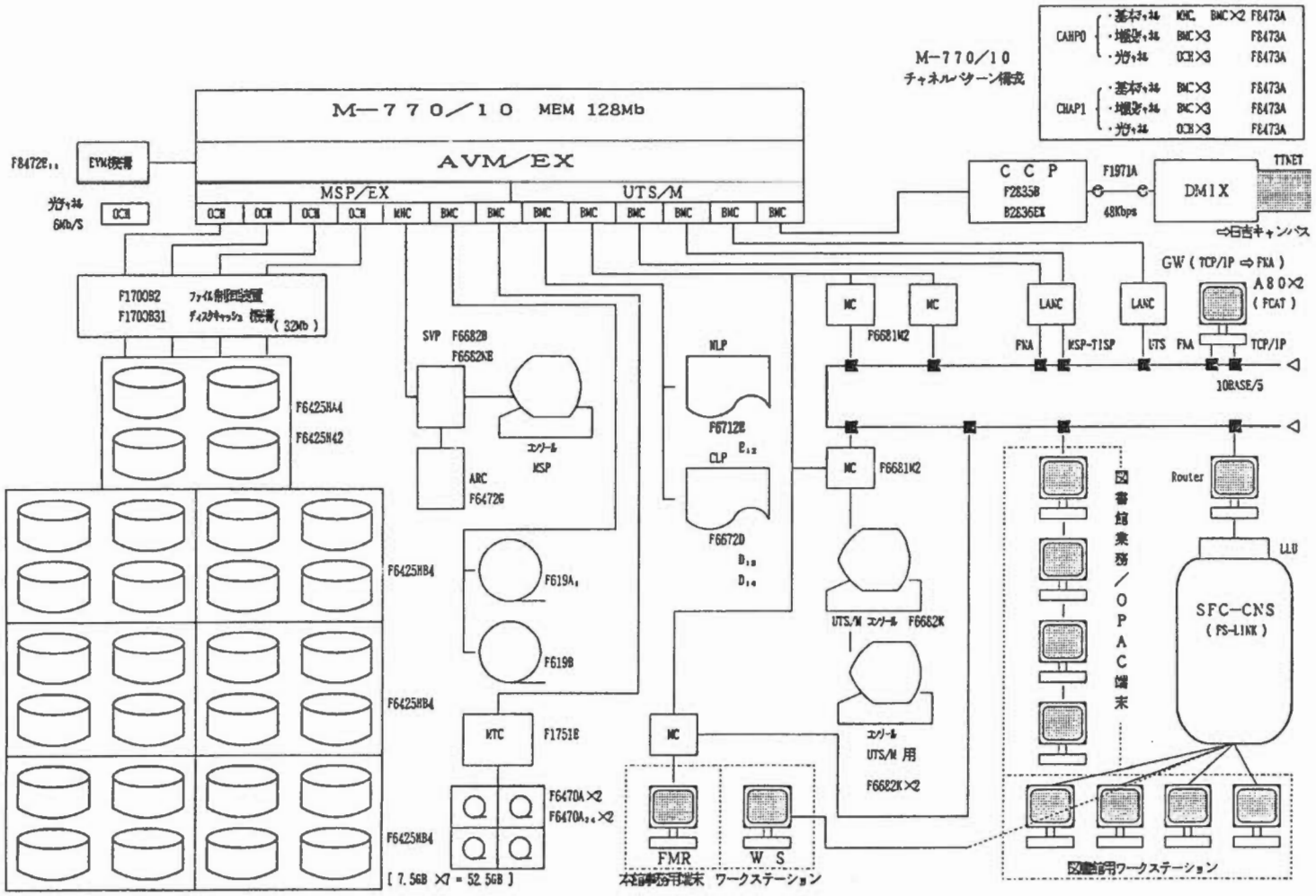


図1　湘南藤沢メディアセンターホストシステム構成図

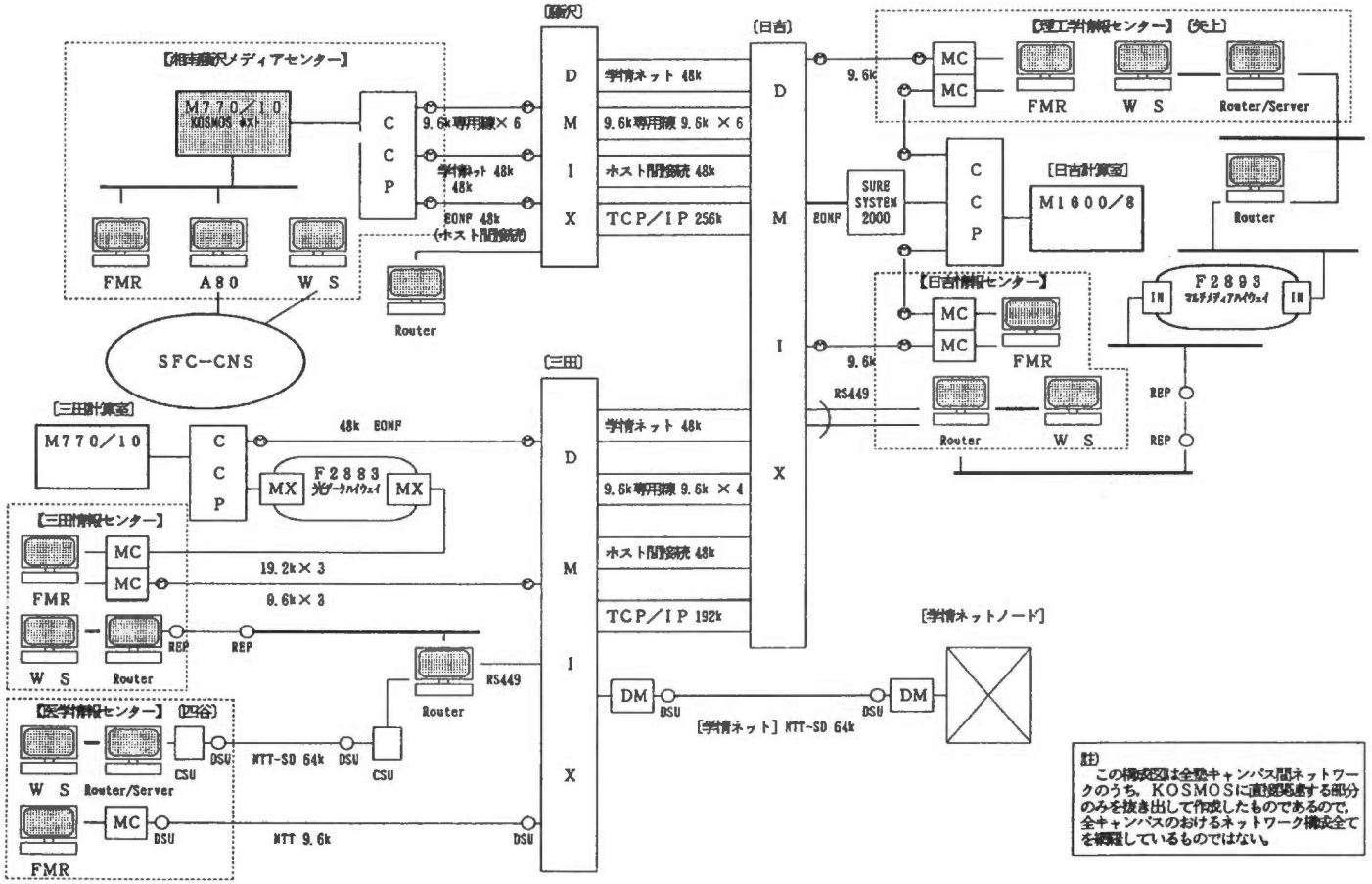


図2　KOSMOS ネットワーク構成図

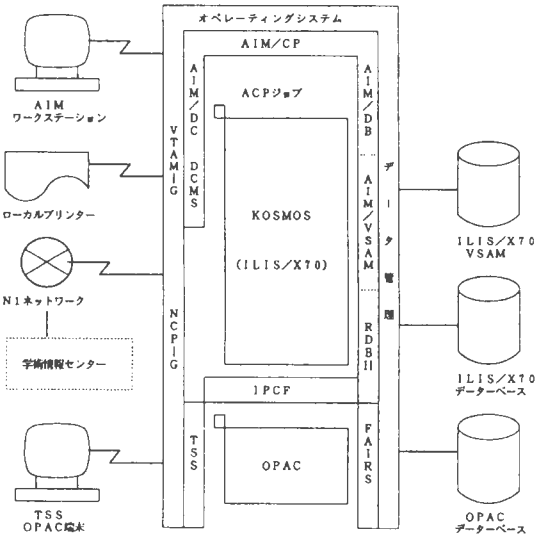


図3　KOSMOS の動作環境概略図

るため，ここでは各々についての詳細な説明は省く。

KOSMOS の機能概要

KOSMOS の機能を全てここで説明することはできないので，各サブシステム（業務メニュー）ごとに簡単に説明する。

KOSMOS 業務用末端はＡＩＭ端末であり，初期メニューとして，

1）検　索　　2）閲　覧　　3）目録作成
4）図書受入れ　5）雑誌受入れ
6）予算管理　　7）運用管理
8）学情接続　　X）終　了

が表示され，ここから業務を選択する。一方，OPAC は管理上の問題や利用者の便宜から一般のＴＳＳ端末を利用する。従って，SFC の M770/10 に利用者登録されていれば，誰にでも利用が可能である。以下に業務機能について簡単に説明する。

1）業務検索

図書館システムはデータベースを基本とすることから，業務検索はKOSMOS の中核をなすともいえるシステムである。検索の対象は，書誌，所蔵，著者名，典拠，統一書名の各データベースであり，学術情報センターの目録システム（以下NACSIS-CAT）への接続もこの書誌・所蔵検索画面からコマンドを発行することで行える。

2）閲　覧

閲覧システムの特長の１つは，配下にある各館ごとの利用者の所属や資料の種類によって貸出規則，予約規則，罰則規則等各種規則を自由に設定することができることである。また，地区を越えた予約も設定によって可能である。これは各館ごとの規則設定をパラメータ化し，規則テーブルに収めていることで実現している。その他，窓口業務記録（ジャーナル）のオンライン検索機能も有している。

3）目　録

目録作成システムでは書誌規則によって和書，洋書，和雑誌，洋雑誌の要記述項目設定と書誌ＩＤの付与を自動的に行い，さらに平和情報センターの HAPPINESS を搭載することで，和文の読み，分かち書きの半自動化を実現している。書誌作成機能の中には関連書誌リンク，書誌階層リンク，著者典拠リンク等の様々なリンク関係の作成や解消機能を持っている。また，書誌の二重登録の防止のために重複チェック機能も有している。

目録作成システムも雑誌・図書の受入れシステムから，また場合によっては閲覧システムからも利用されるシステムである。このため，目録の品質を保証するために，書誌ステータスを設けることによって対処している。

また，目録システムを考える上で NACSIS-CAT との関係は極めて重要な要素であった。従って，ダウンロード／アップロード，コマンドの共通化等様々な面で NACSIS-CAT に対する業務が行い易いようになっている。この他，カードレス化の実現に向けて著者典拠参照機能を用いて事務用基本カードに替わる請求記号自動付与システムを搭載する予定である。

4）受入れ（雑誌・図書）システム

受入れシステムでは，１つの発注行為に対して

1つのIPF（In Processing File）を作成し，これによって発注・支払形式，発注冊数，予算，発注・受入れ状態（事故等の管理を含む），支払い状況のコントロールを行っている。通常発注—受入業務は発注すべき書誌の選択に始まり，受入れ（支払）を以て完了する一連の流れとして捉らえられるが，その間には実に様々な状態が存在するし，また正常な流ればかりであるとは限らない。これらの状況全てをＩＰＦで適切に管理することができる。また，発注—受入れを考える時，必ずその予算的な裏づけが伴う。KOSMOS では発注—受入れに対して，予算管理テーブルからの厳密なコントロールが働いており，発注—受入行為の各フェイズにおいて，予算管理ファイルに対して更新がかけられ，最終的には未製本雑誌の一冊一冊に至るまで自動的に価格評価がなされる。

その他，未製本雑誌は多くの場合製本されることになるが，この製本管理機能も有している。

5） 予算管理システム

KOSMOS の予算管理システムはかなり厳密なコントロール機能を持っている。特徴ある機能としてあげられるのは，前払い金管理，預託金管理，仮払金管理，資産化・非資産化管理，製本予算管理，予算項目次年度引継機能，決算機能等があり，会計基準に準拠するよう設計されている。

6） 運用管理システム

運用管理システムは通常の業務では用いることはない。ここでは端末属性や利用者（業務用），各種パラメータ，コード／デコード，コマンド／オペランド，有効処理コード，画面表示メッセージ等の管理を行い，KOSMOS の利用環境を整備する機能を持つ。

KOSMOS 搭載データと遡及入力計画

どのような図書館システムであっても，基本的には「データベース＋検索システム＋データ処理システム」である。従って，システムを実用に供するためには，データベースにデータを格納しなくてはならない。データベース構築上最も問題となるのはデータ入力方法である。システム稼働後はオンライン形式で書誌・所蔵共に入力／蓄積されていくことになるが，すでにカード等の形でこれまでに蓄積されている膨大な書誌・所蔵データの格納方法は頭の痛い問題である。慶應の場合，所蔵データは図書・製本雑誌合計約 280 万，書誌データはその所蔵から類推して 150 万前後であると思われる。

三田・日吉・理工学の 3 センターで稼働してる CIRSYS，および医学情報センターの MELIC に搭載されている所蔵データ約 150 万については変換作業が終了し，製本雑誌の所蔵データ約70万も新たに作成したパンチデータからの搭載が終了した。これらの所蔵に対する書誌データのうち，雑誌の書誌については NACSIS-CAT に登録されているものを変換して搭載できたが，図書の書誌については，品質のよいデータをすぐには調達することは不可能であった。所蔵に対応する書誌データで既に機械可読形式で存在するものは，

1） 三田・日吉の CIRSYS の一部にある簡略書誌データ
2） MELIC のカナ・英大文字データ
3） 三田の OCLC による遡及入力データ（洋書）
4） SFC の FAINS 搭載の DOBIS データ
5） NACSIS-CAT 登録されている三田及び医学の書誌データ

があった。

KOSMOS では所蔵データに対応する書誌データが必要であるので，まず閲覧システム稼働のために 1)，2) と書誌と結び付いていない所蔵についてはダミーの書誌番号を付与して搭載した。その際においても，三田・日吉・医学の間で重複している書誌をできる範囲でチェックして搭載した。これらの書誌データはあくまで業務用簡略書誌ということで，正規の書誌データに置換されるまで OPAC からの利用に耐え得るものではないと当初判断されたが，検討の結果，公開することになった。この後順次 3)～5) のデータ搭載を現在実行中である。3)～5) のデータは品質的には満足のいくものではあるが，全体の20%程度である。

そこで KOSMOS 上の書誌データを整備するために，各支部情報センターの協力の下に三田に遡及入力事業室を設立し，年度計画で全地区の図書館で所蔵する図書目録を遡及入力していくことになった。計画によれば，三田については1962年以降，その他の地区は全ての図書データ，合計約100万書誌を平成９年度までに搭載する予定である。これの遂行にあたっては，様々な機械可読形式のデータを利用していくことになる。

KOSMOS の今後

KOSMOS はその基本部分がようやく完成したばかりのシステムで，現在開発中のシステムや開発予定のシステムもあり，完全なものとなるにはまだまだ時間を相当要するものと考えられる。我々はメディアネット計画全体の中で，利用者にも図書館員にもより使い易く，かつ品質の高い図書館システムになるよう今後一層の努力をしていく所存である。

＜研究・教育情報センター職員の KULIC 研究会＞

第17回（平成３年９月30日
於　三田情報センター）
発表者　舘田鶴子「アメリカの医学図書館」

第18回（平成３年12月９日
於　三田情報センター）
発表者　セオドア・ウェルチ「米国学術図書館の現状と問題」

第19回（平成４年１月27日
於　三田情報センター）
発表者　風間茂彦「資料保存問題の展望：三田情報センターの事例」

第20回（平成４年４月11日
於　三田情報センター）
発表者　高橋潤二郎「情報環境の変貌と大学図書館」
渋川雅俊「メディアネット計画の経緯」

第21回（平成４年５月28日
於　三田情報センター）
発表者　安田博，白石幸男「メディアネット構想にかかわる共同研究報告」
宮高省三「義塾事務情報システムの展開に関する報告」

第22回（平成４年６月29日
於　三田情報センター）
発表者　広田とし子「マルチ・メディアプレゼンテーション――AGSM セミナー（シドニー）に参加して」
南野典子「ニューヨーク学院での10か月」

＜小展示ニュース (1)＞

＜医学情報センター＞
＊医学部史料委員会主催展示
平成３年
８月～12月　北里柴三郎の生涯
８月　第３部「ドイツ留学」後編「帰国から北里研究所創設」前編
９月　第４部「帰国から北里研究所創設」後編
10月　第５部「晩年」前編
12月　第６部「晩年」後編
平成４年
１月６日　福澤諭吉書「医に贈る」
卒業記念写真帖（第１～第10回生）
（於　新棟11階会議室，会議室前）
１月～３月
北里柴三郎の生涯（再）第１部～第６部
６月12日
林毅陸塾長，北里柴三郎初代医学部長，北島多一第二代医学部長の書，掛け軸２点，額装２点（医学部第９回生卒業記念写真帖掲載の書の原稿となった真筆）
医学部第９回生卒業記念写真帖
（於　北里講堂前）
４月～８月　古医書シリーズ
「解体新書」「解体約図」「ターヘルアナトミア」

キャンパスネットワークとその利用

大賀　裕（おおが　ゆたか）
（大学計算センター
矢上計算室事務主任）

Ⅰ．はじめに

1991年3月キャンパス間ネットワークの構築が開始された。このネットワークは，義塾の一層高度な学術情報支援サービスの進展を支える重要な情報基盤の一つであり，全塾統合図書館システム（KOSMOS）など教育研究支援を強化していく上で早急な実現が望まれていた。また多種多様な回線がキャンパス間に敷設されており，将来発生するであろう二重投資や回線の統合化による回線費用の削減などのコストの問題，管理運用の問題，映像情報，ISDN など新技術に対する拡張性の問題，情報処理環境の変化の問題等から，回線を整理統合してより良いものにすることが急務となっていた。

このネットワークの特徴は以下にあげる5つの機能を持つ回線を，DMIX（マルチメディア多重化装置）により，高速ディジタル回線に統合的に収容していることである。

(1)　電話・ＦＡＸ用回線
(2)　ホスト間接続用回線
(3)　湘南藤沢ホスト M-770 専用端末用回線
(4)　学術情報センター網用回線
(5)　ＩＰネットワーク用回線

このような音声とデータを統合したネットワークを構築する場合，多くの担当部署との調整が必要なため，組織変更などが行われる場合が多いが，義塾の場合は，計画の立案から構築着手まで9カ月という短期間でこれが行われた。

ここでは，現在のキャンパス間ネットワークを回線毎に紹介し，次に近い将来各キャンパスに広がっていくであろうキャンパスネットワークの利用について理工学部を例として紹介する。最後に今後の展望について，私見を述べる。

Ⅱ．キャンパス間ネットワークの構成

各キャンパスを結ぶ専用線の帯域幅は，三田・日吉間768Kbps，日吉・湘南藤沢間768Kbps，三田・四谷間64Kbps である。また日吉・矢上間はマルチメディア光ハイウェイシステム205Mbps と FDDI 100Mbps の帯域幅を持つ。

(1)　電話・ＦＡＸ用回線

三田71，日吉72，矢上73，湘南藤沢74を頭に付け，各地区の内線番号をダイアルすることにより相互内線通話が可能になっている。各1回線は音質や内線ＦＡＸの利用への対応を考慮して32Kbps としている。今後，音声圧縮技術の進歩に伴い16Kbps，8Kbps への移行も可能であると予想される。現在三田・日吉間10回線（経理課システム専用2回線を含む）計320Kbps，日吉・湘南藤沢間6回線，計192Kbps が使用されている。

(2)　ホスト間接続用回線

ネットワーク内に複数のホストを取り込む技術を用いて，三田 M-770，日吉 M-1600，湘南藤沢 M-770 の大型機間の接続が実現されている。日吉のホストの利用者が湘南藤沢のホストを利用する場合，LOGON TSSS 課題番号とタイプすることによって湘南藤沢のホストが利用できる。1992年夏からは日吉ホストが稼働していない場合でも三田・湘南藤沢間の相互利用が可能となった。帯域幅64Kbps の内48Kbps を使用して実現されている。

(3)　湘南藤沢ホスト M-770 専用端末用回線

KOSMOS 検索用業務専用端末として各地区情報センターに設置されている。情報センターには DSLINK（10BASE5）が各々設備され，そこに接続されたパソコンがマルチコントローラを通して湘南藤沢のホスト計算機の専用端末として9.6Kbps（16台で1回線）を占有し利用されている。専用端末用回線は，湘南藤沢・日吉間が15回線分（四谷・三田からの10回線分を含む）計192Kbps，日吉・三田・四谷間10回線分，計128Kbps の帯域を使用している。この中には，早稲田大学や学術情報センター（暫定），情報センターＩＢＭ用

Sep.1.1992

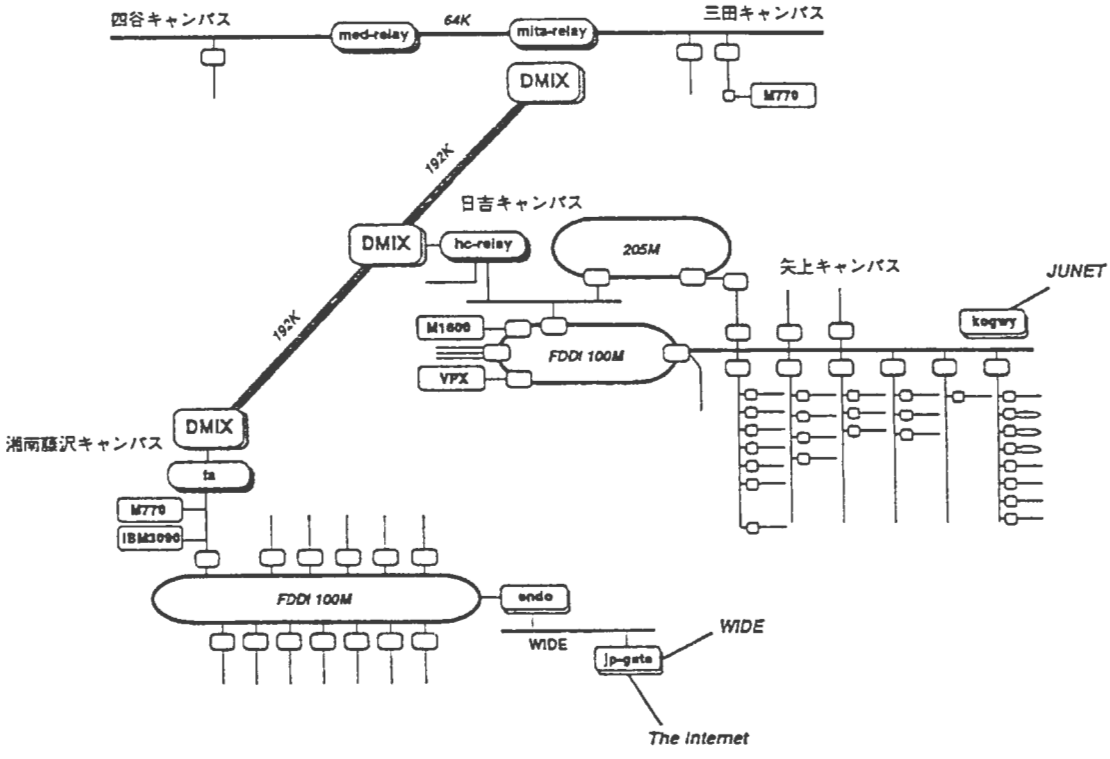


図1　Keio Internet

端末の回線も含まれている。

(4)　学術情報センター網用回線

湘南藤沢 M-770 から，日吉，三田を通過して，学術情報センターノード（東京大学 FETEX-5000 パケット交換機）へ帯域幅 64Kbps 中 48Kbps で接続されている。

(5)　ＩＰネットワーク用回線

ＩＰとは多くのベンダーが採用しているインタネットプロトコルという通信規約である。このためマルチベンダーのネットワークの事実上の標準になっている。

義塾のＩＰネットワークの構成図を図１に示す。1992年夏のリプレースでは，スーパーコンピュータ（VPX220）に加え，大型機，パソコンに TCP/IP サポートのソフトウェアが搭載された。今後この帯域の使用が広がっていくものとみられる。

Ⅲ．ＩＰネットワークの利用

ＩＰによるネットワーク同士は，お互いに接続して Internet と呼ばれるメタネットワークを形成している。したがって，義塾のＩＰネットワークは Internet の構成要素の一つとなっている。Internet は，研究教育目的での利用に対してオープンな接続を許可しており，接続ホスト間で自由な情報交換がなされている。Internet には，約40の国，約 5000 の組織，約80万のホストが接続されている。我々は，このような広い相手との通信が可能である。

ここで紹介する Internet で利用できるアプリケーションは，理工学部において広く利用されている代表的なもので，研究教育支援に欠かせない

道具になっている。Internet では，きわめて多くのアプリケーションが利用されており，また，新しいアプリケーションが次々に出現している。

(1) 電子メール

電子メールは Internet において最も利用者が多いアプリケーションである。現在の電子メールは，Internet を通して送る封書だと考えればよい。宛先アドレスを含むヘッダ情報（封筒に書く内容に相当する）とメール本文とを，ワープロやエディタなどの計算機上の文書入力装置で作成し，それをメール転送プログラムに渡すことによって相手に送信される。相手が Internet 上にいる場合には，数分以内に到着する。電子メールの便利な点の１つは，お互いの都合にとらわれることなく，空いている時間に通信が可能なことである 。これはＦＡＸが持つ便利さと共通している。ＦＡＸより優れている点は，内容が電子的に保護されているので他人に内容が見られることがないこと，計算機上で保存・加工・検索が可能であることなどがあげられる。現状でＦＡＸより劣る点は，電子メールを取り扱うためのプログラムに習熟するのに時間がかかること，送ることができる内容がテキストに限定されていることがあげられる。これらの問題点は，解決される方向にある。理工学部では1984年以来，電子メールが使える環境にあったため，利用者はきわめて多く，一日に数百通のメールが学外と往き来している。多くの教員や大学院生などが，学会活動のための連絡，論文投稿，共同研究者との議論などの目的で利用している。

(2) 電子ニュース

電子ニュースは電子メールと似ているが，誰でも自由に読み書きをして，議論や情報のやりとりができる掲示板のようなアプリケーションである。電子ニュースの記事は，対象とする話題や配布範囲によって，異なるニュースグループに投稿される。

理工学部や湘南藤沢キャンパスでは，キャンパス内のみに配布される授業用のニュースグループが開設されている。これらでは，教員が資料を配布したり，学生が質問をする場所として利用されている。また，学科や研究室をまたがる人間同士のコミュニケーションの場としても利用されている。先日，ある学生が，「緊急に論文をさがしているのですが，図書館が閉まっていて困っています。持っている方がいらっしゃいましたら連絡を下さい。」というような投稿をして，他の学科からすぐに返事があった。これは，電子ニュースの放送性という特質を生かせた事例であろう。また，全世界や日本に配布されるニュースグループもあり，国や組織をまたいで研究者同士のコミュニケーションがはかられている。ニュース記事は，バケツリレー方式という，すぐ隣の組織に伝えていく方式で伝送しているが，数時間内で Internet 上の組織には伝えられる。義塾からは週に50人前後の投稿者があり，活発に情報を発信する組織の一つとなっている。

(3) 電子会議

現在 Internet で利用できるシステムは，キーボードから文字を入力することによって行うものであり，音声や画像を用いることはできない。電子メールのように特定の人間で対話する talk や phone，あるいは電子ニュースのように特定の話題について対話する IRC（Internet Relay Chat）がある。

(4) 遠隔端末

Internet 上にある計算機を，自分の研究室のような離れた場所から操作する機能が遠隔端末である。

多くの海外の大学図書館が，図書検索用のプログラムを遠隔端末を利用してアクセスできるように公開している。日本にいながらアメリカの大学の図書館が所蔵している図書をさがし，電子メールを送ってもらうように依頼することが可能になっている。

最近の理工学の研究では，高速な計算機によって共同で，データを解析しなければならないことがある。そのような計算機は高価なものであるので，国立の研究機関が保有しているものを利用させてもらうことが多い。また，そうすることに

よって，解析用のプログラムを共有できるし，また同じ土俵の上でデータの比較が可能になるという利点もある。Internet を利用できるようになる以前は，そのような研究機関に直接出向いて利用したり，あるいは研究室から独自に公衆電話回線を利用してアクセスしていたが，現在ではそのようなことをする必要がなくなった。

(5)　ファイル転送

Internet 上の計算機が保有しているプログラムやデータを，こちらの計算機に持ってきたり，またその逆をするものがファイル転送である。

Internet 上では，コピーすることが可能な，フリーソフトウェアと呼ばれるプログラムが多く提供されている。それらをコピーする手段として最も普及しているものが匿名ＦＴＰと呼ばれているものである。現在 Internet 上で転送データ量の約半分が匿名ＦＴＰによるものだと言われている。理工学部内にもフリーソフトウェアを配布する計算機がいくつか存在し，慶應の外部からも一日当たり 20MBytes（この雑誌の約 5000 ページ分のデータ）前後もの転送がなされている。実験データについても研究者が取得が可能になっている。例えば，アメリカの NASA が行っているスペースシャトルなどの宇宙実験のデータは，一定時間が経った後にはファイル転送できるようになっている。

(6)　データサービス

遠隔端末で利用できるような情報検索機能に加えて，ファイル転送をも同時に遠隔端末で利用できるものである。近年 WAIS と呼ばれるデータサービスシステムが広く利用されてきており，300 近い計算機で情報が提供されている。収集されている内容としては，電子ニュースの記事，論文，雑誌や新聞の記事などがある。WAIS では，キーワードによる検索を支援しており，論文をさがすときには，著者名や関連する語句を入力することによって簡単に行うことができる。テクニカルレポートなどを WAIS によって公開することにより，研究成果をいちはやく外部に伝えることが可能になっている。

Ⅳ．今後の展望

今後キャンパスネットワークを如何に使っていくかがますます重要になっていく。そのためにはデータベース等の構築の他にツールの使いやすさの向上をめざす必要がある。

現在，上述したようなアプリケーションを利用するための計算機ソフトウェア（ツール）は，必ずしも計算機に慣れ親しんでいない人にとっては使いやすいものではない。また，アプリケーション毎に操作性が全く異なるツールを使わなければならないことが多い。多くのアプリケーションに対して，同じ操作性で利用できる簡単なツールが望まれる。近年，このようなツールの一つとして，ミネソタ大学で開発された gopher というツールが Internet で利用され始めた。gopher は，計算機の画面上のボタンをマウスでクリックするだけで，様々な情報を取得したり，各種のアプリケーションを利用することができる。イリノイ大学の gopher サーバでは，キャンパスの施設情報，履修案内，全国の天気予報，図書検索，電話帳，匿名 FTP，WAIS などが利用できるようになっており，さらに他の大学の情報をも検索できるようになっている。もちろん，慶應義塾からもこれらの情報を検索することが可能である。

最後に Internet の基本的なポリシーは，情報のギブ・アンド・テークである。日本人には情報の収集癖があるようで，見事なまでに外部からの情報を集めてくる。このようなことができるのも，相手側が情報を公開しているからであるということを認識する必要がある。我々も，外部に対して情報を公開して，利用される環境を構築していかなければならない。大学が外部に誇れる最大の資産は，研究者の研究成果であると思う。

書物も情報も，そして情報処理も

—メディアネットと
メディアセンター計画の背景と経過—

渋川雅俊
（研究・教育情報センター本部事務室長）

Ⅰ．はじめに

三田の図書館が開設して今年で80年になる。その間大震災や戦争の被害を受けたが，義塾の研究と教育を支援しようとする真摯な姿勢と，復興にたいする先輩図書館員のたゆまぬ努力が今日の発展につながっている。

私は，この3月末で，義塾の図書館で30年勤務したことになるが，初任当時から一足飛びにいま現在をみれば，図書館サービスの進展には目覚ましいものがある。1962年当時，蔵書数約45万冊，図書予算約1千7百万円，職員数46名[1]の規模であった図書館が，しだいに成長し，いまでは全塾で5つの図書館，288万冊の蔵書，13億円の図書予算，130余名の専任職員を有する大規模図書館になっている。

Ⅱ．図書館サービスの展開

学生当時の図書館サービスを振り返ってみると，閲覧サービスとレファレンスサービスの二つだけで，いまのような豊富なメニューは用意されていなかった。もっともレファレンスサービス（1952年開始）は，書物と建物を資材としていた古来の図書館サービスに，たとえ技法的に初歩的なものであっても，人的援助のメニューを加えたものとして，その意義は大きかった。

1960年代は，一般に大学図書館の改善や近代化の推進が図書館内外から要請されていたが，義塾でも60年当初から近代化計画の路線[2]が敷かれていた。私の初任早々，増設された第三書庫に，開架室が設置され，開架図書に限ってだが，学生に対する館外貸出サービスが開始された。また，レファレンスルームが拡張されてそこに置かれ，雑誌室も開設された。

1970年は，義塾の図書館の発展史上画期的な年であった。その年，図書館と研究室図書室が統合され，さらに中央館・分館（分室）が廃止され，図書館運営の全塾的組織として研究・教育情報センターと各キャンパスに情報センターが成立した[3]。そしてこの年以降，新しいサービスメニューがいろいろと加わることになる。

ほぼ全蔵書が開架方式となり，閲覧サービスでは，利用者の自由な接架が確保され，館外貸出の範囲がさらに拡張された。また，マイクロ資料サービスもこれに加わった。文献複写サービスが本格化したのもこの時期であるが，60年代のジアゾ式複写機からゼログラフィ式複写機の導入によって利用は拡大し，さらにその後，機器の急速な発達によって，年々充実の一途をたどることになる。複写サービスの拡張につれて，複写物による相互貸借サービスも始められるようになったが，このことは，資料の館外貸出の拡張とともに，図書館サービスが徐々に館の外へと向かう展開のはしりとなった。

60，70年代の経過をたどると，利用者本位のサービスと図書館業務の全塾的標準化が，図書館サービスと運営の基本方針であったことに気づくが，80年代は，慶應義塾図書館新館開設（1982年）[4]と日吉図書館の開館（1984年）[5]によって，図書館サービスは新たな展開をみることになる。

その後の10年間の際立ったサービスを挙げてみると，まず．視聴覚資料サービスの充実がある。資料そのものの導入は時代を少しさかのぼるが，専用の施設・設備による視聴覚資料サービスは，それを必要とする教員・学生の利用効果と効率を一段と高めた。とくに多様なメニューをもつ日吉図書館の視聴覚資料サービスは，現在まで，非常によく利用されてきている[6]。

視聴覚資料の本格的な導入によって，図書館蔵書には，非図書資料という類別が加わることになった。印刷資料を主体とする図書資料以外の，もう一つの代表であるマイクロ資料は，前世代に

蔵書に参入したが，80年代になって，保管の効率化と保存の目的で重要な新聞，統計資料，文書，古書，特殊文庫などのフィルム媒体変換が世界的に進み，それが流通するに及んで，多くの新資料が受入れられた。また，それにつれて改良されたマイクロ資料リーダーおよびプリンターが導入され，マイクロ資料サービスは一層拡張された。

この時期，蔵書の様態を著しく変えたものに電子メディアがある。ひところ‘ニューメディア’と呼ばれたデジタル情報資料は，最初は，82年頃からオンライン情報サービスとして導入され，次いでＣＤ-ＲＯＭの形態で，図書館に参入した。このことによって電子メディアサービスという新しいメニューが加わり[7]，その後もいろいろな資料が受け入れられ，拡張されている[8]。

この世代の新しいサービスとして特筆すべきもう一つのものは，図書館利用者教育の進展である。利用者教育はそれ自体，一つの図書館サービスであるが，その狙いは，基本的には，教員・学生・その他の利用者に対して，図書館（各種サービス，資料・文献検索と入手，施設・設備・機器の利用）の効果的・効率的利用法について助言・援助しようとするものである。この種のサービスは，蔵書の増加，多様な資料や情報処理機器の導入，データベース検索サービスを含む多様なサービスメニューの提供，施設の拡大，海外を含む学外学術図書館・情報センターの利用などの図書館自体の成長と成熟化に伴って不可避的に必要となるが，もう一方では学問分野における知識の膨張の下での大学教育の新しいあり方からも要請されるものである[9]。このサービスの下に，ライブラリー・ツアーを含むオリエンテーション，ビブリオグラフィック・インストラクションなどのメニューがあり，全塾で行われるようになった[10]。なかでも，学部カリキュラムに開設された「研究情報処理」と「法学情報処理」は，利用者「教育」の名にふさわしく，正規の授業の場で行われるようになった[11]。

図書館サービスの進展をこのように振り返ってみて，80年代の図書館サービスを概観すると，図書館の変容にいくつかの方向が浮かび上がってくる。

まず，架蔵する蔵書に，書物以外のいろいろな形態の資料が加わったことは，知識の記録媒体の多様化を示すだけではなく，情報化というものの実体が蔵書と利用サービスに顕著に現れ，図書館員も利用者も，本を中心にして形成されてきた世界の変容を如実に感得することとなった。第二には，資料の館外貸出や文献複写サービス，さらに海外を含む学外図書館資源を活用しての相互貸借の導入は，学外の資料所在情報の流通拡大を背景にして，図書館の壁を越えたサービスへの展開を示している。これに関連して，80年代初めに導入されたファクシミリは，当初は，義塾各図書館の業務用連絡を目的にしていたが，図像を含む文書の学外電送の機能をもって，郵便・電話とは異なる新たな情報流通ネットワークを形成し館を越えた図書館サービスへと展開する契機となった。

第三は，積年の蔵書の増加と資料媒体の多様化や，学外の図書館と相互協力などによる資料源の拡大と輻湊化によって，利用者にはより多くの情報が入手できる可能性を高める結果となったが，そのためには精巧・精密な情報獲得法を習得することが必要となり，図書館は，学習，あるいは，研究情報処理法の提供をメニューに加えることになった。このこともまた図書館の壁を越え，教育の場にサービスを提供する方向に向かっていることを示している。利用者への情報入手法習得の支援サービスには，また，サービスの変容の第四の方向も同時に現れている。それは，利用者が書物以外の資料の利用のため，図書館が諸々の視聴覚機材，マイクロリーダープリンターなどの低位の情報機器の利用法から始まり，電子情報の入手のためのパーソナルコンピュータの利用法にいたる，いわば情報処理法の習得について利用者を支援する必要が生じたことである。特に，パソコンの利用については，機器の使い方だけにとどまらず，それを使用して的確・効果的な情報入手のためのソフトウェア利用法も含まれている。

Ⅲ．図書館システム化の経緯

こうした展開の背景には，電算機を中心とする情報処理技術の発展があったことはいうまでもないが，義塾のなかで，図書館サービスの展開とのかかわりでもう一つ大事なできごとは，義塾の研究・教育支援サービスとして，その後ますます重要となった計算機サービスである。

計算機サービスは，1969年情報科学研究所の設置から始り，10年後の79年に大学計算センターが発足するに及んで本格化する[12]。大学計算センターはその後の10年間に，大型計算機の導入・拡充からキャンパス間ネットワーク付設，さらに全国的コンピュータネットワークの接続へと，義塾の全学的情報インフラストラクチュアの整備を進めながら，情報処理教育環境の整備，各種計算機利用サービスの提供，さらに図書館サービスとも一部競合するが，各種データベースの導入による情報サービスを提供する学内機関として成長している[13]。情報センターと計算センターの成長の過程をたどり，いまその発展の末を推察するならば，言葉の誤用をかまわずいえば，「連理比翼」の譬えをもって表現すべき段階に至っている。

図書館における電算化は，大学計算センター発足と情報センター機構の開始と同時に始まり[14]，同センターの成長につれて進展した。まず当初は，初歩的なシステム（業務単位ごとのバッチ処理）ではあったが，図書予算管理システムと全塾雑誌管理システムが稼働し，その後，貸出管理（統計）システムや医学情報センター受入管理システムを完成させ，さらに全図書館業務の機械化開発計画が進められた[15]。全業務の機械化計画は当初からオンラインシステムを志向していたが，85年貸出システムが完成し，運用を開始した[16]。

図書館システム化計画の中で目録システムは，電算化計画の当初からの目標であったが，計算機環境の限界と目録データベース構築の技術的な困難から，実験的な試みがなされただけで，本格的なシステム化は，先延ばしとなった。しかし，その後，計算機環境が改善されたことと，学術情報センターの目録所在情報システムの運用が開始されたことに伴い，状況は変化した。義塾は86年，同センターと接続し，それによって義塾の目録システム化は急激に展開した[17]。

Ⅳ．総合情報センター構想―メディアネット計画の胎動

システム化を図りながら新しい時代の義塾研究・教育支援サービスを拡充しようとする情報センターの将来構想と，計算機システムによる情報の生産・加工・蓄積・利用が全学問分野における将来の研究・教育に不可欠という認識に基づいた計算センターの将来構想は，89年に至り，両センターの機能的・組織的統合の必要性を発議する段階に達した。同年９月，両機能の新結合による義塾研究・教育支援サービスの発展を確信していた清水情報センター所長は，下郷計算センター所長と諮り，図書館サービスと計算機サービスを統合し，新しい学術情報支援サービスの構想を求めるため，藤沢常任理事の下で総合情報センター（仮称）計画を進めるべく提案した。藤沢常任理事の了承を得て，両センターは，同計画の中核をなす新しい体制のサービス内容を検討することになり，両センターの職員を中心に構想研究ワーキンググループを設置した。この研究グループには，大学事務情報システムを担当する総合企画室の職員も参加した。また，めまぐるしく進展する計算機技術情報の提供を受けるために，富士通株式会社からの応援を得ることになった。

この共同研究プロジェクトは，２年にわたって行われたが，翌90年，「総合情報センター構想：慶應義塾大学における研究・教育の新しい基盤整備を目指して」（第一次構想），91年に「メディアネット構想（総合情報センター構想改め第二次構想）」をまとめ，任務を終了した。共同研究グループがまとめた構想では，情報センター・計算センター両センターの統合の必要性を確認し，従来の図書館サービスと計算機サービスの拡充を図りながら，計算機システムを基盤とする新しい研究・教育支援のための情報サービスとキャンパスライフ支援のための情報サービス提供の構想を提言し

た。また，第一次構想では，総合情報センター設立までの初期計画として，全塾統合情報ネットワークの早期整備と，所蔵資料目録情報の遡及入力計画を含む全塾統合図書館システムの開発を提案した。この構想と提案は，藤沢常任理事を経て常務会に上申され，構想の提言に沿って両センターを統合する方向で準備するため，情報センター所長，計算センター所長ならびに両センター事務長からなる総合情報センター推進本部会議を設置することと，キャンパスＬＡＮの整備計画および図書館システムの開発計画が承認された。キャンパスＬＡＮ（KINGS）[18] は90年度にほぼ完成し，図書館システム（KOSMOS）[19] は，同年から開発作業が開始され，91年後半から一部運用が開始される段階に達した。

一方，義塾における学術情報支援サービスの将来構想は，総合情報センター計画が開始された翌年の90年に，また新しい段階に到達した。それは，同年，総合政策学部と環境情報学部の新設に伴い，湘南藤沢キャンパスが開設され，同キャンパスに湘南藤沢メディアセンターの設置がきまったことである。　同センター設置の構想は，情報の生産・蓄積・利用の一連のプロセスにおいて，文字・音響・映像の三つのモードが統合されて新しい知識が形成されるとする21世紀におけるマルチモード・マルチメディア情報社会の展望と，そうした知識形成を基盤とした研究・教育への展開の下で，新しい社会における大学のあり方の提言が源となっている[20]。そして91年，義塾に，従来の図書館サービスと計算機サービスの他に，マルチメディア環境を基盤とする教材開発サービスを統合してメディアセンターが発足した。

総合情報センター計画は，新しく設立された湘南藤沢メディアセンターを加え，この新しい構想を全塾的に発展させることとなり，各地区に同種のセンターを発足させることを目的に，メディアネット計画へと展開することになった。総合情報センター第二次構想が「メディアネット構想：研究・教育支援情報システム」と標記されたのはこの理由による。また，総合情報センター計画推進本部会議も，同センター所長ならびに事務長を加え，メディアネット計画推進本部会議と改称されることになった。

Ⅴ．メディアネットとメディアセンター計画の概要

メディアネットとメディアセンター計画の背景には二つのことがある。一つは，図書館サービスと計算機サービスのこれまでの進展を踏まえ，新時代における学術情報支援サービスの必要性であり，いま一つは，学術諸資源・資材を効率的に運用できる仕組みの必要性である。義塾は，情報センターを昭和45年に発足させ，次いで昭和54年大学計算センターを設置し，研究・教育のニーズの変化に対応すべく新しい方策を先取してきた。しかし，電算機応用技術の最近の高度な発達と，そのことによる学生，教員・研究者の情報ニーズの先鋭化は，学術情報に関する一層広範囲な支援サービスを開発，進展させることを必要としている。また一方，大学運営の側面では，研究・教育にかかわる資源・諸資材の適正な確保とその活用において最大効率を上げうる仕組みを必要としている。

こうした必要性と，湘南藤沢メディアセンターの設置という状況を踏まえ，メディアネット計画の提案は，義塾の学術情報環境の再組成を図り，従来の図書館サービスと計算機サービスを発展させながら，義塾の保有する多様な図書館資源と多様な情報処理資源，そして情報処理技術など，つまり，書物も情報もコンピュータも研究・教育情報の媒体（メディア）としてとらえ，研究・教育活動の現場で，今後確実に，要求が高まると予測されるマルチメディア環境を活用しての支援サービスを可能にする全塾的機構整備を目的としている。この目的の達成のため，湘南藤沢以外の各キャンパスにもメディアセンターを設置する。各メディアセンターは，研究・教育上の各キャンパスの特性に対応すべく運営されなければならないが，そうした単位組織を義塾運営の観点から効果的に運営する役割を持つ全塾的機構として，メ

ディアネット（メディアネットワークの意味で，同名称はそのロゴ）を置くことにしている。

現在こうした機構を平成5年4月に発足させるため，その組織的基盤を決定する規程を作成中であるが，メディアネットとメディアセンターは，①研究・教育関連の情報の収集・処理・提供に関する業務，②情報関連システムの整備・運用に関する業務，③教材開発およびマルチメディア環境を活用した研究・教育活動の支援に関する業務，を行う事としている。

VI. おわりに

過去30年間の回顧はそれとして，書物を以て義塾の研究・教育を支援するサービスは，その時々において，研究・教育活動のちょっとした要求を汲み取り，さらにそのニーズを喚起しながら，進展してきた。そしていま，書物だけでなく，書物も情報も，そして情報処理法も，また，文字だけで生産・蓄積・伝達される知識だけでなく，音響も図像も映像も含めて形成される知識を，その生産から利用に至る過程で研究・教育を支援する仕組みへの転換が始まろうとしている。新しい体制への展開は，何らかのきっかけから始まり，少しずつその方向へと進んで行く。それはごく自然の流れのようでもあるが，その時期にその仕事にかかわることができることは，30年前にこの仕事を選んでしまった私には，望外の喜びである。

参 考 文 献

1）『慶應義塾図書館史』p. 334-339。ただし三つの分館・分室と三田研究室を加え，全塾で蔵書約60万冊，図書予算3000万円，職員数60名程度。

2）『慶應義塾図書館史』p. 268-278; 「近代的大学図書館のあり方」学術月報 Vol. 16, no. 6 Sept. 1964. p. 9-18

3）『塾監局小史』p. 114-135。1970年，研究・教育情報センターと三田情報センターが発足し，翌年医学と理工学情報センター，その翌年日吉情報センターが相次いで発足。

4）「慶應義塾図書館（新館）の開館」KULIC 16号 1982年 p. 12-34

5）「慶應義塾日吉図書館の開館」KULIC 19号 1985年 p. 1-33

6）風間茂彦「日吉図書館のＡＶサービスの現状」KULIC 20号 1986年 p. 16-18

7）樋口恵子「人文・社会科学におけるデータ・ベースの現状」KULIC 21号 1987年 p. 26-29; 舘田鶴子「オンライン文献検索サービスの現状と課題」KULIC 21号 1987年 p. 30-33; 笹島早月「データベースを利用した情報検索サービス―理工学情報センターの場合」KULIC 21号 1987年 p. 33-35

8）石原智子・宮崎康子「三田および日吉情報センターにおけるＣＤ-ＲＯＭサービス」KULIC 25号 1991年 p. 42-46; 市古みどり・南野典子「医学情報センターにおけるＣＤ-ＲＯＭの利用」KULIC 25号 1991年 p. 47-50

9）渋川雅俊「ライブラリー・インストラクション：知識への一つの接近法」KULIC 11号 1978年 p. 10-15

10）市古健次「レファレンス・サービスとビブリオグラフィック・インストラクション」KULIC 18号 1984年 p. 16-22; 太田香保「日吉図書館における利用者教育」KULIC 21号 1987年 p. 14-17; 宮崎貞治・市古みどり「医学情報センターにおける利用者教育」KULIC 22号 1988年 p. 19-20; 吉川智江「理工学情報センターにおける利用者教育」KULIC 22号 1988年 p. 21-24

11）松本和子「研究情報処理カリキュラム」KULIC 21号 1987年 p. 17-19; 池田真郎「法学情報処理」KULIC 22号 1988年 p. 24-26

12）『塾監局小史』p. 140-152

13）ＫＵＣＣ No.18 p. 1-7

14）安西郁夫「情報センターの機械化：過去から現在まで」KULIC 13号 1980年 p. 10-13

15）安西郁夫・長島敏樹「情報センター機械化」KULIC 17号 1983年 p. 24-31

16）中島紘一・安田博「慶應義塾図書館の新しい閲覧システム」KULIC 20号 1986年 p. 6-11

17）中島紘一・高谷康子・長島敏樹・平尾行蔵「学術情報センター接続後の課題」KULIC 21号 1986年 p. 5-12

18）Keio University Integrated Information Netwrok System の略号

19）Keio University System for Multimedia On-line System の略号

20）高橋潤二郎「情報化と大学の変貌」三田評論 936号 1992年5月 p. 18-28

図書館の思い出

井上輝夫

「きみは無愛想ダナ」……時々こんな人物評を聞かされて，悲しくも恥じ入ることがある。なるほど冷静に自分を振り返れば，心に固いところがあって大いに無愛想である。他の人への細かい気づかいに欠け，仏頂面，木偶のようにウワの空で立っていたり，時には恐ろしい形相を浮かべているらしい。自分で気がついたときはひっそりと孤独になれるような場所をさがし，被害を最小限にとどめようとはする。だが……つい出てしまうのだ。そんな折り，キャンパスでは図書館へ逃げ込むのだった。

学生時代は三田の旧図書館，偽ゴチック風の図書館にかくしてよく逃げ込んだ。ある時はレポートを書くため，またある時は仲よくしてくれた女子学生を待つためだったりしたが，読書に疲れるとヴェランダに出て煙草をすうのが楽しみだった。そこではどんな顔を曝していてもかまわないわけだ。ウパニシャッドに夢中になったのもその頃で，辻直四郎先生のインド哲学を履修していた私はカータカ・ウパニシャッドについてレポートを書いているうちに夢中になった。学者になろうというような大それた野心はなかったが，万巻の書を読破してみたいという渇きがあった。この乱読癖は今にいたるまで治らないと同時に，人間嫌いの資質があったのだろうか。

こんな私が大学院生になってしまった。旧図書館の三階にあった閲覧室や書庫も自由に出入りできるようになった時は，ちょっとした特権を得たように嬉しかったが，そこでは法学部あたりの勉強家が判例集などを十数冊もつみあげている姿を見て，軟弱な文学青年の私はキモをつぶしたものだった。小説でも読んで人間の機微を分かってから判決だしてくださいな，などとブツブツ呟いたりした。

こんな私が教師になった。日吉の旧藤原図書館は正直使いづらかったが，新図書館ができてからは個人用のキャレルが孤独な避難所になった。同じようにキャレル愛好者がいて，この先生は紙袋をカシャカシャ鳴らしたり，テクストを音読なさるのですぐ来られているのが分かった。私はクスクスと笑いながら読書したり，物を書いたり，会議でグシャグシャに疲れ眠ったりした。多分涎も垂らしたのではないだろうか。キャレルにいると世間から隔絶されたような気分になり，ますます孤独癖が深まった。自分の女房の顔を忘れた大雅堂ほどではなくとも，何かに捕らわれると気が回らなくなるという悪い癖が治らない。そこで思考するのではなく，ポッとなって酔生夢死のような気分になり，万巻の書物を読破するどころか愚にもつかぬ空想にひたったりするのである。だから少し酔ったような気分で図書館をあとにするのが常だった。甘い木々の匂いが夜気に漂っていた。

こんな私が湘南藤沢へ移籍となった。新キャンパスの自然の静けさのなかで，年齢からみて万巻とはいかなくとも千巻の書ぐらいは読めるかなと期待した。けれど，新キャンパスの立ちあげは予想をはるかにこえて多忙だったし，貝が殻をなくしたように無愛想な私も多くの新しい教員と協力しなければやってゆけない事態となった。剥身となった私は無愛想を出すまいと努めるのだが……人間進歩しないものである。言葉がすべったのではなく，顔に機嫌が表れてしまうのだ。申し訳ないと思った瞬間はもう遅い。こうした時メディア・センターに逃げこみたくなる。ところがである。ＳＦＣの近未来的なセンターはコンピュータを利用する学生であふれている。偽ゴシック図書館とはもう違う。私は仕方なくキャンパスの外の台地に散歩にでてみると春の戸外には雲雀が宙空で囀っていたりして，その一心不乱に鳴いている鳥の姿はどこか涙ぐましいものがある。メディア・センターと雲雀，なかなか新しい組み合わせではないか。

（総合政策学部教授）

医学情報センター所蔵の古医書

窪田よし
（医学情報センター総務担当）

医学情報センターの古医書は今まであまり世間に知らされていなかったが，昭和48年に『古医書目録』が刊行されて初めて，世の斯界，研究者，マスコミ関係者にも広く利用されるようになった。

そこで当センター所蔵の古医書について，目録刊行の経緯，内容を紹介し，古医書の中で代表的な，『解體新書』と『瘍醫新書』，その他の概要を紹介する。

1　『古医書目録』の発行

戦後の混乱期には，北里記念医学図書館創設以来の所蔵古医書を整理し，目録を作成・刊行することはほとんど不可能な状況であったが，ようやく昭和48年（1973）12月，『古医書目録』を発行することができた。

同書は，B５判上製，本文126頁，索引（著者名および書名）33頁，350部限定，定価は5,500円であった。

目録の作成には，順天堂大学で『山崎文庫』の整理にあたった鍋島直玄氏が，慶應に移られ，担当された。目録作成にはまず第一に，現物の整理が必要であった。現物は本館の貴重書庫に収蔵されていたが，戦前からの寄贈本が多く，傷みも相当に激しいものがあって，その取り扱い，整理には，大変神経を使ったと想像される。

目録は大別して三つの部からなる。第１部は，故富士川游博士の旧蔵書で，1,752点（3,600冊余），第２部は，故石黒忠悳氏の旧蔵書で，133点（186冊余），第３部は，その他の寄贈本集成で，444点（1,400冊余）であり，三田本塾からの移管本を除けば，数名の方々から寄贈されたものばかりである。

古医書の年代別では，

(1)　1500年代（文亀元年，足利幕府末期～慶長４年，豊臣秀吉の晩年）　11点

(2)　1600年代（慶長５年，豊臣秀頼時代～徳川時代の元禄15年）　146点

(3)　1700年代（元禄16年～寛政12年）　257点

(4)　1800年代（享和元年～明治33年）　482点

(5)　1900年代（明治34年以降）　67点

(6)　年代不明　1,300点余

と分類できる。

2　富士川游博士について

本目録の大部分を占める富士川本の旧蔵者，富士川游〔慶應元年（1865）～昭和15年（1940）〕は広島県出身で，日本における医史学の確立者といわれ，明治37年（1904）には『日本醫學史』を著述し，これに対して学士院恩賜賞を授与されている。

本学医学部創設直後の大正７年（1918）講師となり，昭和15年にいたる22年間，医史学を講じられ，逝去された後，御遺族より本館にその蔵書が寄贈された。なお鎌倉在住の赤松金芳氏が，かつて富士川先生から譲渡された薬学関係の書籍若干冊も，赤松氏の御厚意により，ここに含まれている。

本館所蔵分と，昭和17年（1942）に刊行された『京都帝国大学富士川本目録』収載の分を合わせると，富士川文庫の全貌が明らかになるといわれている。

富士川博士は，昭和２年（1927）日本医史学会を創立し，昭和13年（1938）第３代理事長に就任した。（因みに，初代理事長は，呉秀三，第２代理事長は入澤達吉，富士川没後の第４代理事長は，本学放射線科初代教授の藤浪剛一である。）富士川博士には，上記『日本醫學史』や『日本醫學史綱要』『日本疾病史』などの主著の他に多くの著作があり，『富士川游著作集』（全10巻）にまとめられている。

3　石黒忠悳子爵について

石黒忠悳〔弘化２年（1845）～昭和16年（1941）〕は，福島県出身で，日本の陸軍軍医制度の基礎を築いた人といわれる。慶應元年（1865）21歳で江戸医学所（東大医学部の前身）へ入所。明治維新

後，文部省出仕，大学東校に奉職。明治4年兵部省軍医寮出仕。明治12年（1879）東京大学医学部綜理心得。明治19年（1886）陸軍省医務局次長，明治23年（1890）陸軍軍医総監，陸軍省医務局長。明治28年（1895）男爵に列せられ，明治35年（1902）貴族院議員に勅選され，大正6年（1917）日本赤十字社社長，大正9年（1920）子爵に陞叙，枢密顧問官に親任される。昭和16年，97歳で歿。自伝『懐旧90年』がある。

石黒文庫には，陸軍軍医時代の生の資料が数多くあり，森鷗外との書簡などが多数残されている。昭和38年（1963）に，武見太郎氏の仲介により，御遺族から本館に寄贈されたものである。

4　『解體新書』について

有名な『解體新書』5巻（本文4巻，序・図を載せた1巻）が江戸の須原屋から出版されたのは安永3年（1774）8月であった。蘭学，すなわちオランダ語を通じて西洋の学問を知ることを，徳川幕府の鎖国下の日本で，ある程度可能にした本書の出版は，医学のみならず，日本の文化史上で画期的な出来事であったといえる。

『解體新書』は，杉田玄白が中心となり，前野良沢，中川淳庵，桂川甫周らが協力して，クルムス著『ターヘルアナトミア』のオランダ語の本文を翻訳したものである。扉絵の解剖図は，小田野直武筆によるものであるが，『ターヘルアナトミア』からの模写ではなく，アントワープ版『ワルエルダ解剖書』（1614年）の扉絵と酷似しているので，そこから模写したものだろうと思われる。

『解體新書』翻訳の動機や苦心，刊行に際しての細心の配慮などは，玄白の『蘭学事始』に詳しく述べられており，明和8年（1771）3月翻訳に着手して安永3年（1774）秋8月刊行までの努力は，後世の人々の心を打つところが多い。

5　『瘍醫医新書』について

『解體新書』が公刊されてから後，西洋医学に関する研究はいよいよ盛んとなり，ことにオランダ語版の医学書の翻訳は，次々と試みられるようになった。

杉田玄白起業，大槻玄沢翻訳とされる『瘍醫新書』30巻は，ドイツのローレンス・ハイステル著の“Chirurgie”を，オランダのヘンデレキ・ユルホルンが1776年に翻訳したオランダ語本“Heelkundige Onderwyzingen”の第3版を重訳した外科方面の訳書である。

写真1　クルムス『ターヘルアナトミア』の扉絵

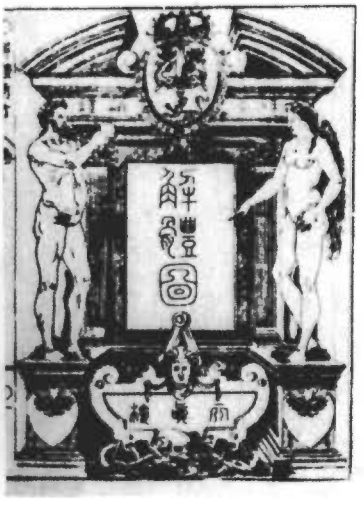


写真2　『解體新書』の扉絵

写真3　『ワルエルダ解剖書』の扉絵

LAURENS HEISTERS
HEELKUNDIGE
ONDERWYZINGEN,
MET
AANMERKINGEN
VAN
HENDRIK ULHOORN.

写真4　ハイステル“Chirugie”
タイトル頁

写真5　同左　扉絵

大槻玄沢は陸奥国（岩手県）出身で，江戸へ上って杉田玄白の高弟となり，前野良沢の教えも受けた。後長崎に遊学し，通詞の本木家に寄宿して，ますます蘭学に励んだ。江戸に帰って『蘭學楷梯』2巻を上梓し，蘭学の普及につとめた。玄白の命を奉じて『解體新書』の改訂を行い『重訂解體新書』14巻を完成し，その他多くの翻訳・著作を著わすなど，江戸在住の蘭学者のなかで指導的役割を果たしたことは，よく知られている。

6　その他の古医書について

杉田玄白らが『解體新書』を刊行するのに先だち，安永2年（1773）正月，杉田玄白らが，『解體新書』の翻訳をはじめて1年10ケ月程たった時，玄白は『解體約圖』（解剖図3枚と文章2枚を合わせたもの）を江戸の須原屋から出版した。

西洋の解剖学の概要を述べたもので，著者として，杉田玄白と中川淳庵の名前が並び，図は民間人の熊谷儀克（元章）筆となっている。翌年に出来上がる『解體新書』の予告編であることが序文によってわかるが，図も文章も『解體新書』のものとは違っており，別の著作と考えたほうがよい。

その他に，絵巻物として，『病草紙』がある。当センターに所蔵するものは，国宝の原本を，昭和42年（1967）4月，大塚巧藝社より刊行（覆刻版）されたものである。土佐光長筆，寂蓮法師詞書で，平安末期十二世紀後半の絵巻物である。

戦乱，飢饉，疫病がうち続いた時代に，末法思想をかりて，『地獄草紙』や『餓鬼草紙』等が世に出ているが，『病草紙』もさまざまな病気を見事に描写している。霍乱の女，不眠症の女，幻覚になやむ男など，ひたすら，リアルに，冷ややかに，ときにユーモラスに，揶揄的に描かれている。病気そのものの本態と，病人そのものの現実を見すえ，確かな構図，美しい配色，軽妙な筆致で描き出している。

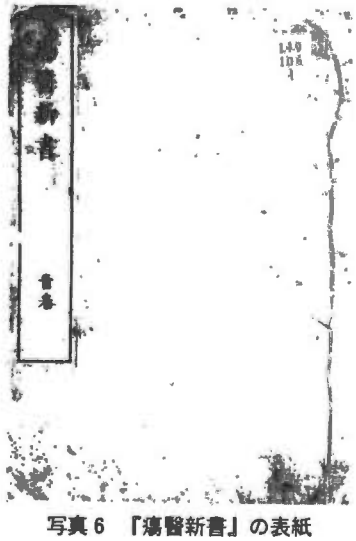


写真6　『瘍醫新書』の表紙

写真7　『瘍醫新書』のタイトル頁

7　最後に

以上，当センター所蔵の古医書の由来および『古医書目録』の刊行の経緯，一部古医書の簡単な解説を記した。

古医書は，その取り扱い方によっては破損，摩滅し易く，数次の災害，戦災によって消失したものが多いと推測され，今後はますます重要な存在になると思われるので，その保存・管理には充分な注意が必要であろう。

なお当センターでは，本年4月より7月まで，上述した『解體新書』（復刻版），『解體約圖』（覆刻版）の展示を行った。

参考文献

1）小川鼎三　解體新書：蘭学をおこした人々　中央公論社　1968

2）立川昭二　近世病草紙：江戸時代の病気と医療　平凡社　1979

3）大鳥蘭三郎　瘍醫新書の研究Ⅰ—Ⅴ　日本医史学雑誌　23(1)—24(4)　1977.1—1978.10

三田情報センター所蔵の古医書

山下光雄（やました　てるお）

（三田情報センター副所長付）

三田情報センターは多数の古医書が所蔵されているが，その経緯は大きく三つに分けることができる。

一つは三田に開講していた慶應医学所において使用された明治初期の医学書，次に塾員はじめ塾の理解者などの寄贈本の中に混在していたもの，3つめは塾の購入本である。今回は明治初年三田に開設された慶應義塾医学所と当時の医学書，そして近世初頭の著名な医師曲直瀬道三に関係する文書につき紹介する。

Ⅰ．明治初年の慶應義塾医学所

明治初年，現在の慶應義塾大学医学部とはまったく関係ない形で三田に義塾医学所が開設される。この開設の経緯を所長であった松山棟庵は「義塾懐舊談」で次のように語っている。

「明治6年5月頃，福澤先生の家の台所にて，立ちながら雑談中，先生曰く，塾にて英文の医学校を建つる所存であるが，自分は資金を給するから，足下は時間を与えられては如何と，小生大いに同情を表せり。この時先生の傍らに立ち聞きしていた前田政四郎を捉え，足下宜しく医学に従事し医者となるべし，どうか，と言われた。前田氏直ちにこれを承諾せり。先生笑いながら曰く，今即座に先生と弟子ができた，明日からでも始められる。と手取早く相談が纏まった　これ即ち慶應義塾医学所の発端なり。と。しかし，福澤諭吉傳では前田がドイツ語を学んで医者になりたいとの希望を聞き，福澤先生がドイツ語を学ばなくとも，義塾でも医学の修行ができるようにしよう，と言われたのである。当時既に東京医学校があり，医学は如何にしてもドイツに限ると言う定評の中で，英語による医学校を新設した理由は　一口に西洋西洋と言っても西洋の中で特に英米の文明に則るべき」と言う強い福澤先生の考え方が

あってのようである。このような背景の中で医学所の教科目が作成され，教科書参考書は大学東校（現東京大学医学部）がドイツ語の翻訳書を使用したのに対し，慶應義塾医学所では英米の原書のみが用いられた。松山棟庵は福澤先生が慶応三年に米国から持ち帰ったフリントの「内科書」の原書の内，窒扶斯に関係する部分を明治元年に翻訳し「窒扶斯新論」と名づけて出版している。(500 88-2，129-5-2）本書は英文医学書を翻訳出版した嚆矢と言われている。また明治6年にはカットル著作の「生理学」を森下岩楠と翻訳し「人身初学窮理」として刊行している。本書には他に明治9，11，15年版がある。(106-28-2，129-132-2，500-9-2，500-125-2）

また松山と共に医学所の教員であった新宮凉園は，横浜十全病院で米医シモンスについて医術を学んでいた時，福澤先生が英語による医学校を創設したことを聞き教員として参加する。新宮の著述は「中毒療法」•「医療必携」•「實弗的里亜論」などがあるが残念ながら所蔵されていない。また弟の新宮誠二（後松山と改）は生理学の教鞭をとり「人身生理学」を著わしている。また外科臨床講義を担当してたいのは杉田玄端で，その翻訳著述書としては安政4年「民間内外科要法」•明治元年「健全学」(121-37-6)•「産科寶函」などがある。

ドイツ医学一辺倒の時代の中で英語の教授陣による医学教育は明治6年10月から始まり，財政的な理由で明治13年で廃止された。

Ⅱ．近世の医師曲直瀬道三文書

近世の医学史を語るには曲直瀬道三を除いて考えることはできない。曲直瀬は歴代道三を名乗りその卓越した本道（内科）を中心とした医術は皇室，将軍をはじめ諸大名からも深い信任を得ていた。曲直瀬家文書は医史学者であり医史学資料蒐集家である故藤浪剛一（本塾医学部教授）の所蔵となるものである。藤浪の蔵書はその後遺族の意思で杏雨書屋（武田製薬）に売却されているが，医家の伝授書や掟などの300点が分割され，慶應義塾図書館が購入し三田情報センター所蔵となった。この文書の一部は高橋正彦（本塾文学部教授）によって「曲直瀬道三文書について」（史学23巻2，3号，339-354，1963）として紹介されている。また矢数道明はこれらの曲直瀬家文書などを「近世漢方医学史—曲直瀬道三とその学統」に纏めて，義塾からの文学博士の学位を得ている。この学位論文は名著出版から同名で刊行されているので容易に近世の医学事情を知ることができる。(A，490，9-M1-2)。

今回三田情報センターの古医書と言うテーマをいただき，いろいろ調査してみると，医学情報センターにないユニークな資料を所蔵していることが分かった。しかし，明治初期政府のドイツ医学に対し義塾が行った英米医学教育は，その後慈恵会医科大学に受継がれるが，医学所当時の資料が義塾に大変少ないので今後の充実が期待される。

また，福澤先生が「先ず獣身を養ふて，後に人心を容る」と言われているが，この「獣身」となるべき条件の一つの食事ついては多くの資料が残されているので，これについては別の機会に述べたい。

＜慶應義塾図書館講演会＞

第10回　平成3年12月13日
「占領下における検閲資料コレクション
——プランゲ博士とそのコレクション」
講師　奥泉栄三郎氏（シカゴ大学極東図書館日本資料主任司書）
於　慶應義塾図書館A-Vホール

第11回　平成4年4月8日
「知識の展開と図書館」
講師　ニコラス・バーカー氏（ブリティッシュ・ライブラリー稀覯書担当部長）
於　慶應義塾図書館A-Vホール

資　料

三田情報センター所蔵の古医書（曲直瀬文書）

（　　）内は請求記号

1. 正親町天皇綸旨―道三に賜りし感状（150X-1）
2. 口宣．他12（150X-2）
3. 今大路家綸旨―曲直瀬―今大路―方教・叙従五位下位記（150X-3）
4. 曲直瀬家御朱印（徳川秀忠御内書・他２）（150X-4）
5. 曲直瀬家知行証文書―村井貞勝地子銭免許状・他２（150X-5）
6. 今大路家知行高沙汰書―徳川家綱領知印判状・他４（150X-6）
7. 道三宛主簡―清閑寺共房・野宮定逸連名書状・他１通（150X-7）
8. 観修寺光豊副状―元鑑法印勅許の書状（150X-8）
9. 支山人より道三に授けし書―支山人範翁導道送道伝授書・他１（150X-9）
10. 脉治之大悟（150X-10）
11. 道三軍諫之書―初代曲直瀬道三参陣に祭しての九ケ条の訓戒（150X-11）
12. 小乗覚自養録・紙背養綱書状・他５通（150X-12）
13. 自養録・紙背文書11通（150X-13）
14. 道三三世治療之神授・三国医術興起之略（150X-14）
15. 丹溪纂要（150X-16）
16. 道三遺文―初代曲直瀬道三覚書・他８通（150X-17）
17. 道三雑記―曲直瀬正慶（道三）医術心得の覚書（150X-18）
18. 永日九九之茶話―初代曲直瀬道三診察之茶話（150X-19）
19. 供御薬次第・他４（150X-20）
20. 高簾陳時―溪公上東井之書―初代曲直瀬道三自筆書状（150X-21）
21. 道三より玄朔へ賜りし書状―初代曲直瀬道三書状（150X-22）
22. 翠竹院道三の手簡―曲直瀬道三書状（150X-23）
23. 一溪より養寿院に贈りし文―芳春院―溪書状・他１（150X-24）
24. 道三の手簡―曲直瀬道三書状・他５通（150X-25）
25. 道三の手紙―曲直瀬道三（玄朔）書状・他３通（150X-26）
26. 三病外證辨別之口傳（150X-27）
27. 惟授一人之直傳―曲直瀬玄朔医道伝授書（150X-28）
28. 玄朔の手簡―曲直瀬玄朔書状・他10通（150X-29）
29. 玄朔より元鑑宛書状遺書―曲直瀬玄朔書状（150X-30）
30. 玄朔より元鑑へ送る書状遺書―曲直瀬玄朔書状（150X-31）
31. 天符之図・他数通（150X-32）
32. 曲直瀬知行高―曲直瀬玄朔申状（150X-33）
33. 元鑑之手簡―遺書目録等３通（150X-35）
34. 元鑑手簡―曲直瀬（道三）正慶書状（150X-36）
35. 玄鎮の手紙―曲直瀬玄鎮相傳目録・他５通（150X-37）
36. 玄鎮自筆書状　２通（150X-38）
37. 養生訓―曲直瀬玄淵養生訓　（150X-39）
資料に見る日本食文化と食養史（展示目録）に全文翻字
38. 聖功方―曲直瀬木下道円宛聖功方（150X-40）
39. 今大路家方家秘金騰之方伝授―曲直瀬道三家秘伝金騰之方伝授書（150X-41）
40. 玄淵自筆出世書（略歴）-曲直瀬親俊覚書（150X-42）
41. 木下道円宛之書簡―曲直瀬道三（玄淵）書状21通（150X-43）
42 玄淵の手紙―曲直瀬玄淵書状　３通（150X-44）
43. 玄淵の書簡―千葉道悦宛・他１通（150X-45）
44. 伝授書目録附御道具返納目次―差出者不明の入日記・他２通（150X-46）
45. 今大路梅譚（宮静）漢詩・和歌等揮毫の書巻（150X-47）
46. 玄淵先生詩篇―曲直瀬道三漢詩稿（150X-48）

47. 玄淵自筆杵工部集—曲直瀬玄淵漢詩書巻（150X 49）
48. 天醫山堂宇再興記—曲直瀬道三（7世）天医山道宇復興記（150X-50）
49. 今大路方教夢記（150X-51）
50. 艶書物語—藤原良音艶書物語（150X-52）
51. 玄鎮玄淵両先生作文・今大路文粋4篇—曲直瀬玄鎮草稿・他2通（150X-53）
52. 曲直瀬門人誓詞—立庵医導伝授誓詞・他1通（150X-54）
53. 當門下之法則下書—曲直瀬道三門下誓詞（案）（150X-55）
54. 玄朔先生門下法則十七條—延寿院玄朔門下誓約書（150X-56）
55. 玄淵門人誓詞記名　曲直瀬玄淵門下誓詞（150X-57）
56. 玄淵門人誓詞・玄淵門下法則並誓詞記銘—曲直瀬玄淵門下誓詞（150X-58）
57. 玄琢の書簡—寿昌院玄琢(野間氏)書状（150X 61）
58. 典薬頭装束—寿昌院玄琢書状・他3通（150X-62）
59. 野間寿昌院玄琢自筆—曲直瀬道三（初代）一枚起請文・他2通（150X 63）
60. 今大路家奉呈処方方—曲直瀬玄淵（延寿院）延齢丹他薬処方書（150X 64）
61. 今大路献上薬処—曲直瀬玄淵延齢丹他薬処方書（150X 65）
62. 屠蘇献上書—屠蘇白散献上の覚　2通（150X 66）
63. 今大路家献上薬袋式　元三御祝之式薬袋献上の覚（150X-67）
64. 元三御前之薬延寿御祝酒—元三御前之三薬延寿之御祝酒作成の次第書（150X-68）
65. 三十八味以下薬名等—三十八味以下薬名書（150X-69）
66. 洋薬和薬の書付—大治玄瑞・薬処方書他（150X 70）
67. 諸病薬方（150X 71）
68. 辨證題銘（150X-72）
69. 御清之書付　（150X-73）
70. 今大路家献上薬法—延寿院玄淵薬法書　3通（150X-75）
71. 典薬頭官物之覚（150X 76）
72. 今大路家古文書5通　官物請取文書—東坊城大納言・広橋大納言家臣4名（150X-77）
73. 今大路正経任官御官物請取—今大路正経叙従五位下の時諸家へ差上る金子の請取書（150X-78）
74. 曲直瀬家起請文—曲直瀬道三（玄朔）・他5名起請文前書他8通（150X-79）
75. 今大路家治療申付—札道三言上書—今大路道三覚（150X-80）
76. 諸証文　曲直瀬道三（親昌）借用証文・他3通（150X 81）
77. 出座覚書—道三出座覚書　（150X-82）
78. 典薬頭待遇の書つけ—曲直瀬覚書・他1通（150X-93）
79. 佐々木系譜（150X-84）
80. 曲直瀬家譜（150X 85）
81. 今大路家譜（150X-86）
82. 天明八年今大路家京都屋鋪—曲直瀬家屋敷地図面（150X 87）
83. 久大和守の手紙—久世広之書状（150X-126）
84. 諸大名手簡—松平大和守書状・他11通（150X-127）
85. 式部大輔宛の手簡—備後守書状・他4通（150X-128）
86. 式部大輔宛の手簡—中山備後守書状・他5通（150X 129）
87. 今大路家書類—石川蔵次郎書状・他3通（150X-130）
88. 道三宛の書翰—前田玄以書状・他5通（150X-131）
89. 伊東坦庵手簡—伊東坦庵書状（150X-132）
90. 書状　牛込宝徹書状・他1通（150X-133）
91. 道三宛女院之手紙—女房女院・せんし・綾小路・他14通（150X-134）
92. 女房之送状—二位局消息・他6通（150X-135）
93. 今大路古文書—すま・おのえ連名消息・他4通（150X-136）
94. 登昌筆口上—冬昌覚書（150X-137）
95. 元鑑宛の手簡—休庵書状・他5通（150X-138）
96. 仙溪書状集　10通（150X 139）

97. 尾上より延寿院宛手紙―おのえ消息 (150X-140)
98. 諸家書状等4通―差出者不明書状他3通 (150X-141)
99. 公書之―諸方よりの書状等 2通 (150X-142)
100. 道三宛手簡―長少右衛門書状・他6通 (150X-143)
101. 兼如能札百諳連歌 (150X-144)
102. 源空文法 (150X-145)
103. 庭田家暦―差出者不明の書状 (150X-146)
104. 耕雲子啓札の法 (150X-147)
105. 略歴 (150X-148)
106. 馬印 (150X-149)

<小展示ニュース (2)>

<三田情報センター>

平成3年

7月12日～9月26日
昇亭一景の'東京名所絵"

9月27日～10月15日
山中散生コレクション展

10月16日～11月1日
『三田文学』新編集長坂上弘展

11月2日～11月16日
「文学上の偽物」展

11月29日～12月10日
梅田晴夫展 Part Ⅱ

12月11日～12月21日
故宮崎康二君遺品受贈記念展示

平成4年

1月8日～2月1日
「幻想作家泉鏡花」展(三田文学ライブラリー所蔵資料による)

2月3日～3月19日
ヴィクトル・ユゴー展――慶應義塾図書館新収コレクションによる初版本を中心とした

3月25日～4月30日
俳人久保田万太郎展

4月18日～4月25日
三田文学五人展
(於 図書館旧館1階展示室)

5月2日～5月14日
詩人佐藤春夫展

5月15日～5月16日
クラウス・モーディック展

5月18日～5月30日
沢木四方吉関係資料展

6月1日～6月19日
宇野信夫追悼展

6月22日～7月10日
池田弥三郎十年祭特別展示

7月13日～7月25日
木口木版の華やかかりし頃――Edmond Evansとその周辺

<日吉情報センター>

平成3年

11月26日～12月8日
故宮崎康二君遺品受贈記念展示

平成4年

4月9日～4月30日
錦絵に見る開港当時の横浜

7月22日～7月31日
「近代イギリスの詩人たち」展

<湘南藤沢メディアセンター>

平成4年

7月24日～7月29日
日本の旧刊本 百万陀羅尼から室町刊本まで 第53回私立大学図書館協会総大会記念展示

総合資料室にて

上原順子（うえはらじゅんこ）

「大学院の方ですか？」

毎日，カウンターの中から私達は，幾度となく利用者にこう呼びかける。

ここ，三田情報センターの4階・総合資料室は原則として教員と大学院生のためのフロアーであるため，常時，入り口近くのカウンターに座り，バッジをつけていない利用者が入って来ようとすると，大学院生か教員かを，瞬時のうちにみきわめ，このどちらでもないと判断したら，呼び止めるのである。

総合資料室には，学部生も利用する，雑誌，統計資料，判例，法令，国連やＥＣ，ＯＥＣＤなどの国際機関が発行する出版物等が置いてあるため，学部生や外部の利用者は，３階で入室の手続きをし，バッジさえつけていれば利用できる。

だが，このシステムを知らずに或いは知らない振りをし，カウンター前を通り過ぎようとする利用者は，その都度カウンターで呼び止められる。また，手続きをしていながらバッジをつけない人々もいる。最近の学生は美意識が強いのか，小さな細長いバッジを故意につけずにポケットなどに納めていることが多い。

さて，総合資料室の業務は利用者のチェックばかりではない。雑誌の発注，受入，配架，製本から，レファレンス，ＣＤ-ＲＯＭの利用指導やオンライン・データベースの代行検索などのカウンターの業務，経商資料室委員会や法学部図書委員会の選書業務，予算管理などがある。また，最近の書庫スペースの狭隘化に伴い，小刻みな書庫移動もある。特に，この２年程は，全塾情報センターの機械化トータル・システムの中での，雑誌業務のデータの入力作業に喘ぎ，更には，新たに導入したデータベースの便利さに驚嘆しつつ，利用指導に追われてきた感がある。だが，システムの完成も間近となった現在，改めて周りを見渡し，利用者と接するとき痛感するのは，資料を知ることの大切さである。ごく当たり前のことであるし，主題を持った資料室としては，必要不可欠である。

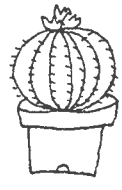
殊に，法学部図書委員会を担当して４年目の私としては，自ずと法律資料に関心が向く。法律の分野は，自己研鑽のための資料（基礎的なガイドブック，文献案内，二次資料集，判例の引き方等）が，比較的充実している。ということは，その分専門的な知識を必要とするからであり，これらの資料を作り上げた先人たちの苦労も伺い知れるというべきであろう。また，法律の資料室の全国的な組織である，法律図書館連絡会が年一回開催する総会や，随時行われる研修会に参加する機会にも恵まれている。

更には，法律資料研究会—これは，東京近辺の法律の資料室の有志が集まり，月一回程，学習会を行っているゼミ形式の研究会—には，ここ一年程，業務が繁忙を極め出ていなかったが，最近また出席するようになった。この会では，例えば，他大学においてとのようなデータベースが取り入れられ，その使い勝手は？というような，最近の情勢を直に知ることができるし，具体的なレファレンスの事例も学べる。また，交流を深める上でも有益だ。これからも，自己研鑽しながら，機会ある限りこのような研究会に参加し，得た知識を活かすようにしたいと考えている。

今日も私達は，カウンターから「大学院生の方ですか？」と呼びかけ，コピー機の調子が悪ければ駆けつけて，詰まっている用紙を取り除いたりする。

だが，コピー機に向かって走りながらも，利用者と資料との架け橋となるべく，資料を知る努力を続けたいと思うのである。

（三田情報センター・資料課・総合資料室）



三田の図書館とドイツの図書館

—私の海外研究生活の経験から—

加藤久雄（かとうひさお）
（法学部教授）

Ⅰ．はじめに

私の専門領域は，刑事法学と医事法学である。その関係で，常に法学部図書館と医学部図書館の両方を利用している。国内の図書館は勿論，海外の図書館も，滞在が長かったドイツの様々な図書館やアメリカの大学図書館等，多数利用している。

私がドイツの図書館で最も世話になったのは，約2年間留学をし，後に1年半近く教鞭を取ったことのあるミュンヘン大学の図書館である。1984年から85年にかけて約1年2か月，夏と冬のゼメスターで講義とゼミナールを担当したことがある。当時の身分はバイエルン州の教員という形で給料をもらっていた。私の研究室は，指導教授であるシューラー＝シュプリンゴルム先生主宰の全刑法学研究所の中であった。この研究所のある法学部棟の前の広場が，あの有名なプロフェッサー・フーバー広場であり，ルートヴィヒ通りを挟んで反対側がゲシュヴィスター・ショル広場である。ミュンヘン大学を象徴するこの二つの有名な広場の名前は，第二次世界大戦中，国家社会主義，いわゆるナチスの軍事政策に抵抗し，処刑された同大学の学生であり「白バラ」運動のリーダーであったショル兄妹と，それを支持したフーバー教授を称え，戦後改名されたものである。そしてショル兄妹が逮捕されたと言われている建物内には，ショル兄妹やフーバー教授などの立像がリーフされた顕彰碑が作られ，毎年2月22日には，大学主催の記念式典が行われいてる。ミュンヘン市を訪れる機会があったら，是非このハオプトゲボイデ（中央棟）を訪ね，当時の全ドイツ国民に支持されていたとされるナチスの政策に対しても命を賭けて抵抗したドイツ人の若者達がいたことを思い出して欲しいものである。

Ⅱ．社会科学専攻者と図書館

さて，我々社会科学を専門領域とする者にとっては，文献はまさに学者の生命といえよう。今日の「被害者学」（Viktimologie）の創始者メンデルソーンは，ユダヤ人であったため，その全資料，全蔵書をナチス人によって剥奪されてしまった。そして戦後彼は，学問への情熱断ち難く，殆ど誰にも発想しえなかった犯罪の「被害者」の側からみた犯罪原因の究明を目的とする「被害者学」を打ち立てたのである。つまり「被害者学」に関して全く文献が存在しなかったので，それならば他の学者と同じスタートラインに着け，同等の学問的闘いができると考えたからである。我々司法試験委員は，今年度の「刑事政策論文式」の設問として「犯罪の被害者に対する刑事政策上の配慮を概観し，その意義を論ぜよ」というテーマを出題した。このように今日では，すでに「被害者学」的発想は刑事法の分野で市民権を獲得しているのである。

私がここで言いたい事は，社会科学を研究する者にとって，いかに文献や生きた情報が必要であるかという点である。こうした文献や情報で成り立っている「図書館」は，まさに学問研究活動にとって「宝の倉庫」でもある。ゆえにその大学の学問水準を知ろうとすれば，その「図書館」を見ろとさえ言えるのである。私はすでに7冊の拙著（英・和文）を図書館に寄贈している。学生が図書館に文献を求めて足を運び，その書架にスタッフの寄贈本や博士論文が満ちあふれているのを見た時，学問の深遠さに畏敬の念と学問水準の高い大学で学ぶことの幸いを感じるであろう。それが「大学」の理想の姿であると思っている。そういう意味でも，大学の図書館員は毎日学問の宝の山と接し，初心者の学生に学問研究のために文献案内ができる，その仕事に喜びとプライドを持ってほしいものである。

Ⅲ．ミュンヘン大学の図書館

次に，ミュンヘン大学の図書館での経験に照らして三田の図書館との比較をし，利用者の一人として日頃感じている点について若干述べてみようと思う。

ミュンヘン大学には，三つのタイプの図書館，ないし図書室が備わっている。まず，中央図書館，ここには最新の雑誌や博士論文集，教授資格論文集，戦前の古い単行本・雑誌が殆ど完璧に揃っている。そしてこの中央図書館の筋向かいにはバイエルンの国（州）立図書館があり，相互補助・補完システムが採られている。求める資料が無い場合は，相互貸借システムによって数日のうちに入手できる。留学生でも外国人観光客でもパスポートで利用できる。また，各学部には学部の図書室と各専門分野の研究所ごとに図書室が備わっている。従って，ここでは学生も教員も三つのタイプの異なった図書館（室）を持つ事になる。

私の指導教授は1975年の秋にハンブルク大学からミュンヘン大学に移ってこられた。新任の正教授には，秘書一人，助手三人，附属図書室，セミナー室が与えられるほか，この附属図書室を充実させるために，3年間に渡り毎年約300万円の図書費が与えられる。私が教授の下で講師として働いたのは教授着任後10年目で，その研究所の図書室には，刑事政策，犯罪学，少年法，被害者学の文献の殆どが揃っていた。そして毎週一回のスタッフ・ミーティングの際に，購入された図書が紹介される。研究室は9部屋（一つはセミナー室）あり，その上の階のフロアー全部（屋根裏部屋）が図書室であり，5部屋からなっていた。

このように，各研究所に附属の図書室（専属の図書係がいて収書・整理を一人で行っている）があるので，ドイツ人，外国人を問わず，着任した研究者はその日から研究環境が整うシステムになっている。そして，所員には鍵が与えられるので休日を問わずいつでも利用できる。

中央図書館は，学生や留学生は保証金を約3,000円（帰国時に返金される）を払って利用券を貰いそれで借りることができる。また，中央図書館にはベテランの館員が大勢いて，顔見知りになるといろいろ便宜をはかってくれる。例えば，教員に対してのみであるが，マイクロフィルム化されている博士論文等の全部コピー，講義用のレジュメの作成などもしてくれる。

こうした恵まれた研究環境を数年経験して帰国すると，オーバーな言い方かもしれないが，まさに「天国から地獄（？）」ほどの研究環境の激変を味わうのである。

Ⅳ．三田の図書館とその将来への希望

私は国内では塾と大阪大学の二つの大学を卒業したのだが，大阪大学は，例えば，刑事法専攻の大学院生には教授室前の共同部屋が与えられ，教授室や助手室の文献を自由に使用させて貰えた。

一方，私学の中でも恵まれているといわれる塾の場合は，最近はとみに司法試験などの受験生が4階のフロアーを占拠し，一般の院生が修論や博士論文などを書くために文献を集めに行っても文献探索のための机はない，コピー室は常に満員，といった状況のようである。博士課程の学生だけでももう少し利用条件を整えてあげてもいいのではないか。国立大学のように博士課程の院生や助手が教授室の近くの室を与えられて共同研究ができるような環境が必要であるように思われる。学生会館もない三田では，雨の日などに学生のたまり場としては機能しているかもしれないが，本当に勉強したり学問したりする利用者には十分な環境を提供しているとは言えない。

また，現在の三田キャンパスの一か所集中中央図書館方式は，我々研究者にとり常によそ行きの格好（精神的にも）で利用しなければならないのでとても苦痛であり，我々学部の資料室時代を知る世代にとっては，現在の三田の図書館は本来図書館とは利用する者のためにあるべきなのに，どこか利用させる側的，管理する側的発想がチラチラ見え隠れしているように思われる。外国であまりに恵まれた経験をしてしまった者の僻みであろうか。三田の図書館の学生利用者へのサービスが中心になっているような現状からは仕方ないことかもしれない。学部の資料室を復活させることを含めて，図書館のフロアーの一部に教員と博士課程の学生のためだけのスペースを確保すべき事を提案しておきたい。

最近，共同研究のために東京医科歯科大学の難治疾患研究所によく出かけるが，まさに前述のドイツ方式を採っており全く羨ましい限りである。日本でも国立大学ではこうしたことができるので

ある。

また，現在の塾の図書館（情報センター）のシステムの中で，果たしてどれだけのスタッフが法律学なり法律学の研究方法を理解し，それとの関係でどの程度，その日常業務と結びつけた発想で仕事をすることができているのであろうか。私など，塾のそうした研究体制の設備を待っている程のノンビリ屋でもないし，法制審議会のメンバーになり，立法作業のため最新の情報を常に必要とする立場にあるので，自衛手段として拙宅を完全にＯＡ化し，海外の友人とファックスで情報ネットワークを作り，一万冊位の本を収納できる移動式書架を作って，単行本は洋・和書とも殆ど実費購入し（洋書はミュンヘンの書店と直接取り引き），研究条件の維持に努めている。ドイツにいた時のように，毎日研究室に出て行かなければ仕事にならないという研究環境を得られる日が果たして三田の山に訪れるのであろうか。

側聞するところによれば，三田の情報センターも将来は「メディア・センター」の構想の中心になるという。最近近くにできたＮＥＣのインテリジェンス・ビル級の建物を綱町グランド跡地に建てるくらいの構想があるのだろうか。もし，現状のスタッフと設備・建物を使っての組織の改変だけの構想ならば，我々家内工業的研究手法をとる研究者（社会科学の研究者の殆どがそうであろう）にとっては，図書館はますます縁遠いものとなっていくだろう。こうした大構想はもともと足元を固めてからにしてもらいたい。例えば，学部資料室の復活とか，４階フロアーの教員・博士学生のための専門コーナ（スペース）の確保などが先決であろう。

学部資料室の復活がスペースの点でもスタッフの量の点でも不可能であるとすれば，せめてスタッフの学部・学科ごとのライン化・専門家化をお願いしたい。例えばライン化とは，選書課→収納課→整理課→レファレンス→四階フロア→スタッフという流れを各学部ごとに作り，十年単位で専門領域の分かるスタッフの養成をすることをいうのである。現在のようにスタッフがくるくる変わるようではスタッフの専門性は確保できない。

法律学科には創設百年を記念して「法情報室」が設置された。学部としても一人位専任のスタッフ（例えば助手のような身分で）を配置し，上述の図書館のスタッフ・ライン化とドッキングさせれば，我々利用者にとって大変利用しやすいシステムということになるのであるが……。システムの合理化を理由に，スタッフの無目的な異動で専門性が阻害され，我々利用者と我々の研究に理解のあるスタッフの距離がどんどん離れ，図書館は誰のために，何のためにあるのか，という事態になっても，図書館は学問の原点，情報の宝の蔵であることには変りはないわけで，そこしかなければ我々は不便さに苦々しくおもいつつも利用せざるを得ない。

三田の図書館はスタッフと蔵書の「量」においては大学の図書館としては水準の高い部類に属するが，その「質」の面ではどうであろうか。組織が大きくなると常に管理的，官僚的雰囲気が進行してしまうのである。これでは，予算面では東大，京大にはかなわないが，ノウハウで生き抜かざるを得ない私学の良さが失われてしまう。

図書館の文献という情報の「宝」とともに研究活動し，これからもしていくであろう一利用者として，また，研究者あっての図書館であるという視点から外国での経験を踏まえて，あえて苦言と願望を呈した次第である。御宥恕願いたい。

雑誌の乱れと書架スペース

樋口　三恵子

理工学情報センター・資料サービスで雑誌業務を担当してはや1年が過ぎた。

スタッフ約20名の小さな図書館なので週に1度昼休みのカウンター当番が回ってくる。日頃利用者と接する機会がほとんど無いために，利用の実態を直接知る機会となる。貸出や複写の手続きをしていると利用の多い雑誌がある程度決まっていることがわかる。このような雑誌は傷み具合も激しく，その書架も乱れている。つい最近もこんな事があった。

「書架に○○という雑誌の○○巻が見当たらないんですが？」という質問。それは確かによく使われる雑誌であり，書架に行ってみるとその部分に一冊分のスペースがある。まわりを見ても紛れた様子はなく，私はその利用者に「誰かが使っているかもしれませんから明日もう一度見てもらえないでしょうか？」と言ってその場は引き取ってもらった。翌朝もう一度書架に行って見たが雑誌は無い。そこで館内を捜してまわったところ，全く別の書架の一番下の段に当然の配架のようにそれが置いてあった。これは利用者のマナーの悪さのほんの一例だが，もう一段上手になると使用した雑誌を閲覧机に置いたまま帰ってしまう人がいる（当センターでは利用者自身で図書を戻してもらうシステムになっている）。しかしながらこの現象は利用者のマナーだけに起因するのだろうか。情報センターの側にも少なからず問題がある。それは書架スペースの不足である。受入れタイトル数が増加しても書架スペースが増えるわけではなく，ただでさえ満杯の書架にさらに無理が加わる。利用者の要求があるかぎりタイトルは増え続け，また，雑誌自身もその厚みを年々増やしているために書架スペースはどんどん圧迫される。もしかしたら利用者はきちんと返したいのにスペースに余裕がないのでつい別の場所に置いてしまうのでは……。

さて，書架スペースについてはこの夏，集密書架が増設されたのでこれまでよりも余裕のある配架が可能になった。雑誌の行方不明は少しは減るものと予想される（また一杯になったらどうするかという終わりのない問題はあるけれども）。厄介なのは利用者のマナーである。春の利用者説明会で返本の心得について指導したところでどの程度の効果があるのだろうか。返本に限らず，無断持ち出しや切り取りといった問題は利用者本人の良心に関わっている。少しでも良心に訴えるような方法が見つかればもっと気持ちよく雑誌や図書を利用してもらうことが出来るはず。その方法を見つけるのが雑誌担当2年目の私の大きな課題なのである。

（理工学情報センター
資料サービス担当）

（カット　清水多喜子）

KOSMOS の運用とサービス

医学情報センター

Ⅰ．はじめに

医学情報センター（以下，当センター）ではKOSMOS の早期稼働を目指して，1990年度から準備作業を開始し，1991年12月２日から閲覧業務の本格稼働が始まった。本稿では，当センターにおける KOSMOS での業務についてその現状を報告し，問題点と展望について述べてみたい。

Ⅱ．当センターにおける機械化の経緯

当センターにおける図書館業務機械化の検討は1967年から1971年にかけて，雑誌受入・整理及び情報検索の基本的システムである KWIC 方式の２つのプログラムの開発が行われたのを始め，1980年には日吉計算センターを利用して，図書登録事務のシステム開発を行い，同年には医学部病院情報システム部のＩＢＭ計算機の利用に切替え，図書受入・登録および予算管理の機械化（MELIC SYSTEM）を開始した。更に1989年に閲覧業務を中心とした機械化の検討を始めたが，その中途で KOSMOS 開発計画がスタートしたことにより，当センターの独自の計画は発展的に解消した。

当センターではトータルシステムとしての機械化がされていなかったため，１日も早い利用者サービスの向上と業務の効率化を目標に，1991年４月から KOSMOS への業務移行を実施しようとしたがシステム開発などの遅れによって，６月から９月へとスタートの順延をせざるをえなくなり，結局12月にずれ込む結果となった。

稼働当初からシステムの完成度と問題点の改善をしながら運用をしてきたことにより，閲覧サービス業務はたびたび大きな混乱が生じ，利用者には多大な迷惑を掛けることとなってしまった。閲覧業務が稼働してから８ヵ月が経過した現在なお，部分的に未解決の問題を残している。また，図書受入・雑誌・目録システムでは，未だ多くの問題点が未解決となっている。このシステムを早く完成させ，全業務が支障なく稼働することが切望される。　（古沢　賢一）

Ⅲ．図書受入

1．発　注

当センターの収書は，そのほとんどが見計らいによって運営されている。したがって，手元にまず現物を置いて，KOSMOS 内の重複チェックをすることから始まる。もちろん書誌作成時にシステムによって自動的に重複チェックをすることも可能だが，現状では時間がかかるため控えている。重複していないことを確認した後，見計らいを受入するために書誌を作成する。通常は学術情報センター目録システム（以下，NACSIS-CAT）を検索して，ヒットすればダウンロードし，そうでなければオリジナル簡略書誌を作成している。この時，洋書に関してはほとんどがヒットするが，和書に関しては発行１ヵ月以内のヒットはかなり困難である。１ヵ月経過すると参照 TRC MARC がよくヒットし，次に総合目録データベース（以下，ＮＣ）がヒットする。このヒットしたＮＣレコードの作成年月日を見ると，ほとんどが生まれたばかりであり，驚くことに当日の日付の場合もしばしばあり，まさにオンライン・ネットワークの威力を肌で感じている。こうして発注時に，完成度の高い書誌を作成すれば，重複チェックもれを防いだり，その後の目録作業の軽減へとつながっていき，これが KOSMOS の思想となっている。

書誌が確定すると，見計らいにもかかわらず，現在は発注行為をしなければならず，書店，予算コード，見積価格などを入力している。もちろん本来の発注行為としての発注票も出力することができる。現在，システム的には見計らいに対する発注外受入機能を開発中である。

2. 受入・支払

発注データをさらに追加・修正する形で，受入データとして納品番号や請求書番号などを入力している。この段階で登録番号を自動付与させ，その画面コピーと共に現物は装備，目録へと流れていく。

会計処理は受入完了後，まとめて書店，予算科目，請求書番号毎の支払いブロックを作成する。この作成と同時に，支払い明細リストも出力され，このリストと各請求書とを照合した上で，各書店に毎月1ヵ月分の伝票請求を行っている。

（村上篤太郎）

Ⅳ．目　録

目録では，発注で作成した未完成書誌・所蔵レコードに修正を加え完成させる作業と，NACSIS-CAT への登録作業を行っている。

1. 暫定書誌

本来の KOSMOS 書誌レコードは，典拠や書誌階層のリンクが張られ，複雑な構造を表現している。

しかし平成4年7月現在においては，NACSIS-CAT データの KOSMOS への一括登録が未完了である。この一括登録は階層やリンクの複雑な構造を持ち込むので，既存の KOSMOS 内の書誌は，これらの関係を持たない単純な形が望ましい。このため現在は KOSMOS には，所蔵レコード以外のリンクは張らない暫定書誌を作成している。

2. 書誌修正

端末作業の前に，あらかじめ NACSIS-CAT 書誌の画面コピーと現物とを照らし合わせ，書誌記述の修正および請求記号・件名（MeSH）を書き込んでおく。

この作業の後，KOSMOS と NACSIS-CAT の書誌レコードの修正を並行して行う。

NACSIS-CAT の書誌レコードを先に修正し，ダウンロード機能で書誌レコードを KOSMOS に取り込んでいる。

3. 所蔵修正

目録で KOSMOS に入力している所蔵データは，請求記号と配架場所等のコード情報である。

NACSIS-CAT への登録の際は KOSMOS のアップロード機能を利用している。あらかじめ入力しておいた所蔵データのうち請求記号と BOOK-ID をアップロードし，NACSIS-CAT に登録している。アップロードすると KOSMOS に入力した所蔵データを再び見ることができるので，入力ミスをチェックできる。

4. カード出力

現段階では，除籍機能・新着図書リスト出力機能・蔵書点検リスト出力機能が未開発のため目録カードを出力している。KOSMOS にはカード出力機能はないので，NACSIS-CAT を別の端末で再登録してカードを出力しなければならない。

以上，現在のところ作業の手順やデータの形に制限の多い目録作業であるが，KOSMOS 機能の充実，一括登録の進行，入力基準の整備とともに，典拠コントロールや階層を表現した本来の目録データを持つことが可能となり，作業の手間も軽減される。

（近藤真理子）

Ⅴ．雑誌発注・受入・製本

1. 書誌検索

雑誌の場合，いかに量を速くこなすかが勝負なので，書誌検索に時間を割くわけにはいかない。幸いにも，ISSN の付与が普及してきたので，番号から1書誌にヒットさせることができる。

2. 発　注

雑誌のあらゆる発注に対応できるようにと，発注データの入力項目は多様である。特に，発注形式と支払い形式の整合性や，予算コードの入力には慎重にならざるを得ない。受入後に，発注データの入力ミスに気がついても，修正ができないことや予算管理への影響等を考えるとミスの許されない作業である。

3. 受入れ管理データ入力

所蔵毎に，受入時に必要な情報を管理している。チェックインカードで言えば，タイトルの側にメモしていた雑多な，しかし見落としてはなら

ない情報である。配架場所，請求記号，学情ＩＤ等，きめ細かく項目を立てている。また，コンテンツシートサービス，レビューチェック等を行うタイトルについて登録しておけば，チェックイン画面への表示と帳票の出力で確認できる。

4. 受　入

受入れる巻号・年月次を予測し，チェックイン時に受入日付を自動設定する機能がある。したがって，予測表示の確認後，作業は BOOK-ID を入力するだけで処理できる。これによって，定期的に発行される雑誌については，作業効率が上がったように思う。但し，臨時増刊号が発行された場合は，予測された表示巻号を修正しなければならない。その他に受け入れた順番をコントロールする疑似巻次という項目がある。レコード毎の疑似巻次によって，巻号表示のない増刊号や延着の号を正しい位置に配列させることができる。

5. 製　本

製本管理データとして，製本単位冊数等を登録しておくと，製本データを自動作成するはずであった。しかし，当センターは，一製本業者に対するレコード数が定量制限を越えているために，オンラインで一括処理できないのが現状である。やはり製本作業の機械化は，一番の難関であり，これが完成してこそ雑誌受入システムと言えるのではないだろうか。　（五十嵐由美子）

Ⅵ. 閲　覧

1. 利用サービス

図書館業務の機械化の目的は，整理部門における業務の効率化と同時に，利用者に対するサービスの向上にある。そこで，当センターにおいて KOSMOS が稼働したことによる利用サービスの変化と，今後の課題について考えてみたい。

利用サービスの変化として，貸出の手続きについては，機械処理を行うことにより，利用者が直接手をくだすことは何もなくなった。他センターの利用者には，既に閲覧システム（CIRSYS）が稼働していることにより何の変化もないが，当センターの利用者にとってみれば，これまで強いられてきた手間と時間の無駄がなくなったという面では，大きな前進と言えるだろう。また閲覧担当者にとっても，資料返却処理とくに毎朝100冊前後もあるポスト返却本の処理は，かなり軽減された。更に返却期限延滞本の督促状や延滞金請求書についても，端末操作のみで自動発行ができるようになったので，マニュアル処理と比較すれば，よりきめ細かく利用者に通知が可能となったのと同時に，処理時間の短縮と処理手続きの簡素化が図られた。

一方，検索事項つまり所蔵状況調査，貸出状態，雑誌の製本情報その他利用者の要求する資料の状態調査は，マニュアル処理をしていた時は，一枚のブックカードで情報確認ができたものが，機械上ワンステップで確認できないため，逆に利用者を待たせる結果となってしまった。貸出期限の更新や貸出予約では，それぞれシステム上未だ問題があり，現段階ではその評価はできない。

いずれにしても機械化をすることによって，プラスの面とマイナスの面が生じるのはやむを得ないとしても，利用サービス上更なる改善をしなければならない。利用者が図書館利用のための手続きを，全て図書館に来なければできないという状態から脱却したい。例えば慶應で所蔵している資料検索，自分が借りだしている資料の返却期限，あるいは図書館へのまたは図書館からのメッセージなどは，手元の端末から検索ないしは入力ができるようにすることが必要である。これには一日も早く医学部内に LAN を敷設することが必須条件であろう。　（古沢　賢一・佐久間公子）

2. 運　用

次に閲覧部門における KOSMOS の運用状況を報告する。

(1) 規則設定

貸出規則は，利用者の身分と資料種別により，貸出期限・冊数・罰則規定等，カウンター業務におけるほぼすべての規則を設定することができる。しかし，現行の運用規則のうち KOSMOS では設定しきれないものもあり，当センターではオーバーナイト貸出の廃止，希望者のみに行って

いた休暇貸出を全面的に行う等，規則の変更を余儀なくされた。設定機能の柔軟性はサービスの質に大きく影響するので，機能設計時に注意を払わねばならない。

(2) 窓口業務

貸出・返却等の処理手順は非常に簡便である。特にポスト返却処理は BOOK-ID を読み込むだけで完了する。一度に100件以上も処理しなければならない当センターにとって，その労力の軽減は多大であった。問い合わせ・予約については画面の見やすさ，手順の簡略化等に若干検討の余地がある。他に問題として挙げられるのは，やはりレスポンスであろうか。またシステム側の作業時やトラブル発生時には KOSMOS がダウンしてしまうので，常に対処方法を考えておく必要がある。全地区での KOSMOS 本格稼働に向けて精度の向上を期待したい。

(3) 利用者管理

利用者マスターの登録と更新について当センターでは独自の問題を抱えている。例えば学生の利用者マスターは全塾で管理を行っているが，医学部の学生は，国家試験の関係上有効期限が他学部の学生とずれてしまう。卒業後も研修医として学内に残るか，もしくは学外に所属しても卒業生などで構成されている三四会員として引き続き利用対象者となる等の理由から，利用者マスターの一括削除は行わない。今年度は1件ずつＩＤ変換することで対処した。医学部ではその他上記以外にも人事上の，また人事の管轄外の利用者の出入りが1年を通して非常に頻繁である。それらのうち一括で処理できるものはほとんどなく，全てを1件1件手作業で行っている状況である。利用者の動きに追いつくためのマスターの登録・更新・利用券の発行方法等は，早急に検討を要する課題である。また現在利用券の作成は藤沢のメディアセンターに委託しているが，当センターで独自に利用券を作成することを考えていかねばなるまい。利用券の発行の遅延が当センターの抱える大きな問題となりつつある。

(4) 帳　票

帳票の出力については未だシステム上の問題が多く残っている。現在当センターで使用しているのは督促状と延滞料請求書のみである。督促状は，返却期限日から1週間遅れ，2週間遅れのものを毎日出力，1ヵ月遅れのものを週1回出力，請求書は毎週1回出力している。しかしこれらについても，予約付図書の督促状が出力できないとか，請求書の出力範囲を指定できない等問題が多い。帳票についてはこれから閲覧グループで重点的に検討していく必要がある。　（西出真紀子）

Ⅶ　おわりに

KOSMOS の導入により業務の効率化を図ることはもちろんであるが，更に蓄積されたデータを分析し，その結果を運営に生かし，情報センターの充実・発展に寄与することも目的としていかなければならない。そのために，まず，仕様書に盛り込まれていながら未完成である機能を完成させ，なるべく早期に本格稼働に望みたい。その結果として新しいサービスの展開も予想される。新たな状況が発生したときに，KOSMOS は柔軟な改善ができるようなシステムでなければならないし，またそれが可能な体制を保っていかなければならない。さらに KOSMOS が完成したあかつきには，外部に公開することも検討していく必要があろう。KOSMOS を優れたシステムに成長させていくことはもちろんのこと，同時にネットワークを管理できるスタッフを育てていく必要がある。この先，情報センターはメディアセンターへと移行していくわけだが，機械化だけでなく，スタッフその他の内容についても改革・発展を迫られることになろう。

（村上篤太郎・西出真紀子）

サインシステムその後

—利用案内検討会調査結果—

広田（ひろた） とし子（こ）
（三田情報センター
情報サービス担当係主任
利用案内検討会）

Ⅰ．問題の出発点

証言その1

「トイレはどこですか？」パブリック・サービスの現場では，日々，この手の質問に悩まされている。レファレンス・カウンターで，産業別項目別設備投資額なんてのを探しているときに，突然，アッシリアの遺跡について質問され，はたと悩んでいると，CD-ROM のプリンターが紙詰まり，あたふた修理している私をさっきから待っている利用者がいるなあと思って声をかけると，「トイレはどこですか？」と尋ねられる。ああ，この人，たったそれだけのことを聞くのにずっと待っていたのか（sigh！）

証言その2

「返却はどこでやっていますか？」「メイン・カウンターです。」「メイン・カウンターってどこですか？」「そこを右に入ったところのカウンターです。」でも，利用者はそこを右に曲がってはくれず，そのまま，あらぬ方角に行ってしまう。また，運よく右に曲がってもそこにはカウンターが2つあって，どこにもメイン・カウンターという文字は見当たらない。結局，また手近の係員に聞いてしまうのである。「メイン・カウンターってどこですか？」

（閑話休題）

三田のキャンパスに図書館の新館がオープンしてまる10年。この10年の間に図書館のサービス内容もずいぶん変わってきた。貸出の自動化，洋書の OPAC 化，CD-ROM サービスの導入，そこらにコンピュータの端末が置かれ，皆同じコンピュータかと思うと，あるものは OPAC で，あるものは CD ROM 用端末で利用者は何だかわけがわからず，手近のスタッフに聞く。少しでもわけがわかるようにしようと，スタッフはそこら中に手作りのサインを置く，貼る，下げる etc.

利用者のモラルも低下した。「ジュースを持ち込むな」とか，「閲覧室では静かに」とか，声を大にして大の大人の大学生に注意しなきゃいけない。一日中声を大にするわけにはいかないから，結局あちらこちらに注意書き。そんなこんなで，あちこちに貼り紙ベタベタと，この10年でずいぶん増えたこと。

このように，サービスに様々な展開があったにもかかわらず，サイン計画のフォローがなかったために，現在図書館内のサインは全くまとまりを欠いた各部署での自然発生的な産物になってしまい，新館オープン時に用意周到計画準備され調和を保って設置されたはずのサインは無残な様相を呈している。しかし，手作りサインはそれぞれ必然性があったからこそ，増えたものであって，決して美観をそこねるという理由だけで撤去してよいというものではない。むしろ，サイン計画をそろそろトータルに見直すべき時期にきているのではないか？

利用案内検討会では，以上のような考えに基づき，サインの現状調査を行うことにしたのである。

Ⅱ．調査の方法

この10年で何が増え，どう変わったのか調査することによって，現在足りないものは何か，今後必要とされているものが何なのか，明確にすることができると考えられる。そこで，新館オープン時のサインと，現状を比較し，分析を行うことにした。

新館オープン時のサインについては幸いなことに詳細な記録（慶應義塾図書館・新館サイン計画㈱五十嵐威デザイン事務所）があり，どのような材質・形態・テクストのサインがどこに設置されたか，具体的に窺い知ることができる。この記録を基に現状のサインと比較し，オープン時に設置

され現在も使用中のオリジナルサイン，撤去されたもの，形を変えて利用しているもの，新規に増加したものに分けてカウントした。また，撤去されたものと形を変えて利用してしているものについてはその理由を，形を変えて利用しているもの，新規に増加したものについては，その詳細（材質・形態・記述の方法・テクスト・設置場所）を記録した。尚，調査は三田情報センター利用案内検討会のスタッフが1992年３月の時点で行った。

Ⅲ．調査結果について

表１は，新館オープン時と比較したサイン点数をフロアごとにカウントしたものである。オリジナルサイン，形を変えて使用しているもの，撤去されたもの，新規に増加したものの４種類に分けてカウントした。また，新規に増加したものについては，点数，種類数（たとえば，同一の貼り紙が10枚あるときは，点数10，種類数を１とした）を分けてカウントし，さらに種類数の中の貼り紙の数を別にあげた。

この表から，新規増加が287点と，非常に増えており，特にそれはサービスカウンターのあるフロアで顕著であることがわかる。サービスの多様化に伴う新しいサインの必要性が窺われる。

貼り紙も増加種類数98のうち69と，多さが目につく。最も安易な方法であるから当然であろう。しかし，長期間貼付されているものの中には，紙が変色したり，端が破けているものなど見苦しいものもあった。貼り紙は長期の用途には適さないので，長期間必要とされるサインには，別の形態・劣化しない材質のものを，そして，貼り紙は一定期間を過ぎたら貼り替えるなどの配慮が必要であろう。

オリジナルサインは点数から見ると，かなりの割合でまだ使用されているかのごとくに見えるが，実際調査した印象では，記録にあっても一体どこ設置されているのか探しまくってやっと「ああこれだったのか」とわかる状況で，決してサインとして充分機能しているとは言いがたいものが多い。

形を変えて使用中の理由を見てみると，文字が見えにくいからというものが多い。メタリック塗装の表面が光に反射して文字が読みにくく，読みにくいだけでなく，はじめてこれを目にする人はそこに文字が書いてあるなどということは予想だにせず，結局，サインとして機能しない。そこで，オリジナルサインの上に紙を貼って再利用しているのである。（写真１）

撤去されたものは計31点であるが，その理由を見てみると，

- サービスの変更により不要になったもの。
- 通行の妨げになり，かつサインとしての効果が認められないもの。

がある。前者は当然の結果であるが，後者は，利用者を誘導すべきサインが逆に障害物となってしまう（写真２）という全く皮肉な結果であり，オリジナルサインの計画に問題があったと言わざるをえない。さて，新規増加したものの内容をもう少し詳しくみてみたい。表２は，新規に増加したものの種類数をサインの目的別に分けてカウントしたものである。Ａ場所の標示（室名表示・書架表示・コーナーやブロックの表示・カウンター表示など），Ｅ方向表示，Ｃ禁止サイン（禁止表示・注意書き），Ｄ説明（利用規則・機器等の操作方法）の４つのカテゴリーに分けた。ＣとＤが圧倒的に多い。Ｃには，禁煙・禁飲食・立入り禁止・盗難注意などが含まれる。「盗難多発」と「最近不審な者が……」や「私語厳禁」と「静粛に」など，同一の内容なのに表示の方法が複数あるものがあり，サインとしての統一を欠いている。Ｄについて，さらにその設置理由をみてみると，

1	新規に追加されたサービスに伴い，設置	3
2	サービスの変更に伴い，設置	12
3	既存のサインが不十分なため，設置	31

となる。３の中には，説明が不十分な場合とサインの形態・材質・文字の表記方法が不十分な場合とがあるが，この後者についてはオープン当時から度々問題とされてきた点であり，オリジナルサインの全般にわたって言えることである。すなわ

ち，小さく，目立たなく，色は背景に溶け込み，メタリック塗装仕上げの表面は光に反射し，文字がほとんど読み取れない。この基本的な欠陥については，新館サイン計画の総まとめとして書かれた武井論文[1]や早稲田大学が新館を建てるにあたって他大学のサイン計画を評価したレポート[2]にも述べられている。そもそも，この基本的な欠陥は，「サイン計画を建物の美しさを壊さない様制限しようとする設計担当者達との意見の対立」[3]に起因するものであり，三田で失敗したにもかかわらず同様の失敗（程度の差はあるものの）が再び日吉で繰り返されているのである。今後サイン計画をトータルに見直すにあたっては，同じ轍を踏まないように充分注意する必要があろう。

Ⅳ．まとめ

新館開館10年。気がついてみたら，図書館は貼り紙の巣と化していた。図書館は「本の棺桶」ではなく，生き物である。特に，コンピュータと通信技術によって，新しいサービスがどんどん展開される現在にあって，新しいサインが必要となるのは当然な結果である。　また，サービスの新たな展開はより多くの利用者を図書館に呼び込み，図書館員は新しいサービス提供のためにより多くの時間を利用指導に割かなければならないことを意味している。スタッフの人員増が見込めない現状で，上記を達成しようとするならば，無駄なことはできるだけしないこと，すなわち，サインが十分でないために，各サービス・カウンターが利用者の交通整理に追われるなどという事態は避けねばならない。

三田情報センター利用案内検討会では，この調査結果をもとに，サインシステムの再検討をさらに具体的な形で進めていこうと考えている。

引用文献

(1) 武井恵子「1. 慶應義塾図書館・新館開館に伴うPR活動―サインシステム計画を中心として―」専門図書館　No. 91（1982）pp. 4-7
(2) 『慶應義塾大学図書館の評価』「サイン計画ワーキンググループ報告書」早稲田大学図書館長期計画委員会事務局　1985. 7 pp. 6-9
(3) 前掲武井論文　p. 6

写真1　文字が光るので紙を貼り直したスタンドサイン

写真2　通行の邪魔にならぬよう階段下に撤去された総合案内

表1　サインの点数調査　新館開館時との比較（1992年3月末調査）

サインの状態	B5	B4	B3	B2	B1	1F	2F	3F	4F	5F	計
オリジナルサイン	11	12	13	16	34	29	11	22	20	21	189
形を変えて使用中	0	0	0	1	2	4	0	3	7	0	17
撤去	0	0	2	0	3	17	5	2	2	0	31
新規増加（点数）	15	111	7	5	16	19	1	57	49	7	287
（種類数）	7	12	4	5	8	19	1	21	14	7	98
（うち貼り紙）	6	10	4	5	5	8	0	15	12	4	69

パブリックエリアのみ調査。6Fは全て事務室につき，対象外とした。

表2　新規増加サインの目的別種類数

目的	B5	B4	B3	B2	B1	1F	2F	3F	4F	5F	計
A　場所	0	0	0	0	2	4	0	2	2	0	10
B　方向	0	0	0	0	1	1	0	2	1	0	5
C　禁止	5	7	4	4	3	4	0	6	4	4	41
D　説明	2	5	1	1	2	10	1	11	7	3	43

A　場所を示す物（室名票示，書架標示，カウンター名など）
B　方向を示すもの
C　禁止・注意事項
D　説明（機器等の使用方法，利用規則など）

三田図書館・情報学会月例研究会

第68回（平成4年1月25日）
「差別価格問題の推移」
発表者　小川治之（慶應義塾大学三田情報センター閲覧課長）

第69回（平成4年3月14日）
「ネットワーク環境下における大学図書館の将来像」
発表者　池谷のぞみ，神門典子，越塚美加，中島聞多他（慶應義塾大学大学院）

第70回（平成4年5月9日）
「21世紀へ向けての図書館・情報学教育」
発表者　Michael Buckland（カリフォルニア大学バークレー校）
（日本図書館協会図書館学教育部会共催）

第71回（平成4年7月4日）
「情報利用における『意味』と『理解』」
発表者　糸賀雅児（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科助教授）

第72回（平成4年10月21日）
「The future of the library is here」
発表者　Dorothy D. Gregor（カリフォルニア大学バークレー校図書館長）

第73回（平成4年11月28日予定）
「専門図書館白書第2版の概要」
発表者　山田　奬（野村総合研究所情報管理課長）

これらの研究会は，非会員にも公開している。また，年刊の機関誌 Library and Information Science は，個人会費（年額 ¥3,000），機関会費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会，機関誌等に関する問い合わせは，慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-3453-4511 内線 3147）で受け付けている。

図書館（旧館）の環境整備に向けて

—旧館書庫の温・湿度調査—

風間茂彦（かざましげひこ）

（三田情報センター閲覧課課長
資料保存対策委員会）

Ⅰ．情報センターの新たなる展開

1970年以来22年間親しまれてきた「情報センター」は，来る4月より「計算センター」と組織統合を計り，「メデアネット」として，新たな世紀の情報サービスを目指して船出する。今，船出の時を迎えるべく，両センターではその準備に余念がない。この新たな名称は，従来教育・研究を支えてきた紙に印刷された記録媒体のみならず，その他の所謂ニューメディアをも主体的に情報源と考え，それらを取り込んで情報サービスを展開してゆくことを目指して与えられた名称である。しかし，どんな名称が与えられようと，過去の膨大な蔵書が磁気ディスクや CD-ROM にメディア変換されるというような劇的な展開はあろうはずはない。更に，図書館，取りわけ「三田情報センター」のような保存を前提とする大規模研究図書館では，ここ当分ニューメディアの量が旧メディアの量を凌駕することは，物理量的にはもちろんのこと，情報量的にも考え難いであろう。そうしてみると，今後の展開に照らし合わせてみても，旧来の図書館が抱えている現物管理上の問題は，依然として我々ライブラリアンの課題として残り続けると言えよう。

Ⅱ．自壊する図書—消え去る情報

こうした課題のなかで，最も大きく且つ深刻なのは用紙の酸性劣化の問題である。三田情報センターでは，1984年に蔵書劣化調査[1]を実施しており，その結果は公刊されている。それによると，1870年代から1940年代までの外国図書の中で，1920年代の22.4%をピークとして，二度折り曲げると欠けてしまうような用紙が脆くなった本が各年代の出版物の10%以上存在するという調査結果が報告されている。更に楽観をゆるさないのは，この酸性劣化は，用紙に含まれている酸による自壊であるため，永遠に劣化は進行するということである。これに対し「脱酸」という対策が考えられるが，これさえも，劣化したものを元の状態に戻すことはとうてい出来ず，せいぜい劣化の進度を遅くするに止まるのである。

Ⅲ．劣化度の相違—日米比較

こうした酸性劣化は，用紙の成分という内在的なものが主な原因であるがゆえに，三田情報センターの調査[1]における出版年代間の劣化傾向は，日本国内はもとより，北米の大図書館での調査などとも同傾向をあらわしている。しかし，年代間の傾向は同じであっても，それぞれの年代毎の劣化度では，北米の図書館との間に著しい相違があることが報告されている[2]。国立国会図書館，早稲田大学図書館，三田情報センターなどの日本国内の調査に比較して，コロンビア大学，イェール大学，ニューヨーク・パブリック・ライブラリー等における劣化図書の比率は圧倒的に大きいのである。この原因について，国立国会図書館の安江明夫氏は環境的原因を挙げ，「しかし，酸の作用は，一般に広く知られている酸加水分解によるよりも，環境の乾燥による酸の脱水作用のほうがより影響が大きいようだ。少なくとも，現時点でのアメリカにおける蔵書のスロー・ファイヤー[3]の最大の原因は，冬季の暖房だ。酸性紙蔵書が，暖房による乾燥・脱水によりスロー・ファイヤーの被害に遭遇している。アメリカは蔵書劣化の先進国だが，その元凶は冬の暖房であった。」[2]と述べている。さらに，「酸性紙に含まれる「酸」は，乾燥した環境においては脱水剤として働き，紙の乾燥を助長する。」[2]その結果，「紙から水が離脱するとき，繊維間，繊維細胞壁内でセルロース相互に結合をさせ，そのため外力が作用するとき，応力の集中が起こりやすくなり，結局，紙から水分がある限界以上失われると，材料として非常に

脆くなる」[2] として，乾燥による劣化のメカニズムを解明している。すなわち，日本の図書館に比較して北米の図書館蔵書の劣化率が著しく大きいのは，書庫の低温度に由来すると考えられる。つまり，とりわけ米国東海岸北部の寒冷地にある図書館では，冬場には0℃を遥に下回る大気を20℃以上に暖房している為，相対湿度の低下を引き起こし，それが乾燥した書庫内環境を作り出し，著しい用紙劣化の原因となっているのである。

Ⅳ．資料保存活動としての環境調査

三田情報センターでは，「資料保存対策委員会」を設置し，蔵書の保存対策の検討を続けているが，これまで，雑誌のマイクロ化，保存箱・保存封筒の導入，革製本のレッドロット[4] の処理などの対策を実施してきた。これらは，すでに劣化した資料に対しての対処的な方策であるが，一方図書館オリエンテーションの中に図書の扱い方のインストラクションを導入したり，“図書に優しい展示法”を検討したりという，資料の劣化を積極的に防ぐ抜本的な対策にも乗り出している。更に，こうした抜本的な対策の一環として書庫環境を整備すべく，それに向けてのデータ収集として，図書館書庫の全般的環境調査の準備を進めている。それは，上記のような乾燥による劣化のメカニズムがある一方，従来より言われてきた高温多湿の環境下における酸加水分解[5] による劣化も考えられ，いづれにせよ，書庫の温湿度は，図書の劣化に大きく影響を与える要因であると考えられるからである。

Ⅴ．図書館（旧館）の温湿度調査

図書館（旧館）は1982年の図書館（新館）のオープン以来，図書館としての主役の座を新館に譲った感がある。しかし実際には，貴重な旧分類図書や議会資料，更には経済学部・商学部のワーキング・コレクションを収蔵する60万冊収容の第一線図書館である。しかし，そうした内容とは裏腹に，古びた内装や照明，そしてノン・エアーコンディションの状況が象徴するように，従来，環境的には軽んじられていた感がある。事実こうした環境に対し，1984年の劣化調査では，夏場の高温多湿状態が問題点として指摘されていた。そこで，今回の環境調査の一環として，今年３月より，第２書車２階を手始めとして書庫内湿湿度調査を開始した。計測には，松永記念文化財研究基金研究補助で購入した，温度・湿度を30分間隔で自動的に計測・記録できるＪＭＳのデータロガーを使用し，１年間の時系列的変化を測定している。こうした環境調査は，データこそ残っていないが，従来も実行されていた形跡がある。それは，書庫内に残された干上がった湿式温度計が証明している。しかし，そうした調査と今回の調査の大きな相違は，今回の調査ではデータ収集が自動的に行われるため，継続性が保証されていることである。しかし更に重要なことは，「書庫環境整備」という極めて明確な目的のために実行していることである。IFLA によると，図書資料の保存環境としての指針は，温度16—21℃，相対温度40—60％であり，それらは長期的に安定している必要がある[3]。図書館（旧館）は，それぞれの環境的特徴を持つ３つの書庫により構成されているが，この調査は，今後そうした特徴を持ったそれぞれの書庫に拡大してゆく所存である。そして，それらを以て総合的データとして，指針と照らし合わせて，現在そして将来の利用を保証する書庫環境作りへの方向性を見出してゆかねばならないであろう。

参　考　文　献

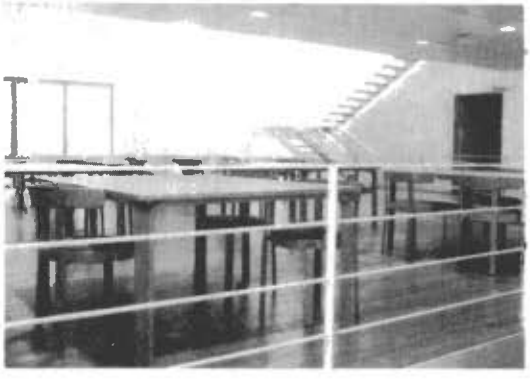
1）「図書館資料の保存とその対策」日本図書館学会研究委員会編日外アソシエーツ　1985
2）“蔵書劣化の謎を追う—スローファイヤー探偵団の冒険”前編・後編　安江明夫
びぶろす vol. 41, no. 9, 10 (1990)
3）用紙の酸性劣化の象徴的言い方
4）革の表面がはげ落ち，ボロボロになる状態
5）製紙の際のサイジング工程でインキの滲み止めのためのロジンの定着のために加える硫酸アルミニュームが加水分解をおこし，硫酸が生じて，それが用紙の酸性劣化の原因となる
6）「IFLA 資料保存の原則」ジャンヌ＝マリー・デュロー，デビッド・クレメンツ著　日本図書館協会　1987

湘南藤沢中等部・高等部図書室

原田　悟（はらだ　さとる）
（湘南藤沢メディアセンター担当課長）

Ⅰ．はじめに

平成4年4月，慶應義塾は新たに湘南藤沢中等部・高等部を開設した。義塾はじめての試みとして，男女共学・6年一貫の教育が行われることが特徴である。したがって図書室も当然中学生，高校生共用である。施設としては面積542平米，収容可能冊数約2万冊，席数98席となっている。写真を参照して戴くとわかるが，ちょっと気のきいたレストラン風の小じんまりとした造りになっており，機能重視の大学の図書館とは一味違うものとなっている。



また組織及び運用面においても従来の諸学校とは異なり，図書システム（カードレス，オンライン目録）はもとより，人事組織から運用に至るまで大学附属機関である湘南藤沢メディアセンターと密に連携したものとなっている。以下具体的に紹介したい。

Ⅱ．中・高図書室とメディアセンターの関係

中・高図書室の職員は2名であるが，1名はパブリックサービス担当として中・高図書室で，他の1名はテクニカルサービス担当としてメディア

センターで仕事をしている。また2名は人事の発令においてもメディアセンター兼務となっている。このことからもわかるように，中・高図書室は組織的にはメディアセンターの枠組の中に入っており，中高生に対するパブリックサービスの前線基地としての性格が強い。しかしながら中・高図書室の独自性を損わないために一定の配慮が払われている。つまり選書及び利用指導に関する主体はあくまでも中高側に置いてあり，発注・受入・目録処理についてのみメディアセンター側がコントロールしている。また雑誌については総ての行程を中高側で処理している。これは速報性の確保の観点からも妥当なものといえよう。

中・高図書室とメディアセンターはこのような連携を行っているため，図書システムもメディアセンターと共用し，データベースも融合した一つのものとして形成している。したがって中・高図書室での目録情報の検索は大学生と全く同一となっているが，抵抗なく使用されているようである。

Ⅲ．設備・資料

中・高図書室の図書以外の設備であるが，IBM550 4台と FM/TOWNS 8台の二種のパソコンが設置されている。前者は図書システムの検索・業務用であり後者は画像・映像・音像対応が可能な機種としてビデオ，コンパクトディスク等の再成用として用いられている。このことに加えて特に後者においては個有機能であるパソコンとしても利用に供する仕組になっている。したがっ

てパソコン学習の自習の場としても図書室が利用できることになり，ある意味で大学のメディアセンターと同様の設備構成といえる。このことに関連して資料面でも通常の図書・雑誌に加えて視聴覚関連資料も当初より意識的に整備しており，その割合いは塾内の他諸学校と比して高くなっている。

これとは別にこの図書室の特徴は資料を特に生徒用・教員用と区別せずに運用していることにより，グレードの幅が広域化していることが挙げられる。従来塾内の諸学校にあっては図書室は生徒用として位置付け，教員用の図書については別に一室を設けるなり教員室に別置するなりの方式が一般的だと聞いている。しかし湘南藤沢中・高等部では開設準備室の段階より一貫して資料は図書室一本化の原則を貫くことを確認してきており，事実教材準備に関連する若干の資料を除いてほとんどの資料がそうなっている。ただ実質的な資料構成は図書選定の時期に就任予定教員の総てが判明していなかったこと，及び準備期間が実質1年足らずと比較的短かったこともあって教員用グレードの資料群の充実はこれからである。反面生徒用グレードの資料群は選定過程より各種選定目録，出版目録等から担当者が一次選定を実施し，その上に教員の意見をとり入れる等，短い準備期間に比し内容ある収書手順を踏めたものと考えている。文庫，新書の一括継続等，ポリシーに関わる部分まで議論できたのは幸いである。現在資料数は約1,1000点を数えている。

FM-TOWNSを利用したＡＶブース

Ⅳ．今後の課題

申し遅れたが湘南藤沢中・高等部は大学と同一キャンパスにあり距離的にも至近である。このことにより中・高図書室とメディアセンターは生徒・学生・教職員等の利用上の身分の壁を，当初より設定しない方が望ましいとの立場でサービス連携を考えてきた。たとえば中高教員の研究用図書は大学との重複購入は可能な限り避けメディアセンター資料の利用を促進する。また中・高図書室に常備する必要はないが，授業に関連して必要とされる高額な参考図書は必要に応じて一時的に中・高に貸出し可能な措置をとる等々の考え方がこれである。これらサービス連携に関する諸々の点については，開設以来半年という多忙な時期にあって，未だ制度的運用に向けた詳細な検討・確認作業は未着手の状態にあるのが実情であるが，徐々に円滑な運用に向けた検討作業が必要とされる時期にきていると考えている。

現在，中高教職員は大学教職員と同一の条件で大学メディアセンターの利用が可能となっている他，中・高生，大学生に対してはＩＬＬ方式によって相互に資料を提供している。このＩＬＬ方式による利用とは，中・高図書室側の，“当面の生徒に対する学校生活全般にわたる教育的配慮（大学生との関係も含めて）”の一つということであって，これについても今秋以降抜本的な検討が加えられてゆくものと考えている。

今，われわれが抱く一つの夢としては，大学教職員から中学生まで，年齢・社会的経験の異る人間が一定のルールの下に相互の施設・設備（中心的課題としては同一基盤上での情報サービスの提供）を利用することを可能にすることによって，一体感ある学園としてＳＦＣが成長してゆくことであるが，慶應義塾にとっては，これもいわば未知の領域に属することが多く，地道な検討が必要とされることはいうまでもない。

今後の関連諸機関の皆様のご指導，ご協力を切に願って止まない次第である。

ニューヨーク学院図書室の整備と今後

南野典子
（三田情報センター選書課）

Ⅰ．はじめに

ニューヨーク学院（以下学院）は，海外在留邦人の子女に対して慶應義塾の一貫教育の機会を提供することを主な目的として1990年９月に開設された。開設当初は日本の高校１年生にあたる10年生から新入生を迎えたが，来年度はアメリカのハイスクールに合わせて日本の中学３年生にあたる９年生も募集する予定である。この結果全学年が揃うと４学年で450名の定員になる。

学院では日本の高等学校卒業資格を得るために文部省の学習指導要領に準拠した日本語による授業を行い，かつニューヨーク州認可の教育法人として必要な授業を英語で行う。これらのバイリンガルの授業を通じて，生徒達が国際感覚や世界的視野を養っていくことを主眼点としている。

学院の図書室は広さ350平米で，管理棟の３階に位置している。両サイドが広い窓になっているため眺望が良く解放的である。しかし，座席数は36席しかなく，全学年揃った時点では在籍者の１割にも満たなくなってしまう。現在でも席が無いために机や床に座っている生徒がいるので，座席の増設の必要性を感じている。また，図書室の収容冊数は約２万５千冊が可能である。

Ⅱ．初年度の図書室

学院ではバイリンガルで授業が行われることが前提であり，それ故に日本語以外の言語を母国語とする生徒が在籍すること，日本人以外の生徒が入学することが予想される。これらの点を踏まえて，高校レベルの図書室ではあるが洋書の選書も考慮しなければならない。そこで洋書は『Senior High School Library Catalog』（Wilson 社編）からレファレンスブックを中心に選書を行い，和

書は『学校図書館基本図書目録』（全国学校図書館協議会編）で高校生の部に収録されている資料を網羅的に収集した。これらの図書は現地作業の省力化を図るために目録整理，装備等全ての工程を日本国内の業者に外注する方法をとった。

こうして和書3,976冊，洋書43冊が開室時に図書室の蔵書として準備された。当初は和書はＮＤＣ，洋書はＤＣの２種類の分類法を使用していたが，資料の検索をブラウジング中心で行うような小さい図書室で２種類の分類方法が存在することは利用者の混乱をきたすことが必至であり，利用指導の面からも不都合であるので，後日ＮＤＣに統一することにした。雑誌も図書室には不可欠の要素であるが，開室時には間に合わせることができなかったので，開室後教員，生徒から希望をまとめて発注した。

Ⅲ．図書室の整備

1．蔵書の整備

初年度の状況（表１）から見て分かるように洋書の充実を図る必要がある。そこで効率良く収集するために，現地書店で入手可能な推薦図書リストから10年生から12年生向け図書約2,000タイトルを一括発注することにした。和書も一般的な読書要求に応える図書が不足していたので，過去10年間のベストセラーを選書した。その後はレファレンスブックを図書室で優先的に選書し，新刊書は『出版ニュース』『これからでる本』『よむ』『Booklist』『Book Alert』などの書評誌や広報

誌を教員に回覧して選書してもらうことにしている。選書した図書は毎月1回定期的に発注するよう心がけている。また，日本のように見計らい図書やパンフレットが豊富に届くわけではないので，直接書店に出向いて選書する方法もとることにした。

2. 運用と図書委員

現在は1時間目が終了する9時20分からスクールバスのでる時間（夏期：5時30分，冬期：5時）までを開室している。初年度は専任者が不在で大学生のアルバイトによる開室を行っていたので，開室時間に大きな制限があった。その後，アルバイトが退職したことを機に生徒からボランティアを募って図書室の運営を行うようになった。しかし，クラブ活動やスポーツ大会，補講授業，テスト期間などで拘束されることが多い彼らには十分な活動ができない。そこでボランティアに頼らず任務として図書室活動を行うようにと，2年目の新学期には各クラス2名ずつの図書委員を選出することになった。主な活動は昼休みと放課後のカウンター当番，及び図書の配架やラベルの貼付，蔵書印押印などの装備作業である。図書室活動は図書委員としての自覚を高めるとともに，一般生徒への広報効果ももたらす。生徒達の図書や図書室への興味の高まりが，徐々にではあるが貸出冊数の増加に反映されている。（図1）

Ⅳ. 今後の課題

1. 蔵書の構成

学院の図書室には開室準備から継続しての専任者がいないので，各分野の蔵書構成までは充分に配慮がいき届いていない。日本の『学校図書館基準』では最低蔵書数や蔵書の配分比率の基準を定めている。（表2）また，アメリカの『学校区および学校におけるメディア・プログラム』では，500名以下の高校図書室におけるコレクションの望ましい基準として，6万タイトルの本を利用できるようにすることを示唆している。両者の基準を併せて達成することを目標にしたい。

学院はその7割が寮生ということも，蔵書を構成する時に考慮しなければならない点である。寮生は週末以外は学校の敷地内からでることは許されない。したがって，レポートや発表の準備は必然的に学校の図書室で行われることが多くなる。同時に何人もの生徒が同じ資料を利用することも起こりうる。このため，複本の用意や授業内容に基づいた多様な要求に応えられるだけのレファレンスブック類を揃えることが必要となる。同時にレファレンスブックの利用方法や，安易に解答だけを教えるのではなく，自ら解答に辿り着く方法も指導していかなければならない。

また，生活時間の殆どを学院内で過ごす生徒達の趣味や教養を満たすための資料を用意することも大きな課題である。東京都内の高校生における情報入手経路の調査[1]によると，全体の7割が「本や雑誌を買う」ことで必要な情報を入手していることが分かる。しかし，学院の生徒は容易に「本や雑誌を買う」ことができない状況に置かれている。そこで，少なからず図書室がその代替となるべきであろうと考え，1992年度から文庫本やペーパーバックスを揃えることを開始した。今後は特に入手が困難な日本語の雑誌や新聞，参考書などを収集することも検討していきたい。

英語資料の充実にも引き続き努力する必要がある。現在は和書の2分の1近くまで増えたもののまだ十分な冊数とは言えない。できるだけ和書の蔵書数に近づけるように，配分比率も考慮に入れて選書していかなければならない。生徒の英語力は滞在年数により各自に大きな差があり，英語は話せるが読み書きはそれほどでもない生徒が想像以上に多いのが現状である。彼らが積極的に英語の本を利用するように，読みやすい資料を揃えることも検討する必要がある。逆に，日本語が不得意な生徒のために平易な日本語資料や，9年生の入学に備えて中学生レベルの資料も選書していかなければならない。

2. 図書室の機械化

現在，アメリカの図書館は殆ど機械化されていると言っても過言ではない。しかし，日本語資料が多い学院では漢字表記の問題があり，英語中心

のアメリカの図書館のようには容易に機械化できない。アルファベットだけで処理することは可能だが，日本文化の一つである漢字を無視する方法は生徒への教育的配慮からも良い方法とはいえない。漢字表記が可能なパッケージソフトを利用して，蔵書が増えないうちにデータの入力をすることを計画しなければならない。

3.　コミュニティへのサービス

学院は開設に当たって地域社会への文化的貢献をすることをあげている。その一つに図書室のコミュニティへの解放がある。現在は彼らの関心に応えるために『オンジャパンコレクション』と称して，日本に関する英語資料を収集している段階である。今はまだ図書が中心だが将来は視聴覚資料も充実させて，早い時期に解放できればと考えている。

以上3点が優先的に対処すべき問題であるがこれら以外にも放課後の開室時間延長，授業援助のためのリザーブブック制度，地域の図書館ネットワークへの参加など検討すべき問題が多い。

V．おわりに

学校図書館は単に生徒の読書要求に対処するだけではなく，積極的に授業援助に臨まなければならない。授業援助のためにはカリキュラムや授業の展開方法を把握していなければならず，それは教員との信頼関係無くしては成しえない。今回のように1年に満たない出張という形では信頼関係を成立することや，長期的展望にたって問題点を検討することは困難である。また多感な時期にある生徒たちとの関係においても，中途半端な出張という形ではなく年度単位での専任者の設置が実現され，図書室が運営されることを望んでいる。

表1　ニューヨーク学院蔵書統計　1992年6月末現在

資料種別／年度	和書	洋書	計	和雑誌	洋雑誌	計	新聞
90年度	3,976	43	4,019	—	—	—	—
91年度	3,397	3,164	6,561	37	41	78	8
計	7,373	3,204	10,580	37	41	78	8

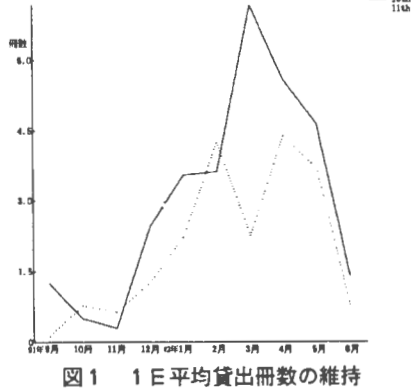


図1　1E平均貸出冊数の維持

引用文献

1）古賀節子　"高校生の情報入手と学校図書館の関わり―東京都内の高校生対象の調査結果①―学校図書館　No. 502, p. 45-49 (1992)

参考文献

1）学校図書館白書2　全国学校図書館協議会 1990
2）アメリカン・スクール・ライブラリアン協会編　メディア・プログラム：アメリカの学校図書館基準，全国学校図書館協議会，1977
3）アメリカン・スクール・ライブラリアン協会，教育コミュニケーション工学協会編　インフォメーション・パワー：学校図書館メディア・プログラムのガイドライン，全国学校図書館協議会，1989

表2　高等学校図書館数量基準

1.　基本図書最低基準量1000タイトル

2.　蔵書最低基準冊数

生徒数	1～270	271～540	541～810	811～1080	1081～1350	1351以上
冊数	10000	10000＋15×l（l＝270をこえた生徒数）	14050＋13×m（m＝540をこえた生徒数）	17560＋11×n（n＝810をこえた生徒数）	20530＋9×o（o＝1080をこえた生徒数）	22960＋7×p（p＝1350をこえた生徒数）

3.　蔵書の配分比率

校種＼項目	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	合計
高等学校	5	9	15	10	15	4	3	7	7	25	100%

配分比率の項目は，日本十進分類法主類表による10項目である。

4.　年間購入冊数

生徒数	1～540	541～1080	1081以上
冊数	800	1080	1×生徒数

「世界之寶」「萬民寶」

関場　武（せきば　たけし）

スタンプラリーとやらで，子供達が電車の中や駅のホームを駆けまわる夏休みがやって来た。不安げに一人でドアのところに立ってる児，一人ではどうもというのでお兄さんやお姉さんが付き添っている小さな児はいいとして，群れて傍若無人に騒いでいる子供達はどうもいただけない。いずれにしても，私鉄側の巧妙な商魂に乗せられて，踏破認定証とか景品を目ざしてのこと。だいたいスタンプ帳4万部限定発売なんて言っているけれど，4万部もあったら，それは限定発売とは言わないわけで……。

ところで，本号が出る11月頃には，スタンプ帳は各々どうなっていることやら。時々は取り出されて，夏の日のあの暑く目映い思い出に浸るよすがになっているのであろうか。だったら幸せである。今年の分はまだいい。何年か前のそれはどうなっているのだろうか？　捨てられてしまっているのだろうか。

それにしても，人間って，どうしてこう色々と蒐めたがるのだろう。切手，絵葉書，地図，書票なんてのは昔からあるが，近頃は，本屋さんがかけてくれる書皮（カバー）のコレクターも居るとか。そんなわけで，小学生ならぬ小生も，研究に必要と称して，コチャコチャとしょもないものを集める道楽が止まらぬ。尤も，道楽というものは，愉しみばかりでなく苦しみも与え，イヤな目にも会わせてくれるもので，「今まで生きて来た中で一番幸せ」と思えたことは殆ど無かったような気がする。で，別に宝というわけではないが，そういう中から二，三。

図1。これは何でせう？灯籠でも浮子でもありませぬ。本の前表紙見返しに嵌込まれた虫眼鏡なのです。18年程前に出た「大辞典」の縮刷版（もと全26冊本<昭9～11>の縮刷13冊本<昭28～29>を更に全2冊にしたもの<昭49>平凡社）にも，箱の上に小さな抽斗

図　1

図　2

が付いていてその中に拡大鏡が入っていたが，それは国語辞典，これは歴史年表である。書名は図2に見る如く，扉や表紙背に「世界之寶　一名新撰和漢洋年契」とあって，寛政9年初版の「和漢年契」の流れを汲むものであることが判る。既にして慶應2年版の「和漢年契」も銅鏐のはしりであったが，明治19年7月，京都の文求堂田中治兵衛刊の本書も，精巧な銅刻洋紙刷を2つ折にして綴じたかたちになっている。それで，このままでは字が細かすぎて読み難いということで，真鍮枠の虫眼鏡を付けたものであろう。それにしても「清盛流康親成経等」「那勃列翁死于海島」程度の記述しかない略年表に「世界之寶」とはよくぞ付けたりである。

さて，宝と言えば，「明治三十八年萬民寶」とか「明治四十一年戊申人民每日之寶」と題する小冊子がある。いずれも共紙表紙に題簽刷り込みの洋紙袋綴じ本で，前者は明治37年11月，三重県桑名の三宅信太郎，後者は同40年11月，東京神田の樋川謙次郎の編刊。表紙とも15丁，定価は6銭である。内容は旧来の伝統的な暦で，暦の専売権の都合から，こういった名前で，一見暦とは関係のないもののように見せかけた俗称「お化け」として売りに出されたものである。そう言えば，昔は農事暦が非常に重要であったために「明治十七年農家便覧」（明16．12　京　服部清助刊），「栽培日要辨覧」（同18．11　大阪　飯田甚七刊）といった外題で売られた暦もある。また日頃手許に置いて役立つという意味から，江戸時代以来，小百科として通行した重宝記や節用に名を借り，「民間便用重寶記」（明19．10　東京　野口芳次郎），「節用集早見」（同11月　金沢　藤江信房）と題して刊行されたものもある。斯くして，話はここ数年興味を持ち続けている節用集に繋がる。……だから道楽は止められないのである。

図　3

（文学部教授）

三田における資料展示の流れ

小沢恒二（おさわつねじ）
（三田情報センター副所長）

Ⅰ．はじめに

「ＫＵＬＩＣ」編集委員会から筆者に与えられたこの稿のテーマは“資料展示から見た三田の蔵書”である。職掌柄，最近は資料展示に関わることが多いので，安易に引き受けたが程なく後悔した。いわゆる“部局新人”として着任して４年半の私には，おのれの不勉強を棚に上げて言えば，三田の蔵書を語ることは至難の業である。知れば知る程，義塾図書館は奥の深い高く聳えたつ宝の山で，素人の私に歯の立つ相手ではない。

しかし，この稿のために三田における資料展示の歴史を調べてみて，素人なりに今後の資料展示のあり方について感ずるところがあった。冗長になる恐れがあるが，先ず三田の資料展示の流れを概観しながら，それらの二，三を述べて責をふさぐこととしたい。

Ⅱ．初期の図書館展覧会

三田における資料展示の歴史は長い。義塾図書館（旧館）の開館以前のことは定かでないが，明治45（1912）年５月18日に行われた義塾創立五十年記念図書館開館式の行事の一つとして展示が行われている。「慶應義塾学報」明治45年６月号の記事によれば，展示は開館式前の内覧を含め合計７日間行われ，「二階特別閲覧室に陳列されたる福澤先生の遺物，書庫五階の古文書（岡本貞烋氏出品）同六階の重（おも）に維新前後西洋文明輸入に関係ある図書（多くは義塾図書館所蔵）等」を縦覧に供したことがわかる。恐らくはこれを三田における資料展示の嚆矢とすることができるであろう。

次いで「学報」に展示の記事が見られるのは，２年半後の大正３年10月号である。「義塾図書館の新趣向」と題して

「義塾図書館にては多数学生をして親しく所蔵の参考書に接するの機会を得せしむるの目的を以て毎月一週間書籍の展覧会を催し月次図書展覧会と名づけ学生及外来閲覧人をして自由に是等の書籍を閲覧せしむると共に多少の参考品をも陳列することとなり本月は其第一回として六日より十三日迄専ら軍事に関係ある書籍雑誌絵画等数百点を階上の予備閲覧室に陳列し猶甲冑石斧石鏃等の参考品をも加えたり又南葵文庫よりは特に旧勝安房伯所蔵の関ヶ原戦争の貴重なる絵巻物を出品せられたり因に右は米国図書館に行はるゝ公開書画の制度と陳列会とを兼ねたるが如きものにて骨董的の珍書を主とせず一般実用のものを主眼としたるものなり」

と謳われている。この“新趣向”は，初代図書館監督（４代目までは館長を監督と称した）の田中一貞教授の発案によるものであった。

田中監督は，その前年５月から10か月間，鎌田塾長に同行し欧米８か国を視察，数十に及ぶ図書館を訪れている。米国の図書館では公開書架があって，学生が自由に書物に親しむのを見た。彼は「海外図書館訪問記」（三田評論　大正４年１月号所載）の中でこう語っている。

「……是即ち公開書架（Open shelf）と称せらるゝものにて我義塾図書館にても学生が書庫に入りて自由に書籍を検索すること能はざるを遺憾とし本年より毎月，月次図書展覧会と称し一回毎に題目を定めて庫内の図書を一室に陳列し学生をして自由に観覧せしむるの新制度を設けたるは此公開書架より思付きたることにして公開書架に展覧会を兼ね，且展覧書籍に関係ある参考品を加えて陳列し，以て公開書架と展覧会と博物館の役目とを小規模ながら具備せしめて学生の読書心を喚起し，兼ねて実物的教訓を行はんとする微意に外ならず。……」

こうして始められた月次展覧会は，必ずしも毎月という訳ではなく，また，大正７年度からは学期毎に行い単に図書館展覧会と称することになったが，大正11年２月まで33回も続けられた。第２回以後の題目の主なものを挙げると，都市，金融・貨幣，英文学，社会問題，農業山林牧畜，統計，児童研究，山岳，教育，朝鮮，新聞，印刷，仏教等，非常に多岐にわたっている。更に第５回からは，展覧会を行う毎になるべくその道の専門家の講演会も併せ開催している。

これらの展覧会がどのくらいの規模のものであったかは，展示目録は作成されなかった（と思われる）のでそのすべてについては明らかではないが，展示資料は数百から数千冊にのぼる大規模なものであったと推測される。例えば大正６年10月の第17回は，伝記及び系譜に関する図書及び参考品が陳列されたが，「陳列の和漢書は数千冊に達し日本書は之を時代別として洋書は政治家，哲学者，宗教家，教育家，文学者等に分類し観覧者の便に供したり，陳列書籍中故星亨氏遺愛の書多く殊に衆目を惹きしは田安徳川家より寄託されたる寛永重修諸家譜千五百三十巻なり……」，また，７年６月の第21回経済学史及び経済史に関する展覧会では，「……同館〔義塾図書館〕所蔵の重要なる参考和洋書数千冊にして之を農業，工業，商業，交通，財政及銀行貨幣等に分類して展覧に便せしが，就中アダムスミス国富論の初版より各版の全部を含める百余冊，イタリー経済叢書数十冊，英国東印度会社及東印度貿易に関する資料二百七冊……」との記事を「三田評論」に見ることができ，おおよその規模や内容がわかる。両回とも“数千冊”という表現で大雑把すぎる嫌いはあるが，公開書架を兼ねた展覧会という田中監督の意図を考えれば，あながち“白髪三千丈”的な誇張した表現ではないと思われる。

大正７年頃の義塾図書館の状況を考えると，建物こそ全国に誇るべき立派なものとなったが，図書館員は小使や給仕の人々を除けば僅か10名である。日常業務だけでも館員の負担は相当重かったと思われる。そのような状況で，年間平均４回の大規模な展覧会を開くことは，展示目録を作成しないことを差引いて考えても並大抵の努力ではない。しかも，館蔵資料以外の展示品の借用の交渉や講演会の講師依頼までとなると，田中監督の熱意と実行力なしには，この月次展覧会は成り立ち得なかったであろうと思われるのである。

事実，田中監督が大正10年９月に逝去された後は，翌年２月に基督教に関する展覧会と講演会が行われただけで，この形での展覧会は途絶えている。その後は，12年６月に経済学部の主催による生誕二百年記念アダム・スミス関係経済書展と講演会が開催されたが，同年９月，関東大震災の被害をうけて予備室が使用不能となり，展覧会が開催されない状態が続くのである。

Ⅲ．昭和初期，戦前における展覧会

永らく行われなかった展覧会が再び開かれるのは昭６年の秋である。福澤先生伝記完成記念展覧会が，11月21日から三日間，図書館記念室と大閲覧室を会場とし，1,500余点を陳列して行われた。恐らく義塾の展覧会で初めての目録が残されているが，それを見ると関連資料も幅広く集めてあり，簡単ではあるが解題も付され，今なお興味をそそられる。

この展覧会の時の図書館監督は小泉信三教授であるが，小泉監督の在任中の展覧会は，翌７年５

月に行われた慶應義塾創立七十五年記念西洋経済思想史展覧会と百年祭記念ゲーテ展覧会，8年6月に行われた編纂事業完成記念福澤先生展覧会と星亨三十三回忌記念展と続き，いずれも記念展である。このうち，西洋経済思想史展は他の記念展と色合が異なる。目録を見ると，重商主義時代から社会主義まで総計881点の約4分の3は義塾図書館所蔵本であり，小泉監督の資料収集の努力が現れているといえよう。また，この目録の編集には，戦後の経済学部を担った当時の若手研究者—高村象平，小池基之，小島栄次，小高泰雄，気賀健三といった顔触れが揃い，図書館監督の影響力が最も及んだ展覧会といえる。

ゲーテ展覧会は展示資料の総計238点とやや小規模な展覧会であったが，一般塾生を対象としたところに特色を見出せる。目録の「はしがき」には，「本展覧会は他のこの種のものとその目的を幾分異にし，塾内一般学生のためを本旨とするため，得難き古版本，貴重なる遺品等を多数展観して世に問う如きは第二義とし，出来る限り平明にゲーテの全貌を知らしめ始めてゲーテ並に独逸精神なるものを知らんとする人にも理解し易きよう努めた……」とある。このゲーテ展には，ゲーテ全集の中で最も大部で完全なワイマール版全143巻を含め，本館所蔵の3種の全集が出ている。小泉監督はゲーテ展の数年前から，「図書館の蔵書は経済に関してはまあまあだが，哲学や文学の方面は見られたものではない。大いに買え」と，独文科出身の若手館員を督励して洋書をどしどし買い集めさせていた。恐らくこの監督の目配りがなかったならば，この展覧会は行われなかったのではなかろうか。総計238点の展示品の6割は他館や個人の蔵書で占められていたことが，そのことを物語っているように思われる。

昭和8年11月，小泉教授の塾長就任に伴い，第四代監督として高橋誠一郎教授が就任した。高橋監督時代の最初の展覧会は，翌9年6月のナチス文献展覧会である。その前年はヒトラーがドイツ国首相になった年で，ナチスは世の注目を集めていたところである。時局紹介の意味合いで行われたようであるが，その意味で異色の展覧会といえる。同年は11月に，日吉開校に合わせた福澤及び物故先輩に関する展覧会，シルレル誕生百七十五年記念展，マルサス歿後百年記念展と，相次いで開かれている。

その後も年に1，2回の頻度で行われたが，塾内の学会が主催して図書館は場所を提供するか，後援する形が多くなった。しかし，いずれも充実した内容で規模も大きかった。中でも，13年6月の第十七世紀刊行経済文献展覧会，15年6月のアダム・スミス歿後百五十年記念展覧会は，高橋監督の専門とする分野だけに間然する所の無いものであった。残された目録は，館蔵資料には請求記号も記載されて，当時は無論のことのちのちの研究者にも裨益するところが多い。また，16年6月の月岡芳年五十年忌展覧会は，これまた監督の得意とする分野であり，目録の解説を自ら書き，出品錦絵の大半は自らの所蔵するものであった。

こうして戦時下にも拘らず次々に開かれた展覧会も，18年4月の福澤先生資料展を最後に，戦況の悪化のため中断を余儀なくされ，更に図書館の被災，敗戦後の混乱と続いて，展示が行われない時期が再び長く続くのである。

Ⅳ．戦後復興期から新館建設まで

高橋監督の後任となった野村兼太郎館長の14年間の任期中，展示が行われたのは僅か数回に過ぎない。任期の前半は被災した図書館の再建や規程の整備など問題は山積していたから，展覧会の開催の余裕などないのは当然である。しかし，後半も以前ほど展覧会が行われなかったのは，野村館長の関心は資料の収集に主として向けられ，展示一殊に啓蒙的なそれには関心が向かなかったのではなかろうか。野村館長の図書収集の努力の中心は，東洋と日本の原資料にあった。展覧会にもその特色が色濃く出ている。27年の日本中国学会第4回大会記念中国関係稀覯書展では，新井白石日記や徂来集稿本など，29年の慶應義塾図書館蔵日本古刊本展では，大正7年卒業生の卒業35年記念寄付金によって購入された古刊経，五山版，古活字本などが展示品に加わっている。いずれもその展覧会近くに収集されたもので，野村館長時代の展覧会は，新収和漢書善本の紹介を兼ねている趣があった。

昭和33年4月，野村館長の後任に弟子の高村象平教授が就任した。高村館長の在任は，35年6月に塾長となるまでの短期間であった。その間に行われた展覧会は，日本中世文学資料展，斯道文庫善本展，松永安左エ門寄贈記念亀井南冥・昭陽著作展と，師の野村館長時代と同傾向である。しかし一方では，学生のための啓蒙的な展示を常に行うことが計画され，展示ケース2台が閲覧室入口に設けられた。館長が特に望んだことは，福澤諭吉に関する展示を多くして学生に義塾建学の精神を感得させたいということであった。第1回は高村館長の退任間際の35年5月の「咸臨丸」に関する資料の展示で，以後2週間毎に内容を変えて続けられた。

高村館長以後，前原光雄，佐藤朔，高鳥正夫と館長は交替するが，従来型の展覧会と並行して，この小展示は当初の計画通り，福澤諭吉や塾史に関するもの，学問研究への興味を湧かせるもの，見て楽しいものとさまざまに内容を変えて行われて，43年度までの9年間に120回に達した。展示ケース2本分の小規模なものとはいえ，従来型の展覧会も行いながらであるから，大変な努力である。展示の係を特に置くではなく，戦前から在職して三田の蔵書に詳しい館員が中心となり，斯道文庫や塾史資料室，図書館に好意をもつ幾人かの教員などの協力も得ながら事を運んでいた。このようにして頻繁に行われた小展示も，44年度以降は，学内紛争，情報センターへの改編，新館建設など館内外の激しい情況変化の影響をうけて，年に2―3回のペースで新館の開館に至っている。

V．新館の開館以後

昭和57年4月，慶應義塾図書館（新館）が開館した。このことによって，資料展示に関わる物理的条件が大きく変わった。一つは，これまで展覧会に使ってきた旧館の展示室等が情報センターの管轄から外れた上，館員のほとんどが新館に移ったこともあり，非常に使いにくくなったことである。新館の中にはそれに代わるスペースはなく，勢い規模の大きい展覧会は会場を外に求めねばならない。もう一つは，新館1階レファレンス・ルーム入口に展示ケースが据えつけられたことである。旧館時代の小展示の約2倍の資料が陳列でき，小展示とはいえ或る程度纏まった展示が可能となった。

このような条件下に変わり，新館開館から今日までの10年間に行われた大規模な展覧会は，60年度に行われたキャクストンとアーサー王伝説展を皮切りに，63年度，書物にみる西欧哲学・科学思想の流れ展が続き，以後毎年度1回ずつ行われて今年までに6回を数える。会場はいずれも丸善日本橋店であるが，この形は当分続くと思われる。会場が丸善だけに学外者の来観は従来に比べ圧倒的に多く，広く義塾図書館の蔵書の豊富さを示し得たし，示唆や刺激を与えることも多かった。

小展示は，60年から62年頃にかけて多少の低迷はあるが，毎年10回以上行われている。最近は，精粗の別はあるが，目録も出されるようになった。旧館時代の小展示の活発さを取り戻しているといえるが，内容において社会科学の分野が少ないのは多少気にかかるところである。

VI．おわりに

以上，雑駁ながら三田における資料展示の流れを概観してきた。80年に及ぶその歴史は，資料展示のもつ意義や必要性を如実に物語っている。また，諸先達が展示に託した意図や願いを考えるとき，三田における資料展を，より充実して永続させたいとの思いが強まる。そのためには，展示の運営方法をもう少し組織的に行う必要があろう。

一つの方法として，利用指導における利用案内検討会の如きものを，資料展示においても考えたらどうか，というのが筆者の考えである。多忙な日常業務に加え新システムへの移行などで手一杯の状況なのに何事か，との批判を直ちに浴びそうである。提案の理由や具体的方法を詳述しなければならないが紙数が尽きた。他の機会にゆずることでお許しいただきたい。

＜参　考　文　献＞

(1)　『慶應義塾図書館史』1972

(2)　石川博道“三田情報センターの展覧会”　KULIC, 11. 1978, p. 30-32

(3)　石川博道“三田情報センターの小展示”　KULIC, 12. 1979, p. 46-48

走れ，医学図書館員

西出 真紀子（にしで まきこ）

来年度4月1日をもって医学情報センターはメディアセンターと名称を変える。名前が変わるという事件は，人間でいえばお嫁にいく時くらいのものだから，それは人生の転機，生活が一変するくらいの気合が入っていなければなるまい。私も医学情報センターの一員であるから，当然気合が入っている。と同時に覚悟も決めた。

実は私は，何というか，痛々しいモノを見ると腰が抜ける。当然痛い話を聞いても腰を抜かす。世間一般の人々の内，どのくらいの人に私と同様の症状が現れるのか知らないが，少なくとも私の友人たちの中では私一人である。昔から怪我をしたとか，スプラッターな映画を観たとかいう話題が出ると，自然と友人たちの目は期待と共に私に注がれる。私は皆の注目の中，「ひてて。」という情けない声を立てつつ，手もしくは肘で体を支えなければならなくなるのだ。

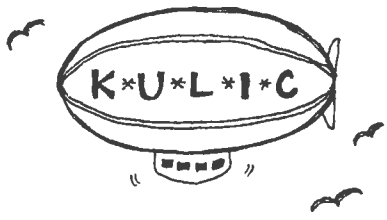
この事と私の覚悟とが一体どういう関係があるのかといえば，問題はメディアということにある。

メディアセンターというからには文字情報だけでなくメディア情報を扱う。特に何というわけではなく，当然マルチメディア情報である。音声，音楽，カラー写真，ビデオ画像等みんな含まれてしまうのだ。今でもメディア情報は扱っている。しかしこれらはまだマイノリティーなのである。これからいわゆる図書を扱っていた図書館がメディアセンターとなることによって，機器が増え，それもビデオウォークマンくらいの手軽さになり，利用者もその情報の価値に気付き，資料の購入が増え，需要も増え，出版社の供給が増え，出版のマルチメディア化が進み，メジャーになりそれが当たり前になったらどうしよう。今までカラーアトラスだった法医学や解剖学や，症例報告までもが，やはり映像の方がよろしいということになってビデオ出版ばかりになったらどうしよう。それが3Dだったりして，水死体や内臓が飛び出してきたりしたらどうしよう。さらにMEDLINEのようにCD-ROMで映像を検索できるようになり，映画の予告編のような抄録まで付いていて，検索結果に術医がメスをふるっているところとか，目を黒く塗られた患者少女Aが出てきて，しかもそれを情報検索講座とかいって利用者に教えなければいけなくなったらもう終わりだ。

そういえば今年の新人にYというのがいて，「ちょっと見てくださいよ。」と言いながら，やたら法医学や解剖学の本を眺めているのがいる。そうだ，若いYこそ来るべき将来に向けて教育されるべきだ。彼女ならうまくやるにちがいない。私は利用者教育はやめてKOSMOSのバージョンアップに走ろう。

KOSMOSも将来はアイコン，マルチウィンドゥで処理だ。一般貸出を開いていながら収金画面を開いて収金をし，その上メールも開いて見たり出来るようにしよう。メールは当然マルチメディア化だ。LANも構築して，ワークステーションをたくさんつなごう。先生方には無線携帯端末でも持って頂いて，督促や延滞料の請求もポケベル並にお知らせが届くようにしよう。そうしよう。

（医学情報センター情報サービス担当）



資料　I

研究・教育情報センターの刊行物

学術的な成果や大学の現状が大学を通じて刊行されている。大学は，その意味で，第三の出版社といえるかもしれない。また，大学刊行物は，大学の活動を世に広めるという働きから，大学公開の有効な手立てとなり得る。

義塾では現在，『三田評論』を筆頭に各種の刊行物が出され，塾外に配布されている。調べてみると図書館関係の刊行物も少なくない。なかには『慶應義塾図書館史』のように三百部以上も塾外に頒布されたものもある。

ここにKULIC編集委員会が調べた限りの図書館関係刊行物一覧を掲載することとした。塾内外に対するパブリックリレーションを念頭に置いた今後の出版計画を検討するよすがとしたい。

（1992年7月31日現在。各項目とも出版年順に配列）

1.　展覧会目録・パンフレット（開催日順）

福澤先生伝記完成記念展覧会目録／　図書館　1931年11月21日―23日　6，40，4，8，〔12〕，12p.

慶應義塾創立七十五年記念西洋経済思想史展覧会目録／　図書館　1932年5月9日―11日　67p.

百年祭記念ゲーテ展覧会目録　附ゲーテ年表／　図書館　1932年5月　14，12p.

編纂事業完成記念福澤先生展覧会出品目録／　図書館　1933年6月23日―27日　5p.

第十七世紀刊行経済文献展覧会目録／　図書館　1938年6月1日―5日　21p.

アダム・スミス没後百五十年記念展覧会目録（A List of Adam Smith's Works）／　図書館　1940年6月17日―22日　6p.

月岡芳年五十年忌記念展覧会目録／　図書館　1941年6月22日―24日　8p.

日本中国学会第4会大会記念　慶應義塾大学語学研究所・慶應義塾図書館所蔵　中国関係稀覯書展示書目／　語学研究所・図書館　〔1952年〕10月18・19日　7p.

慶應義塾図書館蔵　日本古刊本展観書解題／　図書館（解説：阿部隆一）　1954年4月24日―27日　56p.

日本古書目展観書解題／　図書館　（解説：阿部隆一）　1956年5月19日―22日　60p.

反町十郎君寄贈　武家文書展覧会解題目録／　図書館（執筆：阿部隆一）　1956年10月13日―15日　19p.

慶應義塾図書館蔵　日本中世文学資料展覧会目録／　図書館　1958年5月23日―25日　16p.

亀井南冥・昭陽著作展観書解題／　図書館　（解説：阿部隆一）　1959年1月20日―21日　78p.

東方学会主催第6回国際東方学者会議参加者歓迎展観書目録／　図書館　（斯道文庫編）　1961年5月27日　〔12〕p.

Exhibits from cultural properties of Keio University: in welcoming members of the Fourth General Conference of the International Association of Universities, September 4, 1965／　Keio University　1965年　36p.

福澤先生関係資料図書館所蔵古刊本展覧会目録／　図書館　1965年10月6日―8日　33p.

Jean-Paul Sartre, Simone de Beauvoir; Bibliographie à l'usage des étudiants publiée à l'occasion de l'Exibition organisée en hommage aux deux écrivains: M. Jean-Paul Sartre et Mme Simone de Beauvoir du 19 au 24 septembre 1966／　Keio Gijuku Toshokan　1966年9月　81p.

慶應義塾所蔵幕末伝来蘭・英書展示会　目録と解説／　図書館　1966年12月8日―10日　38p.

慶應義塾所蔵『資本論』刊行百年記念図書展示会目録／　経済学会・図書館　1967年11月7日―9日　29p.

重要文化財指定記念慶應義塾図書館蔵善本・稀本展示会目録と解説／　図書館　1968年12月12日―14日　26p.

江戸市民資料展／　三田情報センター　賛助：北里記念医学図書館　1970年5月25日―29日　〔4〕p.

没後十年野村兼太郎博士資料展／　三田情報センター　1970年6月25日―27日　〔4〕p.

新律綱領展覧会　発布百年記念／　三田情報センター　1970年10月14日―17日　〔4〕p.

六十周年記念三田文学展／　三田情報センター　1970年

11月10日—13日 〔2〕p.

『三田評論』創刊700号記念展覧会／ 三田情報センター 1971年1月19日—22日 〔2〕p.

明治初期慶應義塾資料展 三田移転百年記念／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1971年4月20日—22日 〔3〕p.

慶應義塾所蔵中世古文書展目録／ 三田情報センター（解題：高橋正彦） 1971年5月26日—29日 33p.

幸田成友著作集刊行に際し幸田成友名誉教授を偲びて／ 三田情報センター 1971年12月8日—10日 〔3〕p.

『学問のすすめ』発刊満百年記念展／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1972年5月17日—19日 〔4〕p.

ポール・A・サミュエルソン教授著書・翻訳書目録 附参考文献／ 三田情報センター 1971年10月 〔6〕p.

第14回蘭学資料研究大会『幸田文庫』日蘭通交史資料展／ 三田情報センター 1972年6月17日—19日 〔3〕p.

公害関係文献情報サービスと資料展展示目録／ 三田情報センター 1972年10月3日—6日 34p.

逝去五十年記念田中萃一郎博士資料展／ 三田史学会・三田情報センター，協賛：文学部・法学部 1972年11月10日—11日 〔3〕p.

初期日佛文化交流展 福澤諭吉とロニイを中心として／ 三田情報センター，賛助：文学部仏蘭西文学科 1973年10月15日—17日 〔3〕p.

アダム・スミス生誕250年記念展示会目録／ 経済学会・三田情報センター 1973年10月23日—26日 34p.

ローベルト・ムシル展／ 三田情報センター・日本独文学会・Robert-Musil-Archiv, Klagenful 共催 1974年5月10日—14日 〔3〕p.

三田演説会発会満100年記念「演説の発達に関する史料展」／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1974年6月5日—7日 〔3〕p.

慶應義塾図書館蔵本による目でみる日本文学の流れ／ 三田情報センター 1974年10月23日—25日 〔3〕p.

歴史人口学展／ 三田情報センター 協力：経済学部速水研究室 1974年11月13日—15日 〔4〕p.

「義塾に学んだ人々」展 特に明治維新以前を中心として／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1975年10月15日—17日 〔5〕p.

フランス官報とパリ・コミューン資料展目録＝〔L'Exposition de la Gazette nationale et de la Commune de Paris. Catalogue〕／ 三田情報センター・経済学会 1975年11月5日—8日 ii, 40p. 図〔1〕枚

福澤諭吉の生涯と生活展 その遺品を中心として／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1976年5月11日—14日 〔3〕p.

アメリカの独立宣言とトマス・ジェファソンに関する資料小展示 目録／〔三田情報センター〕 1976年6月28日—7月10日 〔5〕p.

コルディエ文庫 欧米人の中国研究書展示目録／ 三田情報センター・斯道文庫 1976年10月21日—23日 21p.

足尾鉱毒事件と田中正造資料展目録／ 三田情報センター 1976年10月27日—29日 〔2〕, 44p.

「義塾に学んだ人々」展（その二） 義塾命名から汐留出張所設置までの時期を中心として／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1976年11月17日—19日 7p.

「西南の役と慶應義塾」資料展／ 三田情報センター・塾史資料室 1977年5月25日—27日 〔4〕p.

慶應義塾図書館蔵 御伽草紙絵巻と絵入本 民衆文芸の開花／ 三田情報センター（執筆：松本隆信） 1977年10月12日—14日 〔3〕p.

エンゲルス「反デューリング論」（空想から科学へ）公刊百年記念小展示 目録と解説／ 三田情報センター 1977年11月 6p.

「義塾に学んだ人々」展（その三） 特に汐留出張所設置より三田移転まで／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1977年12月6日—8日 12p.

慶應義塾大学蔵 中世文学資料展／ 中世文学会・三田情報センター 1978年5月20日—23日 〔3〕p.

重要文化財指定記念 相良家文書展——鎌倉時代の文書を中心として／ 三田情報センター（解題：高橋正彦） 1978年10月25日—27日 10p.

小展示ヴォルテール，ルソー没後200年記念展示 1978年12月5日—20日

高浜虚子展／ 三田情報センター 1979年4月9日—11日 〔4〕p.

慶應義塾大学蔵 中世文学資料展／ 中世文学会・三田情報センター 1979年6月9日—12日 〔3〕p.

「義塾に学んだ人々」展（その四） 特に三田移転より明治5年2月まで／ 三田情報センター・塾史資料室共催 1979年12月5日—7日 8p.

慶應義塾図書館蔵 古地図展／ 三田情報センター（執筆：白石克） 1980年6月4日—6日 〔5〕p.

高橋誠一郎名誉教授著作目録（文化勲章受賞記念小展示に寄せて）／ 三田情報センター 1980年7月 11p.

慶應義塾図書館蔵　重要文化財指定相良家文書展／　三田情報センター　（協力：高橋正彦）　1980年10月16日―18日　〔3〕p.

William Caxton（ca.1422-91）と慶應義塾大学蔵　The Chronicles of England 刊行500年展／　中世の社会と文化総合研究会・三田情報センター共催　1980年11月12日―14日　〔5〕p.

浩宮様来臨記念　相良家文書展／〔三田情報センター〕　1981年3月31日　〔1〕p.

慶應義塾図書館蔵　江戸時代の都市図展／　三田情報センター　（執筆：白石克）　1981年5月26日―29日　8p.

慶應義塾図書館　田村魚菜文庫（旧称石泰文庫）展／　三田情報センター　（執筆：白石克）　1982年5月20日―21日　〔4〕p.

慶應義塾創立125年記念展覧会　高橋誠一郎浮世絵コレクション展示目録／〔三田情報センター〕　1983年5月10日―20日　〔1〕枚

折口信夫没後三十年記念著作展示目録／〔三田情報センター〕　1983年9月29日―10月15日　〔1〕枚

高橋誠一郎浮世絵コレクション小展示／〔三田情報センター〕　1983年10月24日―12月2日　〔1〕枚

「キャクストンとアーサー王伝説」展　マロリーの「アーサーの死」出版500年を記念して／　図書館・丸善共催　（企画・監修：高宮利行）　1985年7月15日―23日　24p.

哲学・科学思想の古典／　図書館　1987年5月18日―6月2日　12p.

女性開放思想の古典／〔三田情報センター〕（監修：白井厚）　1988年8月15日―9月3日　〔7〕p.

福澤諭吉の『帳合之法』とそれをめぐる資料展／〔三田情報センター〕（監修：会田義雄・丸山信）　1988年9月7日―30日　〔1〕枚

江戸庶民のこころ　浮世絵の美200年　高橋誠一郎コレクションから／　北海道立近代美術館，慶應義塾，札幌テレビ放送共催　1988年10月8日―11月13日　251p.

慶應義塾図書館所蔵稀覯本「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展目録／　図書館　協賛：丸善　（監修：大江晃）　1988年11月28日―12月3日　82p.

近世書誌データベースの試み／〔三田情報センター〕　1989年6月21日―30日　10p.

日本私立大学業務別研修（図書館関係研修）慶應義塾図書館蔵　西洋図書館史稀覯書展／　三田情報センター　1989年9月1日―7日　〔1〕枚

ジャン・コクトー生誕100年記念小展示目録　付慶應義塾図書館所蔵コクトー関係文献一覧／　三田情報センター　（作成：笠井裕之）　1989年11月6日―30日　44p.

サー・トマス・マロリー著『アーサー王の死』（1485年初版）とその影響／〔三田情報センター〕（監修：高宮利之）　1989年12月1日―20日　4p.

資料に見る日本食文化と食養史／　図書館　協賛：丸善　（監修：太田次男）　1990年1月29日―2月3日　71p.

三田文学ライブラリー所蔵資料による「三田の文人・六人展」／〔三田情報センター〕（監修：古屋健三）　1990年5月7日―7月14日

(1)『永井荷風』　5月7日―5月17日
(2)　久保田万太郎　5月18日―5月29日
(3)　水上竜太郎　5月30日―6月9日
(4)　佐藤春夫　6月11日―6月21日
(5)　折口信夫（釈迢空）　6月22日―7月3日
(6)　西脇順三郎　7月4日―7月14日

小展示　日本における経済学の生誕と慶應義塾／　福澤研究センター・三田情報センター　1990年8月15日―10月13日　16p.

小展示　我が国の近代法律学の確立と慶應義塾／　福澤研究センター・三田情報センター　1990年10月16日―11月17日　14p.

『国富論』初期の諸版　アダム・スミス没後200年記念小展示／　三田情報センター　1990年11月26日―12月8日

小展示　近代日本社会学の草創と慶應義塾／　福澤研究センター・三田情報センター　1991年1月14日―31日　14p.

梅田晴夫展／〔三田情報センター〕　1991年4月8日―20日　3p.

ウェーランド講述記念日とブラウン大学　ブラウン大学学長来塾記念展示／　三田情報センター　1991年5月9日―18日　2p.

佐藤朔展　平成2年度恩賜賞・日本芸術院賞受賞記念／　三田情報センター　1991年6月10日―26日　14p.

日本中世英文学会東支部第7回研究発表会開催記念　慶應義塾図書館所蔵　イギリス中世写本・初期印本　小展示／〔三田情報センター〕（解説：高宮利行）　1991年6月27日―7月2日

山中散生コレクション展　1920～30年代フランスの前衛芸術　慶應義塾日吉図書館所蔵　展示品目録／〔三田情報センター〕　1991年9月27日―10月15日　7p.

『三田文学』新編集長坂上弘展／〔三田情報センター〕

1991年10月16日—11月1日 〔3〕枚
文学上の偽物（1991年度「芸術と文明—本物と偽物」小展示）／〔三田情報センター〕（企画・執筆：高宮利行） 1991年11月2日—16日 4p.
「鷲ペンから印刷機へ」展 目で見る西洋写本文化と印刷文化 展示会目録／〔三田情報センター〕（解説：高宮利行） 丸善 1991年11月18日—23日 136p.
梅田晴夫展 Part Ⅱ（梅田政江様より三田文学ライブラリーへのご寄贈の資料による）展示目録／ 三田情報センター 1991年11月29日—12月10日 〔3〕p.
故宮崎康二君遺品受贈記念展示／ 三田情報センター 1991年12月11日—21日 〔2〕p.
「幻想作家泉鏡花」展 三田文学ライブラリー所蔵資料による 展示目録／ 三田情報センター 1992年1月8日—25日 8p.
ヴィクトル・ユゴー展 慶應義塾図書館新収コレクションによる初版本を主とした 展示目録／ 三田情報センター 1992年2月3日—3月19日 〔12〕 p.
俳人久保田万太郎展 展示目録／ 三田情報センター 1992年3月25日—4月30日 23p.
三田文学五人展 展示目録／ 三田情報センター 1992年4月18日—25日 35p.
詩人佐藤春夫展 展示目録／ 三田情報センター 1992年5月2日—14日 12p.
沢木四方吉関係資料展 展示目録 付サワキ文庫目録 美学開講百年にちなむ／ 三田情報センター 1992年5月18日—30日 24p.
宇野信夫追悼展 展示目録／ 三田情報センター 1992年6月1日—19日 11p.
池田弥三郎十年祭特別展示 展示目録／ 三田情報センター 1992年6月22日—7月10日 17p.
木口木版の華やかかりし頃 Edmond Evans とその周辺／〔三田情報センター〕（企画・執筆：武者小路信和） 1992年7月13日—25日 4p.
「近代イギリスの詩人たち」展／ 日吉情報センター 1992年7月22日—31日 〔2〕枚
日本の旧刊本 百万塔陀羅尼から室町刊本まで 第53回私立大学図書館協会総大会記念展示／ 研究・教育情報センター 1992年7月24日—29日 〔20〕p. 図36枚

2. 蔵書目録

〈三 田〉

慶應義塾図書館洋書目録／ 図書館 明治39年 iii, 418p.
慶應義塾図書館和漢図書目録／ 図書館 明治40年 2, 5, 212, 104p.
慶應義塾図書館和漢図書目録／ 図書館 明治45年 419, 107p.
慶應義塾図書館洋書目録／ 図書館 明治45年 531, 43p.
星文庫和漢書目録／〔図書館〕 52p.
Catalogue of the Hoshi Library／〔図書館〕 150 p.
Catalogue of the Keiogijuku Library (classified)／図書館 1929年 1701, 215p.
慶應義塾図書館和漢書図書分類目録／ 図書館 1936—1942年 5冊 第3巻無し
資料目録 昭和35.8.1現在 国内資料1／ 経済学部商学部資料室 1960年 255p.
慶應義塾大学雑誌目録 欧文編 1963／ 図書館〔1964年〕 171, 55p.
和漢資料目録 昭和40.9.1現在（1965.9.1）／ 法学部資料室 1965年 95p.
慶應義塾大学雑誌目録 和文編／ 図書館〔1967年〕 320p.
逐次刊行物リスト 欧文編／ 図書館定期刊行物課 1968年度（継続中） 13p.
小泉信三文庫目録／ 図書館・経済学部研究室 （編集：遊部久茂） 1969年 30p.
慶應義塾大学受入雑誌リスト（PICC）（年刊）／ 研究・教育情報センター 1974年度—
慶應義塾図書館分類目録 和漢書の部 1961年12月現在／ 三田情報センター 8冊 1977年
慶應義塾図書館分類目録 洋書の部 昭和36年12月現在 第1—8巻／ 三田情報センター 1977年 4冊
慶應義塾大学継続受入雑誌所在目録 予備版／ 三田情報センター 1978年 367p.
早稲田大学・慶應義塾大学欧文雑誌総合目録／ 早稲田大学図書館，慶應義塾大学研究・教育情報センター 2冊 1990年
松本文庫目録 松本信広名誉教授旧蔵書 慶應義塾図書館蔵／ 三田情報センター 1991年 177p.

〈日 吉〉

慶應義塾日吉図書館冊子体著者名目録1981—1990 平成3年3月現在／ 日吉情報センター 1991年 9冊
慶應義塾日吉図書館冊子体書名目録1981—1990 平成3年3月現在／ 日吉情報センター 1991年 9冊
慶應義塾日吉図書館冊子体分類目録1981—1990 平成3

年3月現在／　日吉情報センター　1991年　9冊
慶應義塾日吉図書館冊子体著者名目録　補遺版　1991—1992　平成4年3月現在／　日吉情報センター　1992年
慶應義塾日吉図書館冊子体書名目録　補遺版1　1991—1992　平成4年3月現在／　日吉情報センター　1992年

〈理工学〉
外国雑誌リスト　1966年3月末現在／　慶應義塾工学図書館　51p.
慶應義塾工学図書館所蔵学術雑誌目録　1968年版／　慶應義塾工学図書館　1968年7月　117p.
慶應義塾工学図書館受入雑誌リスト（欧文）　1969年7月1日現在／　慶應義塾工学図書館　19p.
慶應義塾工学図書館所蔵増加雑誌目録　1970年版／　慶應義塾工学図書館　1970年7月　80p.
松下記念図書館学術雑誌目録　1971年版／　理工学情報センター　1971年10月　178p.
学術雑誌目録　1977年版／　理工学情報センター　1978年3月　323p.
学術雑誌目録　1977追加・訂正リスト（1977/11—1981/5）／　理工学情報センター　1981年7月　28p.
学術雑誌目録　1984年版／　理工学情報センター　1985年2月　519p.
学術雑誌目録　1984別冊　露文雑誌編（邦訳誌名付）／　理工学情報センター　1986年3月　36p.

〈医　学〉
Classified list of current foreign periodicals on file in Kitasato Memorial Medical Library. Keio University.　1963年　52p.
フィルム・ライブラリー所蔵目録／　医学情報センター　1978年
外国医学雑誌所蔵目録／　医学情報センター　1972年　386p.
学術雑誌所蔵目録　1984年／　医学情報センター編　1985年　285p.
医学映画リスト　Vol.1, No.1—　附　医学レコード・ブック・リスト・語学ラボ・テープ・リスト／　北里記念医学図書館フォート・フィルム・センター　1965年　27p.
医学映画リスト　補遺／　北里記念医学図書館フォート・フィルム・センター　1965年　7p.
慶應義塾大学医学部北里記念医学図書館学術雑誌目録／　1940年　100p.
慶應義塾大学医学部図書館目録　1924／　1924年　91p.
慶應義塾大学医学部図書館目録　追加　自大正13年4月至大正14年3月／　1925年　22p.
慶應義塾大学医学部図書館目録　追加　1927年　20p.
慶應義塾大学医学部図書館目録　追加　自大正15年4月至昭和2年3月／　1928年　26p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書目録　1931／　1931年　345p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書目録　追加　自昭和4年4月至昭和6年3月／　1932年　101p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書目録　追加　自昭和6年4月至昭和7年3月／　1932年　74p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書目録　追加　自昭和7年4月至昭和8年3月／　1933年　55p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書目録　追加　自昭和8年4月至昭和9年3月／　1935年　51p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋図書目録　追加　自昭和9年4月至昭和10年3月／　1935年　39p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋図書目録　追加　自昭和10年4月至昭和11年3月／　1936年　79p.
慶應義塾大学医学部図書館和洋書雑誌目録／　慶應義塾大学医学部　1936年　79p.
古医書目録／　医学情報センター　1973年　126. 33p.
教室所蔵雑誌総合目録／　北里記念医学図書館　1964年　1冊
List of current foreign periodicals. Classified by language／　Kitasato Memorial Medical Library, Keio University　1964年　50p.
視聴覚資料リスト　ビデオ編　1987年1月現在／　医学情報センター編　1987年　67p.

3. 文献目録

＊研究・教育情報センター文献シリーズ
ＥＥＣ（ヨーロッパ経済共同体）に関する文献目録　1963年—1968年10月／　研究・教育情報センター本部事務室　（中村美世子編）　1969年　27p.（文献シリーズ No.1）
外国企業の日本進出に関する文献目録　1963年—1969年5月／　研究・教育情報センター本部事務室　（池ますみ編）　1969年　12p.（文献シリーズ No.2）
The bibliography of nationalism in tropical Africa　1957—1968／　研究・教育情報センター本部事務室　（朝倉幸子編）　1969年　30p.（文献シリーズ No.3）

地域研究（Area studies）文献目録　1958—1968／研究・教育情報センター本部事務室（北原圀彦編）1969年　29p.（文献シリーズ No.4）

中ソ論争文献集　1963—68／研究・教育情報センター本部事務室（山田映美等編）1969年　19p.　英文書名：The bibliography on the Sino-Soviet dispute 1963—68（文献シリーズ No.5）

アメリカの対アジア政策に関する国内文献目録　1963—1969年7月／研究・教育情報センター本部事務室（吉田尚子編）1969年　43p.（文献シリーズ No.6）

日中関係（政治・経済）文献目録　1962年—1969年／研究・教育情報センター本部事務室（高田秧子，羽田瑞穂，朝倉幸子編）1969年　14p.（文献シリーズ No.7）

アメリカの対アジア政策に関する外国文献目録／研究・教育情報センター本部事務室（伊藤安紀子，正木けい子，吉田尚子編）1969年　22p.　英文書名：English literature on the U.S. foreign policy to Asian countries（文献シリーズ No.8）

企業合併に関する外国文献目録／研究・教育情報センター本部事務室（杉本悦子，中村美世子，池ますみ編）1969年　35p.（文献シリーズ No.9）

手形法・小切手法／三田情報センター情報サービス担当（前嶋正子・石井由喜子共編）1971年　101p.（文献シリーズ No.10）

経済学関係記念論文集記事索引：単行本の部（個人編）昭和43年12月現在／三田情報センター　1971年　101p.（文献シリーズ No.11）

慶應義塾大学図書館所蔵　江戸期　地誌紀行類目録稿　含・寺社略縁起類／三田情報センター　1972年　ii，49p.（文献シリーズ No.12）

外国語辞書目録　アジア・アフリカ語編／三田情報センター　1973年　40p.（文献シリーズ No.13）

義塾図書館所蔵　寺社略縁起類解題／三田情報センター（執筆：白石克）1981年　41，4p.（文献シリーズ No.14）

尾張屋清七版　江戸切絵図　出場限朱引入／三田情報センター（執筆：白石克）1985年　13，〔62〕，17p.（文献シリーズ No.15）

慶應義塾図書館所蔵 George S. Bonn 蒐集　明治錦絵コレクション：The Nishikie (Ukiyoe) Collection of George S. Bonn: Meiji Era (1867—1912)／三田情報センター（執筆：白石克）1988年　31，32p.（文献シリーズ No.18）

慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図（1枚刷）上　関西／三田情報センター（執筆：白石克）1990年〔45〕，14p.（文献シリーズ No.19）

慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図（1枚刷）下　東海・関東・東北・その他／三田情報センター（執筆：白石克）1990年　13p.　図版23枚（文献シリーズ No.20）

慶應義塾図書館所蔵大阪町絵図　大阪北組旧蔵／三田情報センター（執筆：白石克）1992年　34p.（文献シリーズ No.21）

＊その他の文献目録

〈三　田〉

故新井由三郎遺書寄贈目録／図書館　大正11年　40，32p.

慶應義塾図書館狂歌書目録（昭和十六年秋調）／〔図書館〕1941年　27p.

慶應義塾図書館蔵　和漢書善本解題／図書館　1958年〔16〕，3，2，171，2，5p.

慶應義塾図書館所蔵　東南アジア文献目録／図書館　1966年　239p.

法学関係不定期刊資料記事索引（和漢資料編）昭和40年9月現在／法学部資料室　1967年　216p.

指定図書目録／図書館　1967年　20p.

国内政府刊行物　慶應義塾大学所蔵リスト（昭和46年7月—8月現在）／三田情報センター本部事務室　1971年　70p.

ポール・A・サミュエルソン教授著書・翻訳書目録／三田情報センター　1971年〔5〕p.

公害関係文献目録　—予備版—　昭和46年11月末現在／三田情報センター　1972年　23p.

慶應義塾大学所蔵　国際法関係基礎資料及び定期刊行物（欧文）／三田情報センター　1972年　12p.

会社法関係文献（邦文）／三田情報センター　1973年　21p.

手形法関係文献（邦文）／三田情報センター　1973年　5p.

外国法関係資料目録　法令集・判例集（収書整備基礎調査）／三田情報センター　1973年　50p.

医療の経済学文献集　1965—1974／研究・教育情報センター本部事務室　1975年　91p.　英文書名：Selective bibliography on medical economics, written in English and Japanese published in 1965—74

魚菜文庫（旧石泰文庫）目録　慶應義塾図書館所蔵／三田情報センター（執筆：白石克）1985年　55，22p.

〈医　学〉

プラスミン文献集／北里記念医学図書館；医学情報センター；国際医学情報センター（No.52 (1972.4)—）

No.1 (1962.12)—No.117 (1983)

Bibliography of library science and documentation／ 北里記念医学図書館；医学情報センター；国際医学情報センター (Vol.8, No.4 (1972)—) Vol.1 (1965)—Vol.9, No.12 (1973); 1974—1975.9?

図書館・ドキュメンテーション文献集／ 北里記念医学図書館；医学情報センター；国際医学情報センター (Vol.5 (1972)—) Vol.1 (1968)—6 (1973); 1974—1977.9?

医学教育文献速報／ 北里記念医学図書館；医学情報センター；国際医学情報センター (Vol.4, No.1(1972.6—) Vol.1, No.1 (1969.6)—Vol.7, No.6 (1976)

医学文献シラバス 1979年版／ 医学情報センター (佐藤和貴編) 1980.2 52p.

4. 図書館関係

(規定，マニュアル類は部外秘)

慶應義塾図書館貴重図書取扱内規／ 三田情報センター 4p.

新図書館計画のための調査 実態調査年次報告 昭和36年—昭和41年 (1961—1966)／ 新図書館計画実行委員会 1961年—1967年 24, 24, 20, 28, 24, 25p.

新図書館計画のための調査 利用者調査報告 (三田地区)／ 新図書館計画実行委員会 1962年 132p.

新図書館計画のための調査 利用者調査報告 (日吉，四谷，小金井)／ 新図書館計画実行委員会 1963年 303p.

新図書館計画のための調査 利用者調査報告 地区間比較／ 新図書館計画実行委員会 1963年 59p.

〔慶應義塾新図書館計画実行委員会〕利用分科会年次報告・整理分科会年次報告 昭和37年度 (1962)／ 新図書館計画実行委員会 1964年 99p.

〔慶應義塾〕図書管理・図書整理研究集会報告書 昭和38年度／ 新図書館計画実行委員会 1964年 139p.

〔慶應義塾新図書館計画実行委員会〕利用分科会年次報告・整理分科会年次報告〔2〕 昭和38年度 (1963)／ 新図書館計画実行委員会 1965年 117p.

〔慶應義塾〕図書管理・図書整理研究集会報告書〔2〕 昭和39年度／ 新図書館計画実行委員会 1965年 172p.

慶應義塾図書館目録規則 洋書編／ 研究・教育情報センター本部事務室 〔1968年〕 36p.

慶應義塾大学研究・教育情報活動実態調査 年次調査 昭和42年 (1967)／ 研究・教育情報センター本部事務室 1969年 149p.

慶應義塾大学研究・教育情報センター関係諸規定 (案)／ 研究・教育情報センター本部事務室 1969年12月 14p.

慶應義塾大学三田情報センターテクニカルサービス部マニュアル 1970年4月／ 三田情報センター 1970年 3冊

慶應義塾図書館史／ 三田情報センター (執筆：伊東弥之助) 1972年 348p.

慶應義塾公費による図書資料の発注・購入について (ご案内とお願い)／ 三田情報センター収書課〔197-〕年 12p.

三田情報センターの収書方針と第二次収書計画 昭和48—50年度／ 三田情報センター 1973年 85p.

学部図書費・特別図書費などによる図書資料の選定・発注・購入について (1973.4.1.)／ 三田情報センター収書課 1973年 19p.

選書と収書業務 学部図書・特別図書などの選定・発注・購入についてのご案内 第3版／ 三田情報センター収書課 1975年 21p.

選書と収書業務 学部図書・特別図書などの選定・発注・購入についてのご案内 第4版／ 三田情報センター収書課 1977年 22p.

三田情報センター図書資料発注・購入要項 (取引マニュアル)／ 三田情報センター収書課 1977年 25p.

慶應義塾図書館・新館／ 三田情報センター 1982年 〔13〕p.

慶應義塾図書館・新館 見学案内資料／ 〔三田情報センター〕 利用案内検討会 1989年—

スタッフ・マニュアル／ 北里記念医学図書館 1963年 75p.

スタッフ・マニュアル／ 北里記念医学図書館 1966年 1冊

図書館業務の機械化／ 北里記念医学図書館編 1967年 1冊

Library system／ 北里記念医学図書館；医学情報センター Vol.6, No.1 (1967.3)—Vol.11, No.1/2 (1972.7)

スタッフ・マニュアル 改訂版／ 北里記念医学図書館 1968年 1冊

医学情報センター将来計画委員会中間報告書／ 医学情報センター 1989年 1冊

5. その他の刊行物

木村摂津守喜毅日記／ 木村喜毅〔著〕 図書館編 監修：中井信彦・河北展生 塙書房 昭和52年 525p.

元禄京都洛中洛外大絵図／ 解題：白石克 勉誠社 1987年 折り込み図1枚，図4枚 26, 19, 11p.

医科大学における学術情報マネージメント／ 医学情報

センター（主任研究者 Nina Mathesdon 翻訳代表者 津田良成） 1987年 119p.
広重東海道五十三次 八種四百十八景 慶應義塾高橋誠一郎コレクション／ 白石克編 小学館 1988年 154 p.

6. 月報，年報，ニュース

慶應義塾大学図書館月報／ 図書館 1号（1954.5）—90号（1963.3）
慶應義塾図書館参考調査課レファレンスサービス 月報／ 図書館運用部参考調査課 No.1（1962.4）—Vol.8, No.5（1969.9—12）
慶應義塾図書館年報 附増加図書目録／ 図書館 大正5年度—10年度
慶應義塾大学図書館年報／ 図書館 1965—1966年
八角塔（年2回）／ 図書館 1号（昭和42.7）—6号（昭和45.3）
KULIC（年1回）／ 研究・教育情報センター 1号（1970）—

〔ニュース〕

〈三 田〉
Library news／ 三田情報センター No.0（1989）—

〈日 吉〉
INFORMATION（月刊）／ 日吉情報センター 1988年—

〈理工学〉
理工学情報センターニュース No.1（1982.7）—No.2（1983.4）
理工情セ Current news No.1（1987.6）
インフォメーション／ 理工学情報センター No.1（1989.11）—

〈医 学〉
Library news／ 北里記念医学図書館 Vol.1, No.1（1958）—No.3（1959）
きたさと／ 北里記念医学図書館 Vol.1（1963）—Vol.5（1966）
きたさとニュース／ 医学情報センター No.1（1976.9）—

7. 利用案内

〈三 田〉
＊ジェネラル版
図書館利用の栞／ 図書館 1954年 6p.
図書館を大いに利用しよう／ 図書館 1962年〔11〕p.
図書館利用ハンドブック／ 図書館 1964年—1968年
慶應義塾図書館利用案内／ 三田情報センター 1972年—1981年〔9〕p.
慶應義塾図書館・新館利用ガイド／ 三田情報センター 1982年—

＊スペシフィック版
慶應義塾大学研究教育情報センター概要書／〔三田情報センター〕〔4〕p.
三田情報センター『研究室書庫棟』利用案内／〔三田情報センター〕〔3〕p.
法学部資料室利用案内／ 三田情報センター法学部資料室〔1〕枚
しりょうしつ ごあんない／ 経済学部商学部資料室 1968年 12p.
慶應義塾図書館レファレンス・ルーム利用案内／ 三田情報センター情報サービス担当 1972年—1980年
図書館利用案内シリーズ（No.1—）／ 三田情報センター 1982年—

〈日 吉〉
藤山記念日吉図書館利用案内／ 日吉情報センター 1984年
慶應義塾日吉図書館／ 日吉情報センター 1985年 14 p.
慶應義塾日吉図書館利用案内シリーズ（No.1—16）／ 日吉情報センター 1992年 rev. ed.
学部生のための慶應義塾大学日吉図書館利用ガイド／ 日吉情報センター 1992年 17p.

〈理工学〉
慶應義塾大学理工学情報センター（松下記念図書館）利用案内／ 理工学情報センター 1992年版 12p.
理工学情報センター利用案内シリーズ(1) オンライン情報検索／ 理工学情報センター 4p.
理工学情報センター利用案内シリーズ(2) カード目録の使い方／ 理工学情報センター 1p.
資料の所蔵とその探しかた／ 理工学情報センター〔12〕p.

〈医 学〉
北里記念医学図書館新築記念／ 1927.11 12,〔16〕p.
慶應義塾大学医学情報センター（北里記念医学図書館）〔1982〕〔8〕p.
医学情報センター（北里記念医学図書館）／ 1983年

p.861—915「慶應義塾大学医学部六十周年記念誌」別刷り

Medical Library and Information Center 1986年〔6〕p.

慶應義塾大学医学情報センター（北里記念医学図書館）50年の歩み 1973—1987／ 医学情報センター編 1987.10 39p.

医学情報センター利用案内／〔医学情報センター 1988年〕4p.「きたさとニュース No.115（1988.4）」の抜き刷り

〈湘南藤沢〉

慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター利用案内／ 湘南藤沢メディアセンター 1992年 22p.

資料 II

研究・教育情報センターに関する書誌 1991.8〜1992.7

〔三 田〕

"学術論文，CD-ROM 化 慶大図書館と大日本印刷" **日経産業新聞** 1991.9.20 p.1

高宮利行 "慶應義塾図書館主催展示会「鵞ペンから印刷機へ」によせて" **慶應義塾大学報** Vol.26, No.7（通巻228号）p.2（1991.11）

"慶應義塾図書館・日本橋丸善共催稀覯書展示会「鵞ペンから印刷機へ——目で見る西洋写本文化と印刷文化」（催しかわら版）" **慶應義塾大学報** Vol.26, No.7（通巻228号）p.4（1991.11）

"洋古書——鵞ペンから印刷機へ（座談会）" **三田評論** No.930 p.4-17（1991.11）

渋川雅俊 "慶應義塾図書館の八十年" **塾** Vol.30, No.2（通巻172号）p.21（1992.4）

畔田藤治 "自由，壮麗，郷愁——慶應義塾図書館の八十年（グラビア）" **塾** Vol.30, No.2（通巻172号）p.17-20（1992.4）

大学図書館の管理と運営 岩猿敏生，大城善盛，浅野次郎著 日本図書館協会 1992.4 p.27, 28, 34, 84, 114

"絵はがきにみる慶應義塾図書館の稀覯書（山上広場）" **三田評論** No.938 p.90（1992.7）

〔日 吉〕

"ますます便利になる図書館を利用しよう" **慶應義塾大学報** No.232 p.2-3（1992.4）

"日吉キャンパス案内 図書館" **塾生案内 '92** p.11 塾生案内編集会議編 慶應義塾 1992.4

〔医 学〕

"コスモス（KOSMOS）の花が咲きました（しなのまち昨今）" **KEIO 医学部病院ニュース** No.111（1992.1）p.18

大学図書館の管理と運営 岩猿敏生，大城善盛，浅野次郎著 日本図書館協会 1992.4 p.166

〔湘南藤沢〕

"図書館結び互いに利用 藤沢市と慶応大の計3館，端末機で資料検索" **朝日新聞** 1991.9.3 朝刊 湘南版

"藤沢市立図書館——慶応湘南キャンパス図書館——明日から相互協力" **読売新聞** 1991.9.3 朝刊 湘南版

"藤沢市立図書館と慶應大学図書館——全国初のオンライン" **神奈川新聞** 1991.9.3 朝刊 湘南版

上田哲夫 "区書館長インタビュー 慶大図書館とオンライン協力——市民，学生が相互利用" **神奈川新聞** 1991.9.8 朝刊 湘南版

山田 実 "慶応義塾大学図書館との相互協力を開始しました" **こあ（神奈川県立図書館）** No.92 p.4（1991）

葉山 峻，高橋潤二郎 "大学とビジネスと地域の融合を考える" **ベストパートナー（浜銀総合研究所** Vol.3, No.9 p.34-49（1991）

"市と慶応大学図書館互いに利用 端末機で資料検索も" **広報藤沢** No.992 p.1（1991）

"藤沢市図書館と慶大湘南藤沢メディア・センター相互協力開始（NEWS）" **図書館雑誌** Vol.85, No.11 p.724（1991.11）

"図書館は情報の宝庫です" **広報藤沢** No.1012 p.4-5（1992）

金子康樹 "新館紹介 慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター" **大学図書館研究** No.39 p.86-91（1992.3）

資料 Ⅲ

スタッフによる論文発表・研究発表 1991.8〜1992.7

〔論文発表〕

〔三 田〕

東田全義 "慶應義塾の通信教育前史" **三色旗** No.523 p.27-30 (1991.10)

東田全義 "日仏開館図書室の書誌的機能" **日仏図書館学会ニュースレター** No.112 p.2-3 (1992.3)

東田全義 "慶應義塾図書館 書紀 SYO-KI: Le livre cannonique de l'antiquite japonaise, par Leon de Rosny, Paris, 1887 (わが館のフランス書の中から⑿)" **日仏図書館学会ニュースレター** No.114 p.7 (1992.5)

東田全義 "グイッチャルディーニ『イタリア史』フィレンツェ, 1561" **塾** Vol.30, No.3 表紙 p.3 (1992.6)

東田全義 "慶應義塾図書館 Claudin, A. Histoire de l'imprimerie en France au XVe et au XVIe siècle, Paris, 1900-1914. 4v. (わが館のフランス書の中から⒁)" **日仏図書館学会ニュースレター** No.116 p.7 (1992.7)

樋口洋子 "成長期における児童の読書興味の変化とモデル化" **図書館学会年報** Vol.37, No.4 p.166-178 (1991.10)

広田とし子 "オンライン ILL システムの動向" **相互協力研究分科会報告** 第4号 p.51-56 (1992.3)

市古健次 "情報収集戦略" **情報アクセスのすべて** 丸山昭二郎ほか編 日本図書館協会 1992 p.166-173

風間茂彦 "平成3年度 (第77回) 全国図書館大会への招待 第10分科会 利用のための資料保存" **図書館雑誌** Vol.85, No 9 p.615 (1991.9)

風間茂彦 "平成3年度 (第77回) 全国図書館大会ハイライト 利用のための資料保存" **図書館雑誌** Vol.86, No.1 p.23 (1992.1)

風間茂彦 "人種のモザイクの中の日本人 ニューヨーク学院の開設に携わって" **塾監局紀要** Vol.18 p.66-67 (1991)

風間茂彦 "「利用のための資料保存」(第77回) 全国図書館大会 第10分科会" **ネットワーク資料保存** Vol.32 p.1-4 (1992)

南野典子 "NLM で働く日本人" **医学図書館** Vol.38, No.4 p.430-431 (1991.12)

大沢 充 "アンブロワズ・パレット『外科全集』アムステルダム1655年 (秘蔵49)" **三田評論** No.931 p.88-89 (1991.12)

渋川雅俊 "プルタルコスの『英雄伝』" **塾** Vol.29, No.6 表紙 p.3 (1991.11)

渋川雅俊 "知識伝達の「革命」" **朝日新聞** 1991.11.15 夕刊 p.8

渋川雅俊ほか "21世紀の私立大学図書館はどうあるべきか (パネルディスカッション)" **私立大学図書館協会会報** No.97 p.112-132 (1991.12)

渋川雅俊 "慶應義塾図書館の八十年" **塾** Vol.30, No.2 p.21 (1992.4)

渋川雅俊 "聖マーチン修道院目録とボードリアン図書館目録" **「驚ペンから印刷機へ」展** 展示目録 p.11-12 (1991.4)

白石 克 "『暗厄利亜語林集成』江戸後期写本" **塾** Vol.29, No.5 表紙 p.3 (1991.10)

白石 克 "大阪町絵図——江戸中期写図" **塾** Vol.30, No.2 表紙 p.3 (1992.4)

山下光雄 "雑学集抜書" **塾** Vol.29, No.5 表紙 p.3 (1992.1)

梁瀬三千代 "書評・新刊紹介 一ノ瀬勝彦, 三輪真木子共著 亜米利加解読新書" **情報の科学と技術** Vol.41, No.10 p.806 (1991.10)

梁瀬三千代 "ART INDEX 収録誌の所蔵状況について 大学図書館を中心に" **アート・ドキュメンテーション通信** Vol.12 p.1-2 (1992)

梁瀬三千代 "書評・新刊紹介 上田修一著 書誌ユーティリティ：新たな情報センターの誕生" **情報の科学と技術** Vol.42, No.3 p.289-290 (1992.3)

〔理工学〕

小川治之ほか "外国雑誌の差別価格の実態" **大学図書館研究** No.39 p.63-69 (1992.3)

〔医　学〕

天野善雄　“日本複写権センターと医学図書館”　**医学図書館**　Vol.38, No.4　p.472-474（1991.12）

市古みどり，永崎由紀子　“図書館員の医学研究への接近：米国医学図書館協会1991年次大会報告”　**医学図書館**　Vol.38, No.3　p.324-331（1991.9）

村上篤太郎　“図書館評価におけるパフォーマンス指標による測定尺度の概念的枠組み”　**第26回医学図書館研究集会論文集**　p.237-241（1992.4）

村上篤太郎　“図書館利用券の配布について”　**KEIO医学部病院ニュース**　No.109　p.4（1991.11）

佐久間公子　“秋にはじめよう（みんなの広場）”　**KEIO医学部病院ニュース**　No.107　p.12-13（1991.9）

杉山良子　“わが国の医学雑誌の国際対応について”　**第18回医学図書館員セミナー論文集**　p.77-88（1991）

舘田鶴子　“アメリカの医学図書館：人・組織・サービス”　**医学図書館**　Vol.38, No.4　p.417-425（1991.12）

〔湘南藤沢〕

荒木純夫　“紙と電子の狭間で”　XINS ユーザー研究会　第6回応募論文集　#9211 23p.（1992）

金子康樹　“新館紹介　慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター”　**大学図書館研究**　No.39　p.86-91（1992.3）

金子康樹　“大学図書館とマーケティング”　**私立大学図書館協会会報**　No.98　p.111-114（1992.6）

〔研究発表〕

〔三　田〕

東田全義　“実務的書誌学”　西洋古版本研究分科会講演　1992.5.16　於慶應義塾大学図書館

広田とし子　“The world of Keio University Library: with a business emphasis”　Business librarians from for continent 1991.12.2-3　於 University of New South Wales, Austrarian Graduate School of Business, Sydney

広田とし子　“Multi media case study: accessing worldwide business information source”　同上

風間茂彦　“保存計画の立てかた：資料保存対策委員会の活動”　鶴見大学図書館学特別講座　1991.9.28　於鶴見大学

宮木さえみ　“差別価格と大学図書館：「国公私立大学図書館協力委員会差別価格問題ワーキンググループ」の活動”　平成3年度私立大学図書館協会東地区部会研究部会　1992.3.5　於慶應義塾大学矢上キャンパス

渋川雅俊ほか　“21世紀の私立大学図書館はどうあるべきか（パネルディスカッション）”　私立大学図書館協会総大会研究会　1991.8.1　於早稲田大学

〔理工学〕

小川治之　“外国雑誌の差別価格問題”　日本農学図書館協議会　1991.12.7　於東京農業大学図書館

小川治之　“差別価格問題の推移”　三田図書館・情報学会月例会　1992.1.25　於慶應義塾大学図書館

小川治之　“大学図書館の相互協力”　平成4年度文部省図書館員長期研修　1992.7.24　於慶應義塾大学図書館

小川治之ほか　“大学図書館における蔵書利用に関する計量的分析研究”　第53回私立大学図書館協会総大会・研究会　1992.7.29　於慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

〔医　学〕

天野善雄　“日本医学図書館協会の組織と活動”　第26回医学図書館員研究集会　1991.8.21　於帝京大学研究ハウス

市古みどり　‘UMLS（United Medical Language System）とその意義”　三田図書館・情報学会1991年度研究大会　1991.11.16　於慶應義塾大学三田キャンパス

舘田鶴子　“Exchange Program を通じての図書館員の国際交流”　第12回大学図書館研究集会　1991.11.28　於一橋大学兼松講堂

資料 IV

年次統計要覧 <平成3年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <平成3年度実績及4年度予算>

内訳 / 支部センター	平成3年度実績 <単位：円>			平成4年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	**639,098,680**	**3,745,006**	**642,843,686**	**665,610**	**4,012**	**669,622**
図書館	336,319,408	3,745,006	340,064,414	344,394	4,012	348,406
学部*	302,560,912	−	302,560,912	321,216	−	321,216
指定寄付	218,360	−	218,360	−	−	−
(私大研究設備相当額)	(22,334,830)	−	**	(23,005)	−	**
日吉情報センター	**155,718,000**	**3,921,000**	**159,639,000**	**160,536**	**2,177**	**162,713**
図書館	61,418,000	2,114,000	63,532,000	63,218	2,177	65,395
学部*	94,300,000	1,807,000	96,107,000	97,318	−	97,318
(私大研究設備相当額)	(7,594,000)	−	**	(7,822)	−	**
医学情報センター	**147,620,270**	**10,368,760**	**157,989,030**	**151,640**	**10,675**	**162,315**
〃	147,620,270	10,368,760	157,989,030	151,640	10,675	162,315
理工学情報センター	**139,827,243**	**2,972,564**	**142,799,807**	**146,473**	**3,083**	**149,556**
〃	139,527,243	2,972,564	142,499,807	146,473	3,083	149,556
指定寄付	300,000	−	300,000	−	−	−
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	−	**	(1,300)	−	**
湘南藤沢メディアセンター	**218,586,000**	**6,629,243**	**225,215,243**	**181,355**	**14,468**	**195,823**
〃	117,646,000	6,629,243	124,275,243	181,355	14,468	195,823
創設費	100,940,000	−	100,940,000	−	−	−
合計	**1,300,850,193**	**27,636,573**	**1,328,486,766**	**1,305,614**	**34,415**	**1,340,029**

注） * 特別図書費は含まず。
** ( ) 内は合計欄に加算せず。
私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したもの。

Ⅱ－1　蔵　書　統　計　<年間受入及び所蔵冊数>

内訳 / 支部センター		単行本 和	単行本 洋	単行本 計	製本雑誌 和	製本雑誌 洋	製本雑誌 計	非図書資料	合計
年間受入冊数	三田情報センター	13,591	24,290	37,881	6,420	6,220	12,640	6,524	57,045
	図書館	(7,793)	(14,147)	(21,940)	(3,937)	(1,458)	(5,395)	(2,279)	(29,614)
	学部	(5,798)	(10,143)	(15,941)	(2,483)	(4,762)	(7,245)	(4,245)	(27,431)
	日吉情報センター	11,903	6,393	18,296	2,109	2,006	4,115	889	23,300
	図書館	(9,193)	(416)	(9,609)	(1,499)	(112)	(1,611)	(157)	(11,377)
	学部	(2,710)	(5,977)	(8,687)	(610)	(1,894)	(2,504)	(732)	(11,923)
	医学情報センター	1,189	1,047	2,236	3,067	6,435	9,502	397	12,135
	理工学情報センター	1,702	738	2,440	1,388	3,575	4,963	75	7,478
	湘南藤沢メディアセンター	3,021	7,272	10,293	4,686	3,473	8,159	2,887	21,339
合計		31,406	39,736	71,146	17,670	21,709	39,379	10,772	121,297
所蔵冊数累計	三田情報センター	667,136	712,198	1,379,334	175,040	175,332	350,372	70,516	1,800,222
	図書館	(470,007)	(411,474)	(881,481)	(106,484)	(65,776)	(172,260)	(42,956)	(1,096,697)
	学部	(197,129)	(300,724)	(497,853)	(68,556)	(109,556)	(178,112)	(27,560)	(703,525)
	日吉情報センター	279,268	141,917	421,185	34,425	45,124	79,549	10,292	511,026
	図書館	(205,304)	(21,504)	(226,808)	(21,930)	(1,290)	(23,220)	(3,765)	(253,793)
	学部	(73,964)	(120,413)	(194,377)	(12,495)	(43,834)	(56,329)	(6,527)	(257,233)
	医学情報センター	34,203	37,167	71,370	53,068	106,543	159,611	3,090	234,071
	理工学情報センター	51,062	30,851	81,913	38,077	108,871	146,948	791	229,652
	湘南藤沢メディアセンター	43,653	43,894	87,547	5,288	4,745	10,033	7,781	105,361
合計		1,075,322	966,027	2,041,349	305,898	440,615	746,513	92,470	2,880,332

注１）　所蔵冊数（累計）は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。
　　２）　三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ－2 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 / 支部センター	カレント			ノンカレント			合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	5,538	4,233	9,771	5,375	2,884	8,259	18,030
図書館	(2,326)	(1,033)	(3,329)	(3,350)	(1,466)	(4,816)	(8,145)
学部	(3,212)	(3,230)	(6,442)	(2,025)	(1,418)	(3,443)	(9,885)
日吉情報センター	1,026	850	1,876	595	1,026	1,621	3,497
図書館	(607)	(60)	(667)	(234)	(24)	(258)	(925)
学部	(419)	(790)	(1,209)	(361)	(1,002)	(1,363)	(2,572)
医学情報センター	1,382	1,729	3,111	925	1,467	2,392	5,503
理工学情報センター	1,144	1,567	2,711	2,946	5,034	7,980	10,691
湘南藤沢メディアセンター	500	758	1,258	－	－	－	1,258
合計	9,590	9,137	18,727	9,841	10,411	20,252	38,979

参考データ：非図書資料

内訳 / 支部センター		種別	マイクロ資料 CD－ROM	A－V資料	合計
年間新規	三田情報センター	タイトル数	275	86	361
		箇数	6,310	214	6,524
	日吉情報センター	タイトル数	67	197	264
		箇数	523	375	898
	医学情報センター	タイトル数	1	9	10
		箇数	1	396	397
	理工学情報センター	タイトル数	0	8	8
		箇数	65	10	75
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	157	260	417
		箇数	2,532	355	2,887
累計	三田情報センター	タイトル数	1,309	7,672	8,981
		箇数	57,613	12,903	70,516
	日吉情報センター	タイトル数	407	2,561	2,968
		箇数	5,314	4,978	10,292
	医学情報センター	タイトル数	18	758	776
		箇数	446	2,644	3,090
	理工学情報センター	タイトル数	19	35	54
		箇数	620	171	791
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	159	640	799
		箇数	6,479	1,302	7,781

Ⅲ－1　利　用　統　計　<貸出及び閲覧冊数>

内訳 / 支部センター	館外貸出				館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	その他	計	一般図書	貴重書	
三田情報センター	14,814	142,441	6,652	163,907	*	906	1.04
日吉情報センター	7,138	100,835	10,928	118,901	*	－	1.09
医学情報センター	43,590	13,681	38	57,309	*	－	1.00
理工学情報センター	2,199	50,460	22	52,681	*	－	1.00
湘南藤沢メディアセンター	－	－	－	23,540	*	－	1.73
合計	－	－	－	416,338	*	906	1.07

＊開架のため実数不明。

Ⅲ－2　利　用　統　計　<相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 / 支部センター	依頼をうけた（貸）			依頼した（借）			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	3,084	9	3,093	827	310	1,137	4,230
日吉情報センター	316	1	317	233	6	385	702
医学情報センター	11,667	396	12,063	1,741	42	1,783	13,846
理工学情報センター	31,602	0	31,602	1,330	33	1,363	32,965
湘南藤沢メディアセンター	11	0	11	43	0	43	54
合計	46,680	406	47,086	4,174	391	4,711	51,797

参考データ：早慶 ILL

内訳 / 支部センター	貸	借
三田情報センター	710	342
日吉情報センター	48	88
医学情報センター	308	8
理工学情報センター	331	347
湘南藤沢メディアセンター	3	17
合計	1,400	802

Ⅲ－3 利 用 統 計 ＜複写サービス＞

内訳 / 支部センター	種別	学内 件数	学内 枚数	学外 件数	学外 枚数	合計 件数	合計 枚数
三田情報センター	電子コピー（オペレーター付）	4,196	76,616	2,913	3,807	7,109	119,349
	簡易印刷	164	182,594	0	400	164	182,594
	OHP・スライド作製	12	93	1	2	13	95
	電子コピー（セルフ式）	－	－	－	－	－	1,807,229
	マイクロフィルム	2	905	39	5,831	41	6,736
	ファクシミリ	－	－	－	－	5,170（送信）	4,386（受信）
日吉情報センター	電子コピー（オペレーター付）	334	1,369	－	－	334	1,369
	電子コピー（セルフ式）	－	－	－	－	－	267,568
	マイクロフィルム	31	545	1	15	32	560
医学情報センター	電子コピー（オペレーター付）	46,545	313,113	169,521	899,214	216,066	1,212,327
	OHP・スライド作製	1,219	5,522	－	－	1,219	5,522
	マイクロフィルム	59	185			59	185
	ファクシミリ	－	－	－	－	1,100（送信）	4,728（受信）
理工学情報センター	電子コピー（オペレーター付）	256	3,301	30,494	275,611	30,750	278,912
	OHP・スライド作製	302	1,063	－	－	302	1,063
	電子コピー（セルフ式）	24,683	393,058	1,075	33,966	25,758	427,024
	マイクロフィルム	56	1,386	11	280	67	1,666
湘南藤沢メディアセンター	簡易印刷	179	175,810	－		179	175,810
	OHP・スライド作製	21	1,558	－	－	21	1,558
	電子コピー（セルフ式）	－	－	－	－	－	117,306
	マイクロフィルム	－	－	－	－	－	520
	ファクシミリ	－	－	－	－	1,313（送信）	1,405（受信）

参考：電子コピー枚数

内訳 / 支部センター	オペレーター付	セルフ式	合計
三田情報センター	119,349	1,807,229	1,926,578
日吉情報センター	1,369	267,568	268,937
医学情報センター	1,212,327	－	1,212,327
理工学情報センター	278,912	427,024	705,936
湘南藤沢メディアセンター	－	117,306	117,306
合計	1,611,957	2,619,127	4,231,084

Ⅲ－4 利 用 統 計 ＜レファレンス・サービス＞

利 用 者 別

内訳 / 支部センター	学内者 教職員	学内者 学生	学外者	合計
三田情報センター	2,080	8,484	4,947	15,511
日吉情報センター	2,294	5,513	225	8,032
医学情報センター	1,464	698	2,724	4,886
理工学情報センター	1,173	3,821	2,901	7,895
湘南藤沢メディアセンター	146	1,463	10	1,619
合計	7,157	19,979	10,807	37,943

業 務 内 容 別

内訳 / 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田情報センター	7,225	451	7,766	69	15,511
日吉情報センター	2,032	999	4,996	5	8,032
医学情報センター	2,609	677	1,600	0	4,886
理工学情報センター	4,802	724	2,283	86	7,895
湘南藤沢メディアセンター	39	14	1,564	2	1,619
合計	16,707	2,865	18,209	162	37,943

編集後記

KULICは，その前身であった『八角塔』を含めると，25年間，図書館報として刊行されてきた。もともと本誌は，図書館サービスを塾生と塾教職員に広報する目的を担ってきたが，義塾の先進的な図書館運営とサービスが全国の大学図書館から注目されるようになると，図書館専門職の紀要，あるいは，専門誌として重視されるようになった。現在も，多くの寄贈依頼を受け，現在では2百余部が塾外に送付されている。

本年10月6日，義塾常任理事会は，情報センター，計算センター，湘南藤沢メディアセンターの三つの機関を統合し，これまでより広範な研究・教育支援を目指して，明年4月からメディアネットと各地区メディアセンターを発足することを決定した。新しい機構は，“書物も，情報も，情報処理法も”統合して，新しいコンセプトの下で学術情報サービスを展開することになる。

したがって，本誌は，この目標の下に編集内容はもとより，誌名を変更することになるが，本誌刊行の目的は変わるものではない。新たな展開の中でも，これまでのように，塾生・塾教職員，さらに全国の学術情報サービス関係者に重要なものであり続けるよう願っている。

（渋川雅俊）

編集委員＊情報センター本部　渋川雅俊＊三田情報センター　柴田由紀子　南野典子＊日吉情報センター　新井圭子＊理工学情報センター　角田浩子＊医学情報センター　杉山良子　市古みどり＊湘南藤沢メディアセンター　木藤るい